

平安京左京五条三坊七町跡・烏丸綾小路遺跡

—白楽天町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平安京左京五条三坊七町跡・烏丸綾小路遺跡

—白楽天町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

株式会社
イビソク

株式会社 イビソク

平安京左京五条三坊七町跡・烏丸綾小路遺跡

—白楽天町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



ヤコウガイ (土坑 6049 出土)

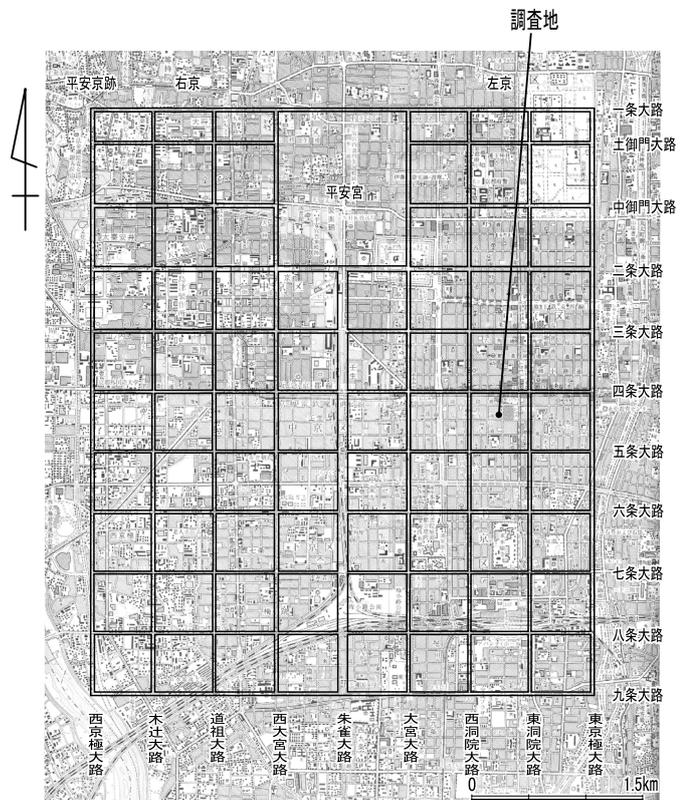
例 言

1. 本書は京都府京都市下京区室町通仏光寺上る白楽天町523-1、524、524-1に所在する平安京左京五条三坊七町跡・烏丸綾小路遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、文化財保護法第93条第1項に基づき平成27年4月3日付けで届出された土木工事に伴い、平成27年5月14日・6月8日に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が試掘調査を実施した結果、平安京跡に関連する遺構が検出されたため、同課により発掘調査の実施が指示されたものである。[京都市番号15H009]
3. 本調査は、集合住宅新築工事に伴う事前調査として、株式会社創生の委託を受けた株式会社イビソクが実施した。
4. 発掘調査は、平成27年8月19日から平成28年1月19日にかけて実施した。
5. 発掘調査は、京都府教育庁指導部文化財保護課、および京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言の下、株式会社イビソクが実施した。
6. 発掘調査は次の体制で行った。
調査主体 株式会社イビソク
調査員 熊谷洋一
調査補助員 伊藤雅哉・小山明美・石井明日香
8. 本報告書の編集は、小池智美・山田里美が行った。
7. 本報告書の執筆分担は、以下の通りである。
第1章 熊谷、第2章 小池、第3章 熊谷、第4章 第1～8・10節 小池、第2～7節 吉村晶、第8節 兼康保明、第9節 石井、第10節 熊谷、第5章 熊谷
8. 本報告書では次に示した地図を調整・使用している。
京都市地形図（1：2500）「三条大橋」「壬生」京都市都市計画局発行
9. 本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供をうけて作成した。
10. 本報告書で示す方位・座標は、国土座標第VI系（世界測地系）、水準値は東京湾平均海水面（T.P.）に基づく数値である。
11. 本報告書に掲載した写真は、遺構写真を熊谷が、遺物写真を横山亮（オフィスメガネ）が撮影した。
12. 報告書作成にあたり、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができた。
大堀皓平（沖縄県立埋蔵文化財センター）藤澤良祐（愛知学院大学）、藤原卓（公益財団法人益富地学会館）（五十音順／敬称略）
13. 出土遺物については、関連する図面・写真等の記録類と共に、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管している。

凡 例

1. 遺構・遺物写真の縮尺は任意である。
2. 遺構番号は各調査面の番号を頭一桁に付し、検出順に通し番号を後ろ三桁に割り当てた。その後、編集段階で遺構の性格を付与して表記した。
3. 表で示した出土遺物の計測値は、残存値に []、復元値に () を付けて表現する。
4. 遺物番号は、遺物実測図・観察表・遺物写真図版でそれぞれ対応している。
5. 本報告書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。
6. 出土遺物の年代は、小森俊寛氏の編年（小森2005、第1表）を基調とした。

奈良時代 (長岡京)	750	I 期古	律令的土器様式		
	800	I 期中			
	850	I 期新			
	平安時代	850	II 期古	前期平安京の土器様式	
		900	II 期中		
		950	II 期新		
		1000	III 期古		
		1050	III 期中		
		1100	III 期新		
	鎌倉時代	1150	IV 期古	後期平安京の土器様式	
		1200	IV 期中		
		1250	IV 期新		
1300		V 期古	前期中世京都の土器様式		
1350		V 期中			
1400		V 期新			
室町時代	1450	VI 期古	後期中世京都の土器様式		
	1500	VI 期中			
	1550	VI 期新			
	江戸時代	1600		IX 期古	前期近世京都の土器様式
		1650		IX 期中	
		1700		IX 期新	
1750		X 期古	後期近世京都の土器様式		
		X 期中			
		X 期新			



第1表 平安京土器形式一年代対応表

第1図 平安京復元図と調査地の位置

目 次

巻頭図版

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次・図版目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経過	
第3節 調査の方法	
第2章 位置と環境	3
第3章 遺 構	5
第1節 基本層序	
第2節 遺構の概要	
第3節 第1面の遺構	
第4節 第2面の遺構	
第5節 第3面の遺構	
第6節 第4面の遺構	
第7節 第5面の遺構	
第8節 第6面の遺構	
第9節 第7面の遺構	
第4章 遺 物	47
第1節 遺物の概要	
第2節 第1面の遺物	
第3節 第2面の遺物	
第4節 第3面の遺物	
第5節 第4面の遺物	
第6節 第5面の遺物	
第7節 第6面の遺物	
第8節 第7面の遺物	
第9節 金属製品	
第10節 石製品	
第5章 まとめ	73
出土遺物観察表・出土金属製品観察表・出土石製品観察表	
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	平安京復元図と調査地の位置	
第2図	調査地位置図（縮尺1/2500）	1
第3図	調査区配置図（縮尺1/400）	2
第4図	周辺調査位置図（縮尺1/2500）	3
第5図	北・東壁面図（縮尺1/100）	6
第6図	第1面全体図（縮尺1/150）	7
第7図	第2面全体図（縮尺1/150）	8
第8図	第3面全体図（縮尺1/150）	9
第9図	第4面全体図（縮尺1/150）	10
第10図	第5面全体図（縮尺1/150）	11
第11図	第6面全体図（縮尺1/150）	12
第12図	第7面全体図（縮尺1/150）	13
第13図	第1遺構面遺構図1（縮尺1/50）	16
第14図	第1遺構面遺構図2（縮尺1/50）	17
第15図	第2遺構面遺構図（縮尺1/50）	19
第16図	第3遺構面遺構図1（縮尺1/50、溝3017他は1/100）	21
第17図	土坑3156遺物出土状況	22
第18図	第3遺構面遺構図2（縮尺1/50）	23
第19図	土器溜り4098遺物出土状況	24
第20図	土器溜り4137遺物出土状況	24
第21図	第4遺構面遺構図1（縮尺1/50、溝4012は1/100）	25
第22図	第4遺構面遺構図2（縮尺1/50）	27
第23図	土器溜り5061遺物出土状況	29
第24図	土器溜り5062遺物出土状況	29
第25図	第5遺構面遺構図1（縮尺1/50）	30
第26図	土器溜り5127遺物出土状況	31
第27図	土器溜り5129遺物出土状況	31
第28図	土器溜り5153遺物出土状況	32
第29図	土器溜り5212遺物出土状況	32
第30図	土器溜り5213遺物出土状況	32
第31図	第5遺構面遺構図2（縮尺1/50）	34
第32図	第5遺構面遺構図3（縮尺1/50）	35
第33図	第6遺構面遺構図1（縮尺1/50）	37
第34図	第6遺構面遺構図2（縮尺1/50）	40

第35図	第6遺構面遺構図3 (縮尺1/50)	42
第36図	第6遺構面遺構図4 (縮尺1/50)	44
第37図	第7遺構面遺構図 (縮尺1/50)	46
第38図	第1面出土遺物実測図 (縮尺1/4)	48
第39図	第2面出土遺物実測図 (縮尺1/4)	49
第40図	第3面出土遺物実測図 (縮尺1/4)	50
第41図	第4面出土遺物実測図1 (縮尺1/4)	52
第42図	第4面出土遺物実測図2 (縮尺1/4)	53
第43図	第5面出土遺物実測図1 (縮尺1/4)	54
第44図	第5面出土遺物実測図2 (縮尺1/4)	56
第45図	第5面出土遺物実測図3 (縮尺1/4)	58
第46図	第6面出土遺物実測図1 (縮尺1/4)	61
第47図	第6面出土遺物実測図2 (縮尺1/4)	62
第48図	第6面出土遺物実測図3 (縮尺1/4)	64
第49図	第6面出土遺物実測図4 (縮尺1/4)	65
第50図	第7面出土遺物実測図1 (縮尺1/4)	66
第51図	第7面出土遺物実測図2 (縮尺1/4)	66
第52図	出土金属製品実測図 (縮尺1/2)	69
第53図	出土石製品実測図 (縮尺1/4、石4は1/2)	71
第54図	中昔京師地圖 (部分)	78

表 目 次

第1表	平安京土器形式一年代対応表	
第2表	周辺調査地一覧	4
第3表	遺構概要表	14
第4表	遺物概要表	47
第5表	ヤコウガイ貝殻片 (2cm以上) の部位別数量	76
第6表	出土遺物観察表	79
第7表	出土金属製品観察表	86
第8表	出土石製品観察表	87

図版目次

- 巻頭図版 ヤコウガイ (土坑6049出土)
- 図版一 1. 北1面 全景 (西から)
2. 南1面 全景 (西から)
- 図版二 1. 北2面 全景 (西から)
2. 南2面 全景 (西から)
- 図版三 1. 北3面 全景 (西から)
2. 南3面 全景 (西から)
- 図版四 1. 北4面 全景 (西から)
2. 南4面 全景 (西から)
- 図版五 1. 北5面 全景 (西から)
2. 南5面 全景 (西から)
- 図版六 1. 北6面 全景 (西から)
2. 南6面 全景 (西から)
- 図版七 1. 北7面 全景 (西から)
2. 南7面 全景 (西から)
- 図版八 1. 石組み1016 完掘 (南から)
2. 石組み1031 完掘 (北から)
3. 石組1040 断面 (西から)
4. 石組1040 (東から)
5. 埋め甕1062 (西から)
6. 集石1015 (東から)
7. 集石1015 完掘 (南から)
8. 集石1018 (北から)
- 図版九 1. 集石1025 (北から)
2. 集石1025 断面 (北から)
3. 集石1077 (東から)
4. 集石1111 (北から)
5. 集石1107 (東から)
6. 土坑1148 完掘 (南から)
7. 土坑1057 完掘 (北から)
8. 土坑1098 礫検出 (西から)
- 図版十 1. 土坑1098 完掘 (西から)
2. 集石2023 断面 (北から)
3. 集石2070 (南から)

4. 集石2099 (南から)
5. 土坑2037 完掘 (北から)
6. 合わせ口土師器皿2067 出土 (南から)
7. 土坑2113 出土 (北から)
8. 土坑2131 出土 (東から)

図版十一

1. 溝3017 完掘 (北から)
2. 溝3028 (西から)
3. 溝3031・3035 (西から)
4. 溝3036 (南から)
5. 溝3049・3064・3075 (南から)
6. 集石3033 (南から)
7. 集石3129 (南から)
8. 集石3129 断面 (北から)

図版十二

1. 集石3173 (南から)
2. 集石3050 (南から)
3. 集石3195 (東から)
4. 土坑3060 炭範囲 (北から)
5. 土坑3156 出土 (北から)
6. 土坑3161 出土 (南から)
7. 南3面礫出土 (西から)
8. 土器溜り4192 出土 (東から)

図版十三

1. 溝4012 (東から)
2. 集石4045 (北から)
3. 集石4059 (西から)
4. 集石4059 断面 (西から)
5. 石組4090 (北から)
6. 集石4156・4188 (南から)
7. 土坑4018 完掘 (北から)
8. 土坑4168 出土 (南から)

図版十四

1. 土器溜り5045 出土 (東から)
2. 土器溜り5069・5058・5083 出土 (東から)
3. 土器溜り5061 出土 (東から)
4. 土器溜り5062 出土 (東から)
5. 土器溜り5015 出土 (南から)
6. 土器溜り5127 出土 (南から)
7. 土器溜り5129 出土 (東から)

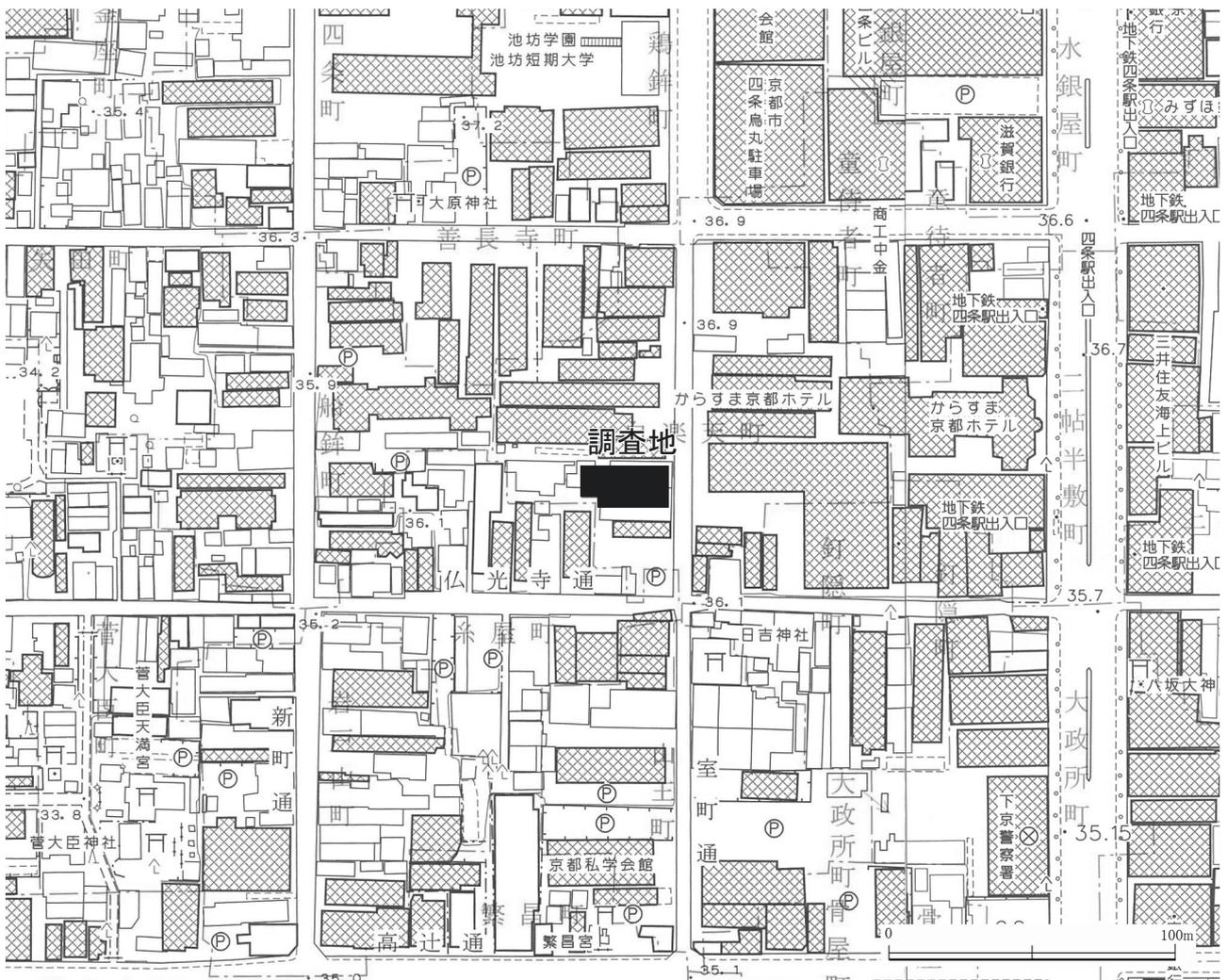
- 図版十五
1. 土器溜り5129 青銅鍋出土（東から）
 2. 土器溜り5139（南から）
 3. 土器溜り5153 出土（北から）
 4. 土器溜り5175 出土（北から）
 5. 土器溜り5212 出土（南から）
 6. 土器溜り5213 出土（西から）
 7. 集石5060（北から）
 8. 集石5073（南から）
- 図版十六
1. 土坑5009 炭化物検出（北西から）
 2. 土坑5111 完掘（西から）
 3. 土坑5126 完掘（西から）
 4. 土坑5172（北から）
 5. 土坑5178（東から）
 6. 土坑5186（東から）
 7. 土坑5188 出土（北から）
- 図版十七
1. 土器溜り6026 出土（北から）
 2. 土器溜り6028 出土（南から）
 3. 土器溜り6377 出土（西から）
 4. 土器溜り6377 完掘（西から）
 5. 土器溜り6505 出土（南から）
 6. 土器溜り6531 出土（北から）
 7. 土器溜り6541 出土（南東から）
 8. 土器溜り6559 出土（北から）
- 図版十八
1. 土器溜り6561 出土（北から）
 2. 土坑墓6117 出土（東から）
 3. 土坑墓6117 短刀出土（南東から）
 4. 土坑墓6165 出土（西から）
 5. 土坑墓6192 東側短刀出土（東から）
 6. 土坑墓6192 中央短刀・土師皿出土（西から）
 7. 土坑墓6192 出土（西から）
- 図版十九
1. 土坑墓6256 出土（南から）
 2. 土坑墓6342 遺物出土（西から）
 3. 土坑墓6376 出土（北から）
 4. 埋納6095 検出状況（南から）
 5. 埋納6095 土師皿出土（南西から）
 6. 埋納6095 鉢出土（東から）

7. 埋納6095 鉢下土師皿出土（東から）
 8. 土坑6275 出土（北から）
- 図版二十
1. 土坑6007 出土（東から）
 2. 土坑6137 出土（東から）
 3. 土坑6293・6294・6295（北から）
 4. 土坑6540（南から）
 5. 土坑6584 出土（北から）
 6. 竪穴状7030 完掘（北から）
 7. 流路出土（南から）
 8. 流路出土（南から）2
- 図版二十一
1. 出土遺物 1
- 図版二十二
1. 出土遺物 2
- 図版二十三
1. 出土遺物 3
- 図版二十四
1. 出土遺物 4
- 図版二十五
1. 出土遺物 5
- 図版二十六
1. 出土遺物 6
- 図版二十七
1. 出土遺物 7
- 図版二十八
1. 出土遺物 8
- 図版二十九
1. 出土遺物 9
- 図版三十
1. 出土遺物10
- 図版三十一
1. 出土遺物11
- 図版三十二
1. 出土遺物12
- 図版三十三
1. 出土金属製品 1
- 図版三十四
1. 出土金属製品 2
- 図版三十五
1. 出土金属製品 3
- 図版三十六
1. 出土石製品
- 図版三十七
1. 出土金属製品X線写真 1
- 図版三十八
1. 出土金属製品X線写真 2
- 図版三十九
1. 出土金属製品X線写真 3
- 図版四十
1. 出土金属製品X線写真 4
- 図版四十一
1. 出土金属製品X線写真 5

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

調査は集合住宅建設に伴う発掘調査である。調査地は、京都府京都市下京区室町通仏光寺上る白楽天町 523-1、524、524-1 に所在する、平安京左京五条三坊七町跡（遺跡番号1）・烏丸綾小路遺跡（同712）である。当該地において株式会社創生により集合住宅が建設されることになり、同社は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）へ、平成27年4月3日付で文化財保護法第93条第1項に基づく届出を行った。京都市文化財保護課はこれを受け、平成27年5月14日・6月8日に試掘調査を実施したところ、当該地に江戸時代以前の遺物包含層と遺構が残存していることが確認された（受付番号15H009）。そのため京都市文化財保護課から発掘調査の指導があり、調査については、株式会社創生から発掘調査の委託を受けた株式会社イビソクが実施することになった。株式会社イビソクは、文化財保護法第92条に基づき京都府教育委員会に埋蔵文化財発掘調査の届出をし、許可されたので平成27年8月19日より調査を開始した。



第2図 調査地位置図（縮尺1/2500）

第2節 調査の経過

発掘調査は、平成27年8月19日から平成28年1月19日まで実施した。京都市文化財保護の指導・監督の下、試掘調査の結果に基づいて調査区域を設定した（第3図）。調査面積は396㎡である。廃土置き場の関係上調査は、北側と南側で二つに分け反転調査を行う事とした。調査は北側から行い、北調査区終了後に南側の調査を行った。バックホウによる近代以降の堆積層の除去作業と並行して、攪乱の除去を行った。機械掘削後は、遺構検出面を精査して遺構検出を行った。第1面は、近世初頭を中心とする遺構の調査を行い、第2面～第4面では、室町時代、第5面は、鎌倉時代後期～室町初頭、第6面は、平安後期～鎌倉時代前期、第7面は、平安時代前期から中期の遺構と弥生時代中期から古墳時代前期の土器を伴う自然流路を確認した。北区及び南区の第7面調査終了後に各調査区中央にトレンチを設定し掘削した。その結果、第7面より下層には、遺構・遺物が包含されていないことを確認した。それぞれの遺構面の検出時と完掘時には、京都市文化財保護課の検査を受けた。

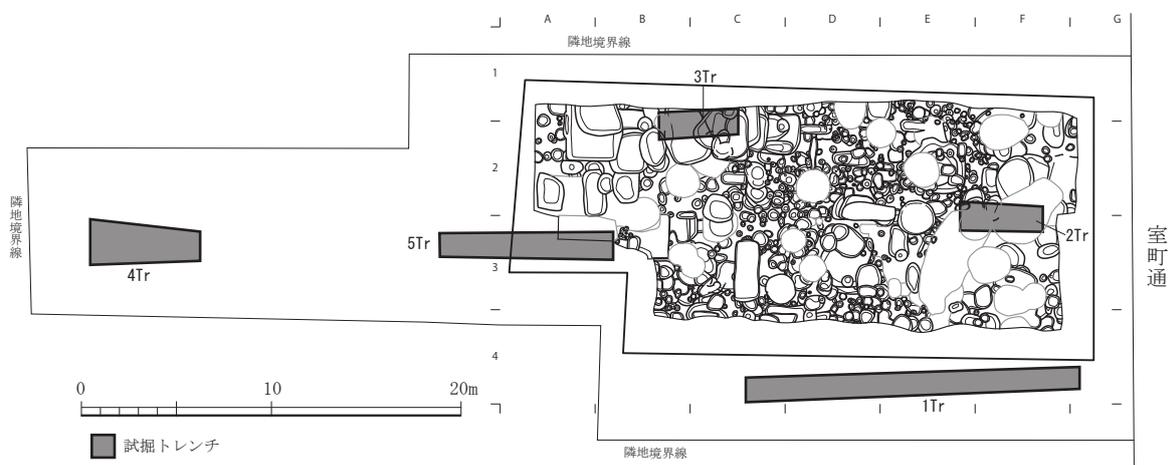
第3節 調査の方法

表土掘削は、重機によって行い、試掘データに基づき第1面まで掘削した。また、同時に攪乱埋土を除去した。

遺構検出と並行して、遺構配置図を作成し、遺構の配置や重複する遺構の新旧関係等の把握に努めた。遺構の記録作業は、土層断面図等を基本的に手実測で行い、平面図は、トータルステーションを用いて行った。また、土層断面、微細図等は、必要に応じて写真測量を行った。遺構の位置関係と遺物の取り上げのため座標に合わせて東西方向に西からAからG、南北方向に北から1から4の5mグリッドを設定した。遺構番号については、各面の番号を最初に付加し、その後001からの通し番号を付加した。

遺構実測図と遺物実測図は、デジタルトレースを行い、現場計測図面と合わせて編集を行った。編集に伴って各遺構を検討し、遺構の性格付けを行った。

出土した遺物は、洗浄、注記、接合の後にランク分けを行い、実測対象検討遺物（Bランク）を抽出した。報告書掲載遺物（Aランク）は、掲載順にコンテナに収納し、非掲載遺物（Cランク）は遺構番号順にコンテナに収納した。



第3図 調査区配置図（縮尺1/400）

第2章 位置と環境

調査地は、北を綾小路通、南を仏光寺通、東を室町通、西を新町通に挟まれた区画の南東に位置し、室町通に面している。

当地は弥生時代から古墳時代まで継続する大規模な集落跡である烏丸綾小路遺跡の北部に位置する。周辺の調査では、環濠と考えられる溝や方形周溝墓、竪穴建物等が検出されている。

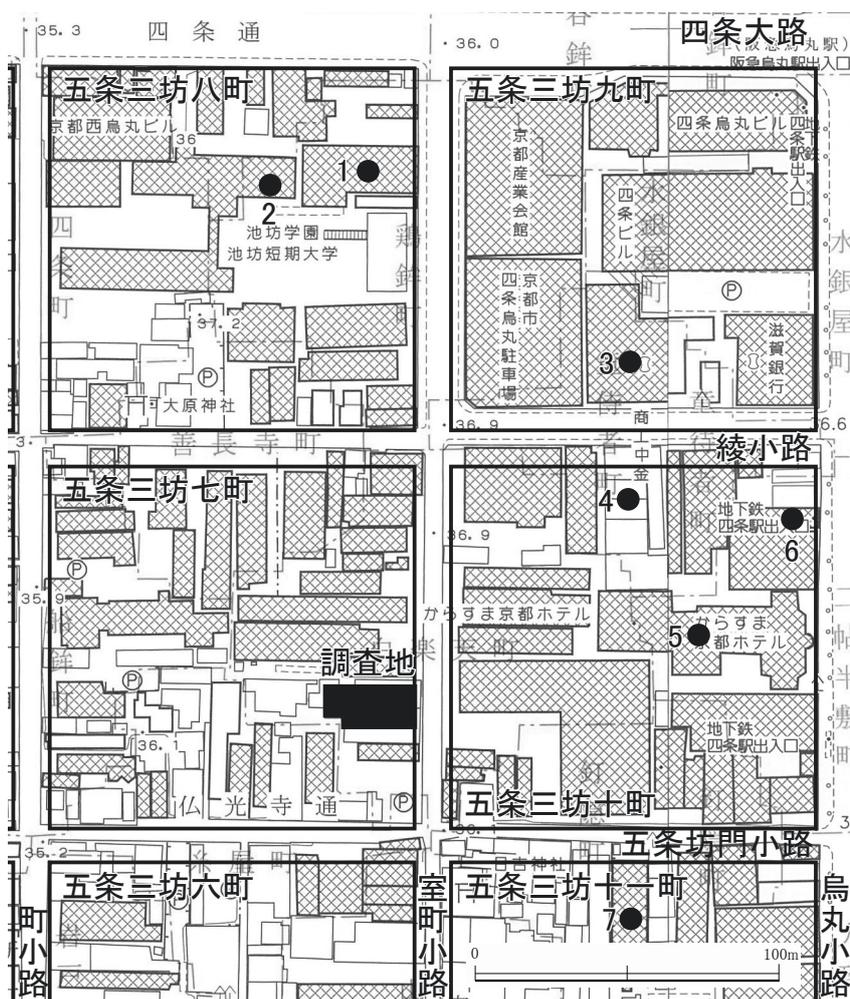
平安京の条坊では左京五条三坊七町に当たる。平安時代のこの町に関する明確な記録は無いが、平安時代中期から後期には、周囲の町には菅原道真の邸宅紅梅殿・白梅殿、藤原公任邸の四条宮、藤原親隆邸等大規模な邸宅が存在していた。

『鎌倉遺文』7161号には、鎌倉時代前期にこの町の南部にあった土地が「尼しんしょう」なる女性からその次男の右馬允藤原能光に譲られた記述がある。

中世には、四条大路以南は商工業の中心地として発展し、特に室町通は土倉・酒屋が建ち並び、経済の中心地として機能していた。調査地周辺でも酒屋の跡と考えられる遺構が多く確認されている（第4図2）。また、周辺からは中世の土葬墓とみられる遺構も多く発見されている。四条室町は「鉾の辻」とも呼ばれるように、祇園御霊会における山鉾町の集中する地域である。それは町衆の自治の発展に加え、このような経済基盤が背景にある。調査地周辺も町名が示す通り山鉾町であり、『祇園社記』に応仁の乱後の明応九年（1500年）、山鉾巡行再興時の記述に白楽天山の名がみえる。

江戸時代前期の地図・地誌等では当地は「松本町」と表記されることが多く、それはこの地に室町末期に松の木があり松本宗悟という茶人が住んでいたことによるという（『山城名勝志』）。また、松本町には菓子屋が多く、洲浜、興米の店が『京雀』『雍州府志』等に紹介されている。

また、室町通は江戸時代



第4図 周辺調査位置図（縮尺 1/2500）

から現代まで繊維を中心とした卸問屋の多い地域であり、その分布は時代が下るにつれ南下する傾向にある。調査地周辺も明治から昭和にかけて繊維卸業者が増えており、昭和初期の『京都市明細図』では繊維や呉服の卸業者が軒を連ねている様子がみられる。現在でも繊維問屋街として著名な地域である。

第2表 周辺調査地一覧

番号	条坊	概要	文献
1	五条三坊八町	弥生時代中期の溝、平安時代の井戸・土坑・柱穴、鎌倉～室町時代の井戸・祭祀土坑・溝・柱穴、桃山～江戸時代の井戸・土坑・柱穴・建物・石室を検出。緑釉陶器鉢・元文小判・雲母等が出土。	『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
2	五条三坊八町	弥生時代の自然流路、平安時代の溝、室町時代の方形土坑、布掘り溝、石組井戸を検出。鉄製鋤先等が出土。	『平安京跡研究調査報告第19輯 平安京左京五条三坊八町』財団法人古代学協会
3	五条三坊九町	弥生時代中期の溝、平安時代の建物・井戸・土坑、鎌倉～室町時代の地下式倉庫・礎石列・井戸・土葬墓、桃山～江戸時代の礎石列・石組溝・石室・井戸を検出。土葬墓に伴って短刀・青銅鍋等が出土。	『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-10』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
4	五条三坊十町	弥生時代の堅穴住居・土坑、古墳時代の堅穴建物・溝、平安時代後期の井戸・柱穴、室町時代前期の風呂・カマド・土坑、室町時代後期の庭・土坑、江戸時代の礎石列・井戸・三和土等を検出。	『平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-7』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平成27年度 京都市内遺跡発掘調査報告』京都市文化市民局
5	五条三坊十町	古墳時代の円形周溝状遺構・堅穴建物、平安時代のピット・土坑・井戸、鎌倉～室町時代の土壇・井戸・ピット・柵列・墓・溝、桃山～江戸時代の井戸・土坑・ピット・溝等を検出。銅製品・鋳型が多数出土。	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
6	五条三坊十町	古墳時代の堅穴建物、平安時代の井戸・土坑、鎌倉～室町時代の柱穴・土坑、江戸時代の柱穴・土坑等を検出。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
7	五条三坊十一町	弥生時代の遺物包含層、平安時代の溝・土坑、室町時代の土坑・土取り穴、江戸時代の井戸・土坑・トイレ遺構等を検出。	『平安京左京五条三坊十一町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-7』財団法人京都市埋蔵文化財研究所

第3章 遺構

第1節 基本層序（第5図）

調査地の現況はほぼ平坦で、地表面の標高は36.5～36.6mである。現地表面から約80cm下で、第1面である近世の整地層に達する。地表面から第1面までの間にも、近世の整地層が3層から4層認められる。第1面整地層は、約10～20cmの厚さで堆積する。灰褐色泥砂を基調とし、焼土や炭化物が認められる。標高は、約35.4mである。第1面から約20cm掘り下げると第2面整地層が、約10～20cmの厚さで堆積する。褐灰色泥砂を基調とし焼土粒子、炭化物粒子が多く認められる。標高は、35.2～35.3mである。さらに約10cm掘り下げると室町時代後期の第3面が確認される。層厚は、約10～20cmで、灰褐色泥砂を基調とする。部分的に黄褐色粘質土で堅く突き固められた整地層が認められる。標高は、約35.1mである。さらに約20cm下げると、室町時代後半の第4面となる。層厚は、約20cmで、褐灰色泥砂を基調とする。標高は、約34.9mである。次に20cm下げると、鎌倉時代後半～室町時代前半の第5面となる。層厚は約20cmで、褐灰色泥砂を基調とする。標高は約34.7mである。部分的に粘質土を突き固めた整地層が認められる。さらに20～30cm下がったところで、平安時代のオリーブ黄色の整地層が確認される。層厚は約30cmで、粘性、しまり共に強い。第6面では、平安時代後期に加え、鎌倉時代前期の遺構も確認された。標高は、34.4mを測る。この平安期の整地層を除去すると、地山に達する。この地山面では、平安時代前期および烏丸綾小路遺跡に関連する遺構を検出した。今回の調査においては、調査区東端から約10m西の地山面上で北東から南東へ延びる流路の肩を確認した。この流路では、鉄分を多く含む黄褐色土が約40～50cm程度堆積し、その下には砂礫層が広がっていた。砂礫層上面からは、弥生時代中期から古墳時代前期の土器が出土した。遺物が出土した標高は33.6m前後を測る。

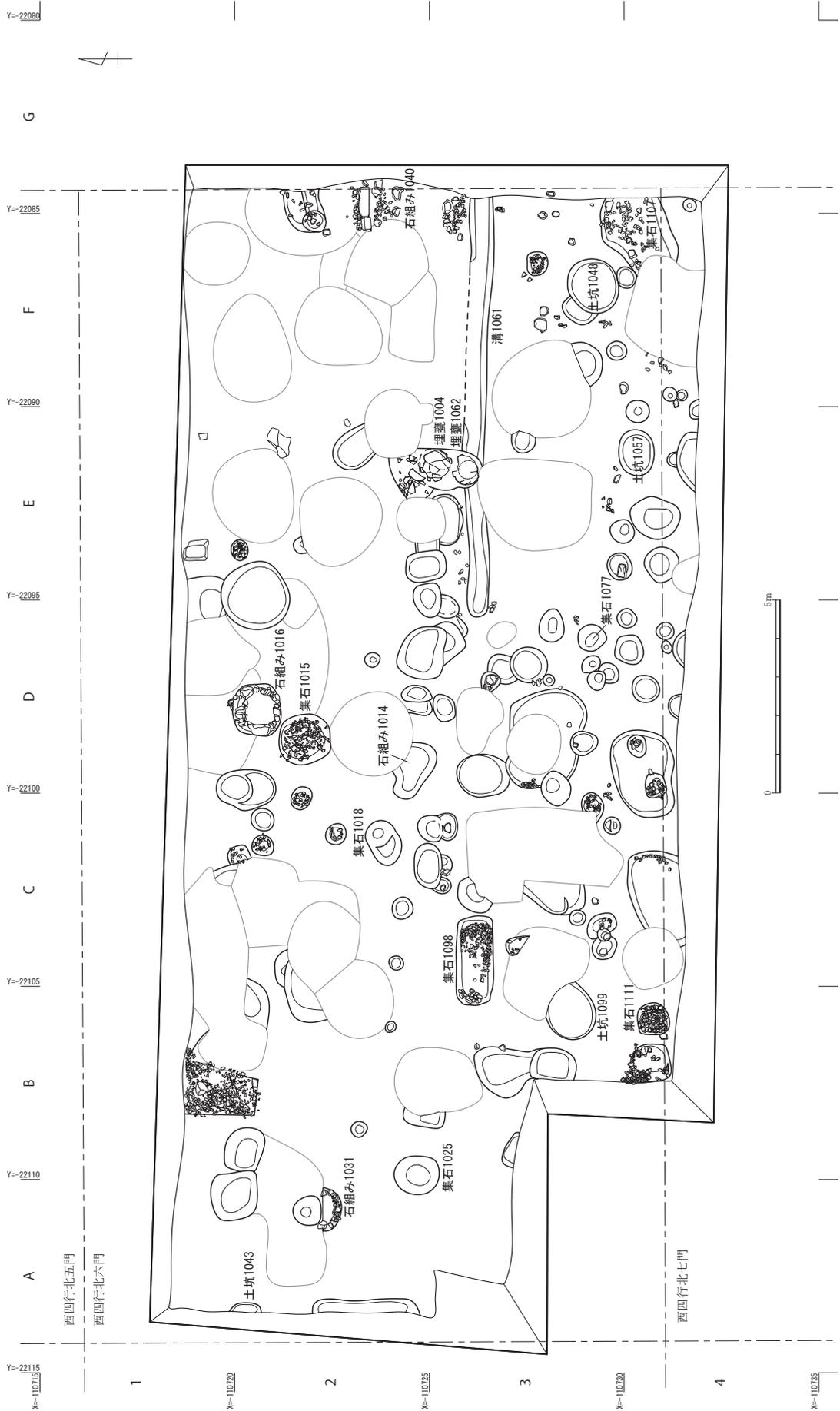
第2節 遺構の概要

今回の調査は、1～7面の調査を行った。各面共に、必ずしも同じ時代の遺構が確認できたわけではない。上層で見極められなかった遺構を下層面で検出する場合も多くあった。

第1面では、集石遺構、埋め甕遺構、井戸状に組まれた石組遺構や溝状に組まれた石組遺構等を検出した。また、検出は4面であったが第1面で形成された6枚の古寛永通寶を伴う円形土坑を検出している。攪乱によって失われている部分が多く明確な建物等は確認できなかった。

第2面では、調査区南側において、幅約1mで、東西に約10m延びる硬化面や集石遺構を検出した。東西に延びる硬化面は、路地等の可能性が考えられる。また、この硬化面の南際には礎石等の礫が東西に沿うように並ぶ。この他、土坑、ピットを検出しているが、明確な建物等は検出できなかった。

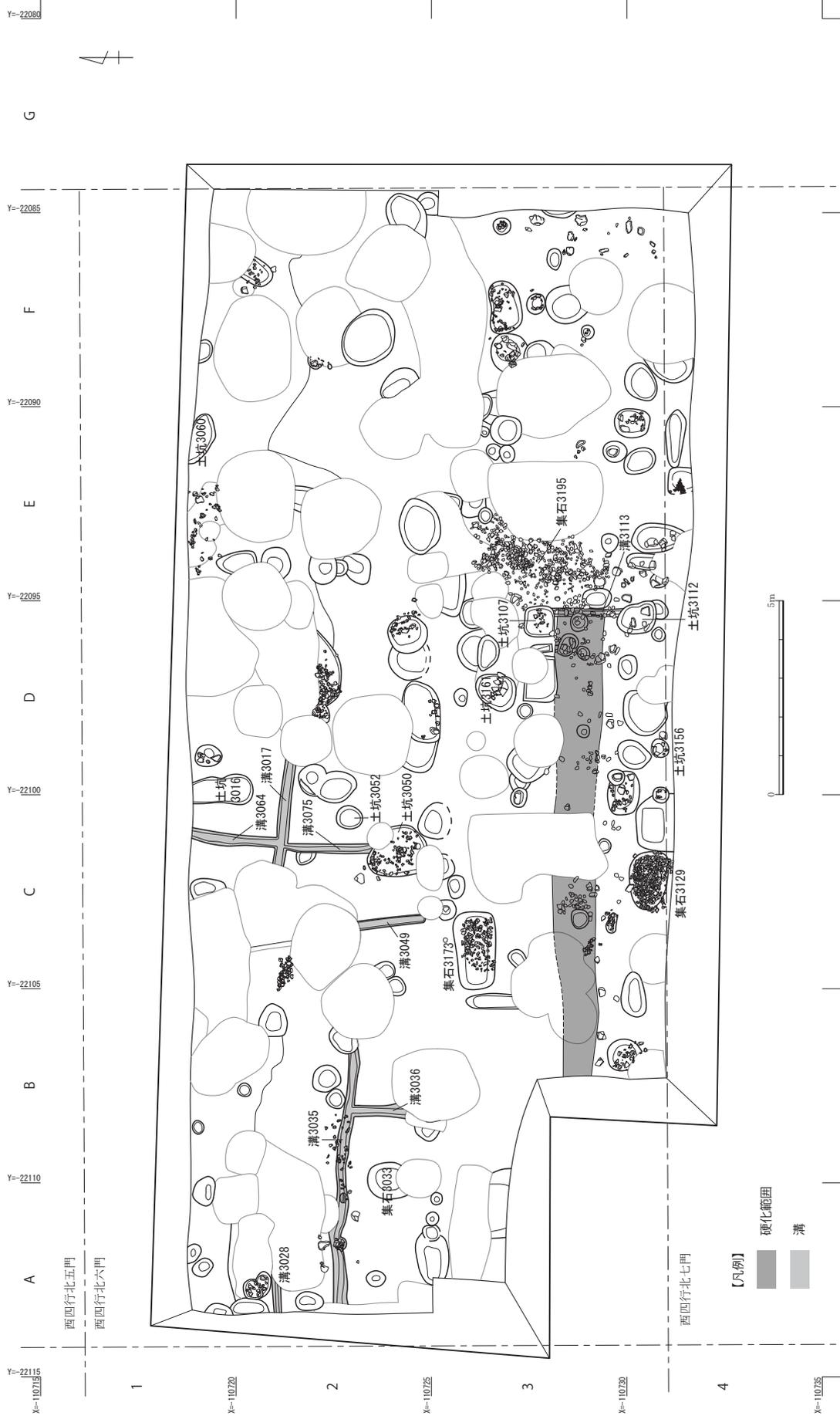
第3面では、区画溝と考えられる幅20cm程の、東西および南北に走る溝が検出されている。また、調査区南側においては、東西方向に走る幅1.2mほどの硬化面を検出した。通路等の可能



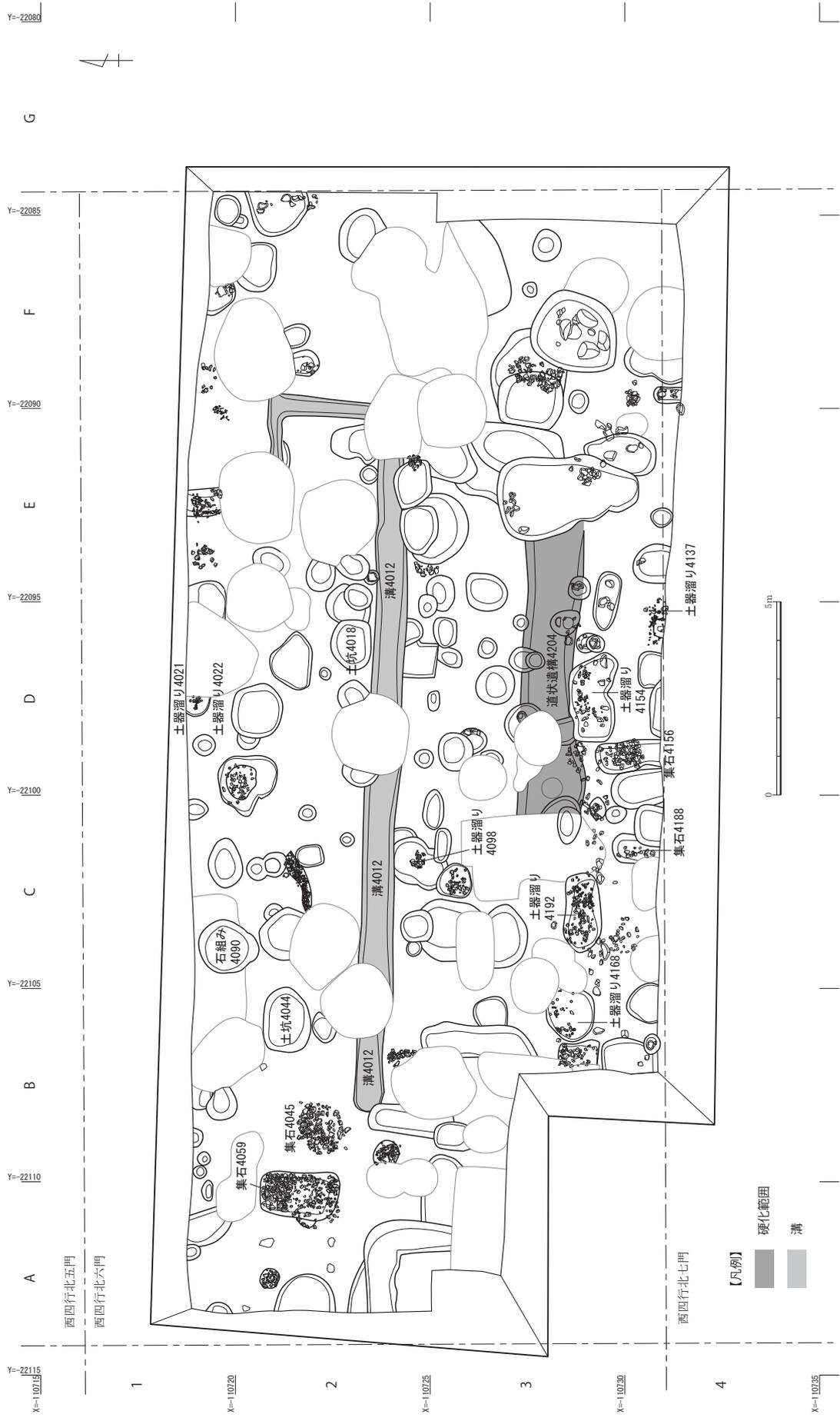
第6図 第1面全体図 (縮尺 1/150)



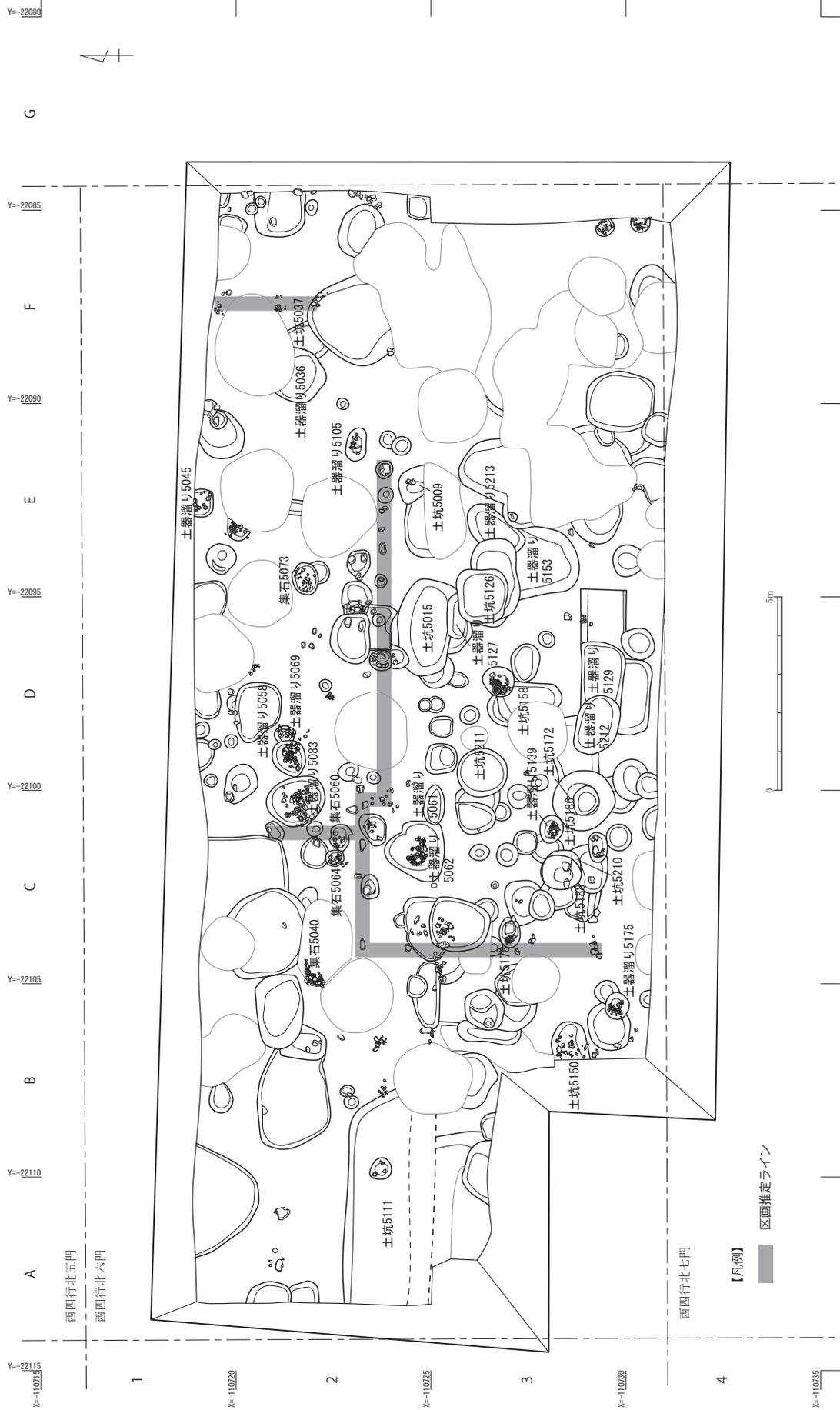
第7図 第2面全体図（縮尺 1/150）



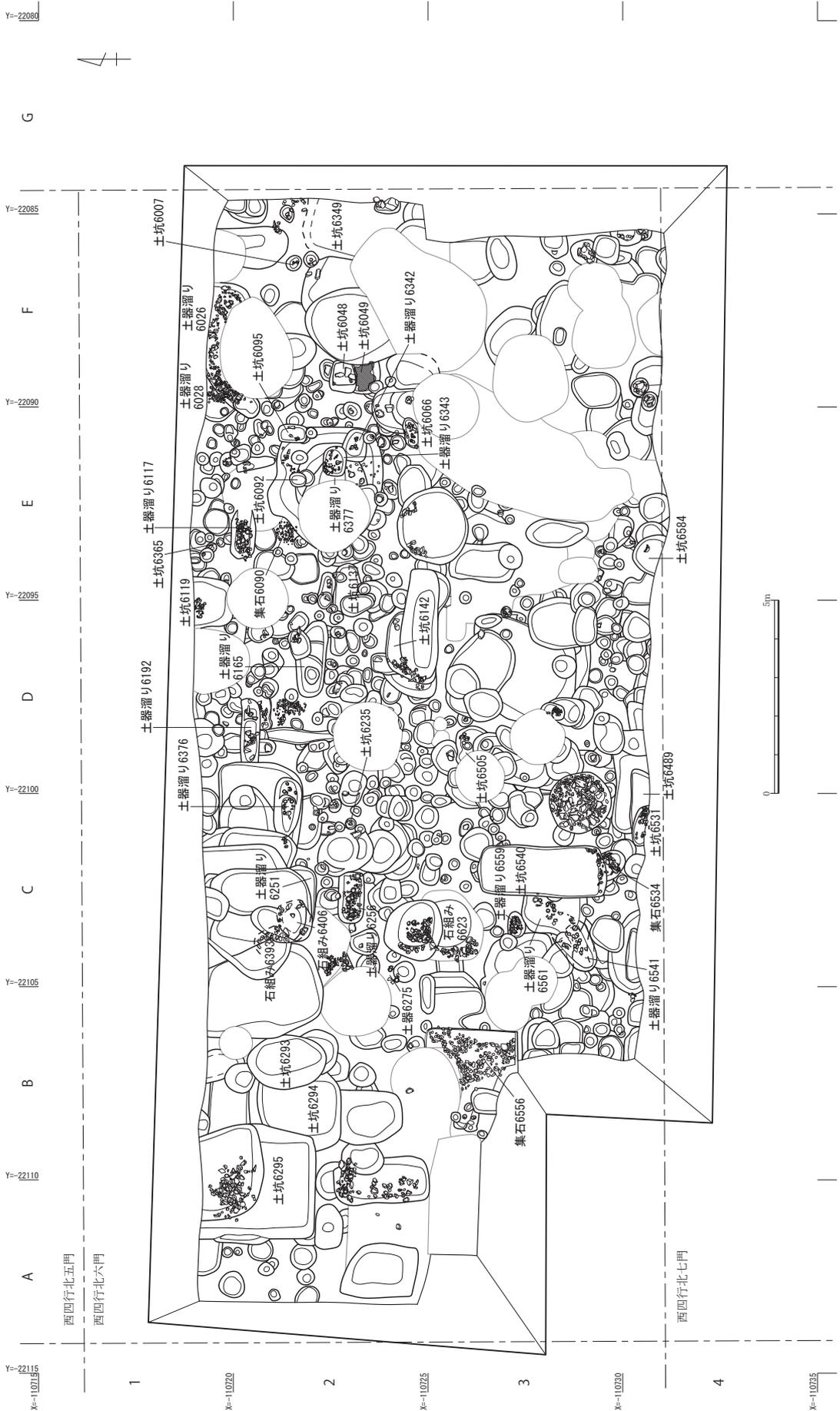
第8図 第3面全体図 (縮尺 1/150)



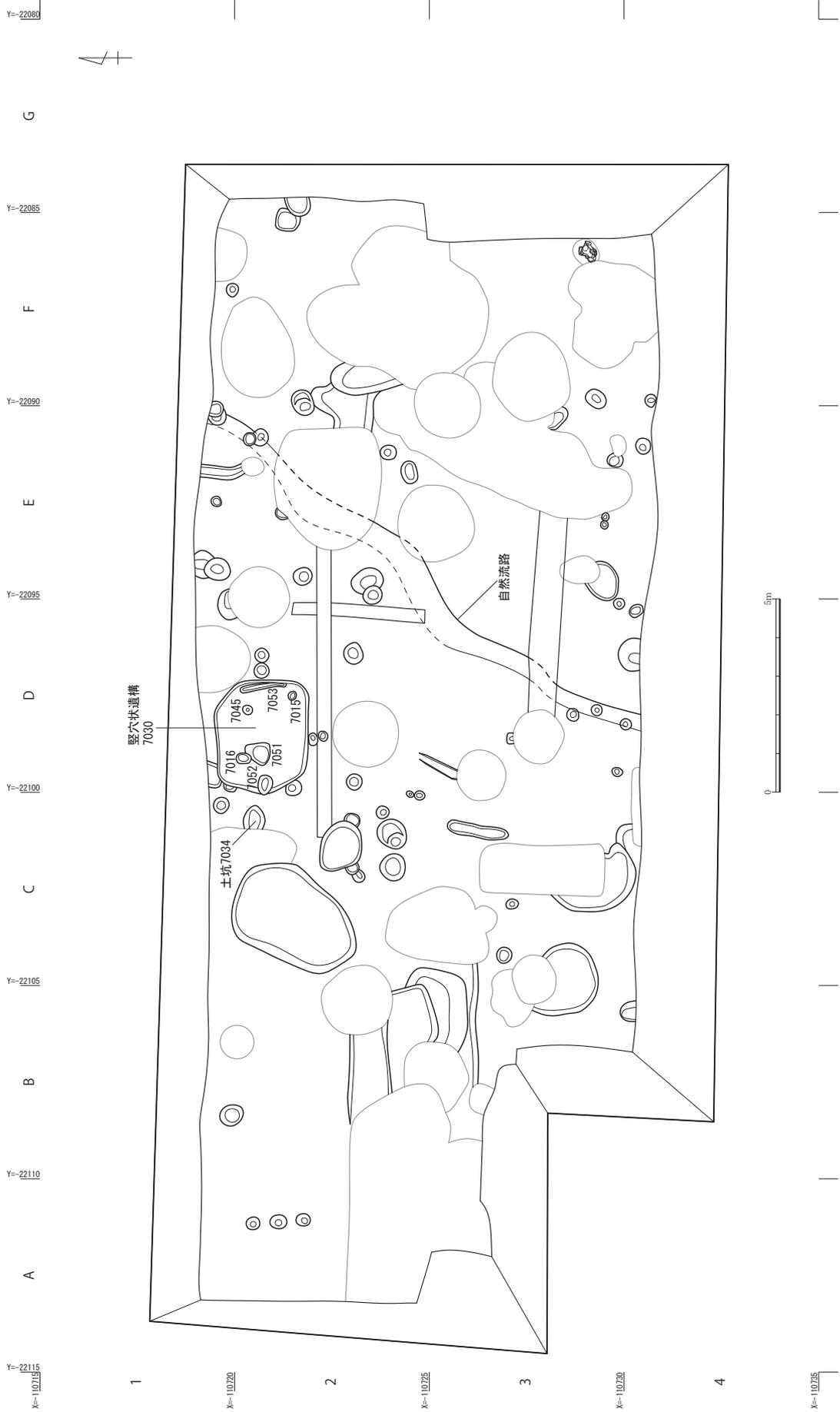
第9図 第4面全体図 (縮尺 1/150)



第10図 第5面全体図(縮尺 1/150)



第11図 第6面全体図(縮尺 1/150)



第12図 第7面全体図(縮尺1/150)

性が考えらえる。この溝の東端より東側では、多量の礫敷きが検出されている。

第4面では、調査区の中央よりやや北よりの地点において、東西に約17m延びる溝4012、調査区南側においては、攪乱等によって大分部が失われているため詳細は不明であるが、東西に延びる硬化面4204等の区画に関係すると考えられる遺構を検出している。また、4204の南際に沿って、多数の礫敷きや礎石と思われる礫が検出されている。

第5面では、12基の土器溜りを検出した。土器溜りは12世紀前半～15世紀後半で時期には幅がある。また、調査区中央より約1m北で、東西に延びる区画と思われるピットや礎石を確認している。さらにその西端から、これらに直交するように南北に延びるピットや礎石が確認された。

第6面では、長方形のプランをもち、東西方向に主軸をもつ土器溜りが6基検出されている。これらは、土師器皿が上向きに置かれ、短刀等が出土し、墓と考えられる。また、土坑6049からは、南国産のヤコウガイが纏まった状態で出土した。

第7面では、9世紀とみられる竪穴状遺構を検出した。また、烏丸綾小路遺跡に関連するものとしては、自然流路から弥生時代中期と古墳時代前期の土器が出土している。

第3表 遺構概要表

時代	時期	主な遺構
江戸時代中期以降	17世紀以降	石組み 1016・1031
安土桃山時代～江戸時代前期	16世紀半ば～17世紀前半	土坑 1048 集石 1098 土坑 3156
戦国時代	15世紀後半～16世紀半ば	土器溜り 4022 集石 4188 石組み 4090 土坑 3052・3060
室町時代後期	14世紀後半～15世紀半ば	土器溜り 5062・5175・6117・6192 土坑 6095
鎌倉時代後期～室町時代前期	13世紀前半～14世紀半ば	土器溜り 5127・5129 土坑 5158・5186
平安時代後期～鎌倉時代前期	11～13世紀前半	土器溜り 6256・6561・6376・6377・5069 土坑 6049 土坑 6505
平安時代前期～中期	9世紀～10世紀	竪穴状遺構 7030
弥生・古墳時代		自然流路

第3節 第1面の遺構

第1面は17世紀以降の遺物を含む整地層上面で遺構を検出した。整地層が確認できない部分も多く、そのため下層面の遺構も検出している。井戸状に礫を組んだ石組み遺構、集石遺構等を検出した。

土坑 1048 (第13図、図版九)

F3グリッドに位置する。平面形状はやや丸みを帯びた方形を呈する。規模は、長軸1.45m、短軸1.29m、深さ0.75mを測る。断面形状は、台形を呈する。覆土は、大きく3層に分かれる。上層には、褐灰色泥砂で少量の焼土が混じる。中層は、粒子の細かい赤化した砂層で黄褐色粘土ブロックが含まれていた。下層も粒子の細かい砂層であるが、赤化はみられなかった。出土した遺物から16世紀半ば～17世紀前半(京都X期中～XI期中)と考えられる。

土坑 1057 (第 13 図、図版九)

E3 グリッドに位置する。平面形状は、楕円形を呈する。規模は、長軸 1.18 m、短軸 0.91 m、深さ 0.37 m を測る。覆土は、大きく 2 層に分かれ、1 層は、褐灰色泥砂で炭化物、焼土を含む。下層は、褐 灰色砂質土で炭化物、焼土が含まれていた。出土した遺物から 16 世紀代 (京都 X 期古～XI 期古) と考えられる。第 1 面で検出しているが、第 2 面の遺構とみられる。

集石 1015 (第 13 図、図版八)

D 2 グリッドに位置する。平面形状円形を呈する。規模は、径 1.39 m、深さ 0.67 m を測る。断面形状は、箱型を呈し拳大の円礫が多量に詰め込まれていた。なお集石 1015 の北東に隣接して石組み 1016 が存在している。この位置関係からみて、集石 1015 は、排水等の施設である可能性も考えられる。出土した遺物から、16 世紀後半～17 世紀前半 (京都 X 期～XI 期) と考えられる。第 1 面で検出しているが、第 2 面の遺構とみられる。

集石 1018 (第 13 図、図版八)

C2 グリッドに位置する。平面形状は、楕円形を呈する。規模は、長軸 1.81 m、短軸 0.81 m、深さ 0.56 m を測る。南西にテラス状に高まり、下端との高低差は、0.40 m を測る。構内には、10cm 大の礫が多量に詰め込まれていた。出土した遺物から 15 世紀後半～16 世紀代 (京都 IX 期～X 期) と考えられる。第 1 面で検出しているが、第 3 面の遺構とみられる。

集石 1025 (第 13 図、図版九)

A・B2 グリッドに位置する。平面形状は、やや歪んだ円形を呈する。規模は、径 1.31 m、深さ 0.90 m を測る。構内には、径 10cm 前後の礫が詰め込まれていた。出土した遺物から 17 世紀前半 (京都 XI 期) と考えられる。

集石 1077 (第 13 図、図版九)

D3 グリッドに位置する。平面形状は、円形を呈する。規模は、直径 0.70 m、深さ 0.25 m を測る。構内の中心部には、10cm 前後の礫が詰め込まれていた。遺物は出土していない。

集石 1098 (第 13 図、図版九・十)

C3 グリッドに位置する。平面形状隅丸長方形を呈する。規模は、長軸 2.31 m、短軸 0.95 m、深さ 0.33 m を測る。断面形状は、箱型を呈する。覆土は、褐灰色泥砂で炭化物、焼土粒子を含む。東壁際には、拳大の礫が三角堆積状に出土した。また、西壁際においても人頭大の礫が堆積している。出土した遺物から、16 世紀代～17 世紀前半 (京都 X 期古～XI 期中) と考えられる。

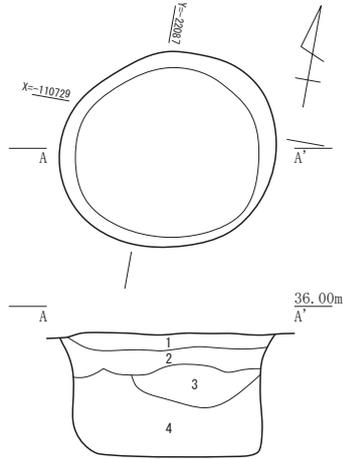
集石 1107 (第 13 図、図版九)

EF4 グリッドに位置する。東西に 3.32 m、幅約 1.50 m で広がる。径 10～15 cm 大の礫が面上に敷かれた状態で検出された。出土した遺物から 15 世紀後半～16 世紀代 (京都 IX～X 期) と考えられる。第 1 面で検出しているが、第 3 面の遺構とみられる。

集石 1111 (第 14 図、図版九)

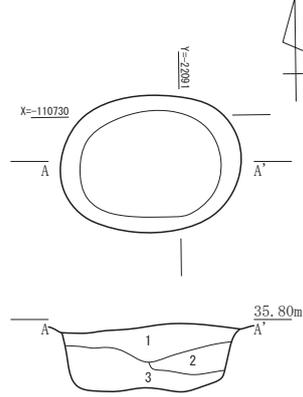
B4 グリッドに位置する。平面形状は、方形を呈する。規模は、一辺が 0.80 m、深さ 0.43 m を測る。構内には、10～15 cm の礫が詰め込まれていた。出土した遺物から 16 世紀代 (京都 X 期) と考えられる。第 1 面で検出しているが、第 2 面の遺構と考えられる。

土抗1048



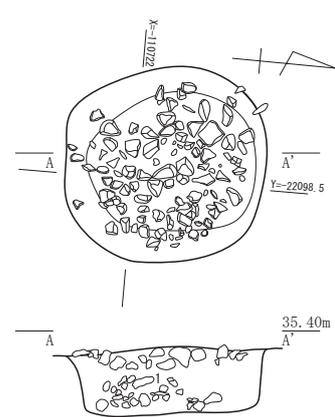
- 1 7.5YR4/4褐色泥砂 しまり弱い 粘性ややあり炭化物やや多量、焼土粒子少量含む
- 2 2.5Y6/3にぶい黄色砂礫層 しまり・粘性なし φ3~5cm大の礫多量含む
- 3 2.5Y6/3にぶい黄色砂質土 しまり・粘性弱い黄褐色粘土ブロック含む
- 4 7.5YR5/4にぶい褐色砂質土 しまり・粘性なし炭化物少量含む

土抗1057



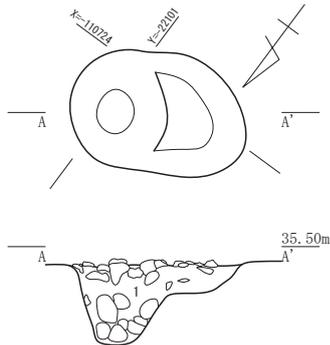
- 1 7.5YR5/2灰褐色泥砂 しまり・粘性弱い炭化物粒子・焼土粒子やや多量含む
- 2 7.5YR5/2灰褐色泥砂 しまり・粘性弱い炭化物多量、焼土粒子少量含む
- 3 7.5YR5/2灰褐色砂質土 しまり・粘性弱い炭化物・焼土粒子少量含む

集石1015



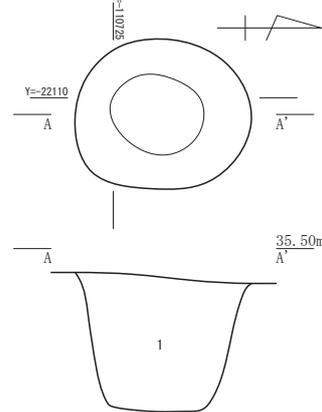
- 1 7.5YR5/1褐灰色泥砂 しまり・粘性弱い炭化物・焼土粒子、φ10~20cm大の礫多量含む

集石1018



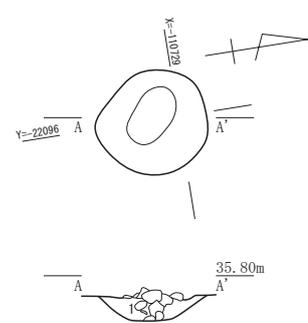
- 1 7.5YR5/6明褐色泥砂 粘性あり炭化物粒子少量、φ10~30cm大の礫多量含む

集石1025



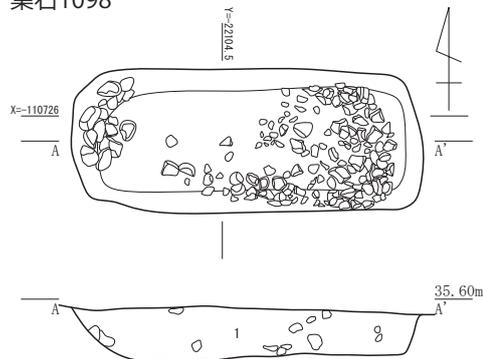
- 1 7.5YR4/2灰褐色泥砂 しまりありφ5~10cm大の礫多量含む

集石1077

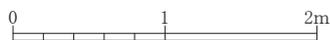


- 1 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまりあり粘性弱い 炭化物含む

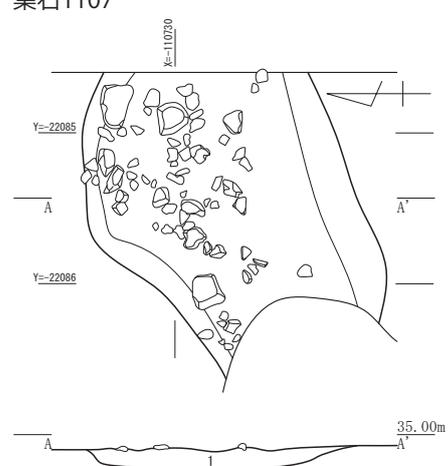
集石1098



- 1 7.5YR4/1褐灰色泥砂 粘性弱い炭化物、焼土粒子少量、φ5cm前後の礫含む



集石1107



- 1 7.5YR4/1褐灰色泥砂 粘性あり 焼土粒子少量含む

第13図 第1遺構面遺構図1 (縮尺 1/50)

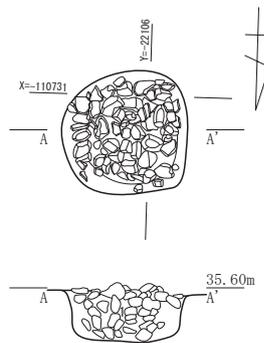
石組み 1016 (第 14 図)

D2 グリッドに位置する。平面形状はやや歪んだ方形を呈する。堀方規模は長軸 1.4 m、短軸 1.25 m で、深さ 0.69 m を測る。壁面に沿って約 30 ~ 40 cm 大の円礫を 3 段ないし 4 段積み上げている。大型の礫の間には、10 cm 前後の礫が詰め込まれ、平面的には方形に組まれている。石組みの内径は 0.74 m を測る。覆土は、2 層に分かれる。特に 1 層目には、炭化物で埋没している。形状は、井戸状を呈しているが、深さが 0.69 m と浅く湧水点にも達していない。このため、井戸としての可能性は低いと思われる。便所の便槽等の可能性も考えられる。出土遺物は、寛永通寶が出土している。17 世紀後半以降と考えられる。

石組み 1031 (第 14 図、図版八)

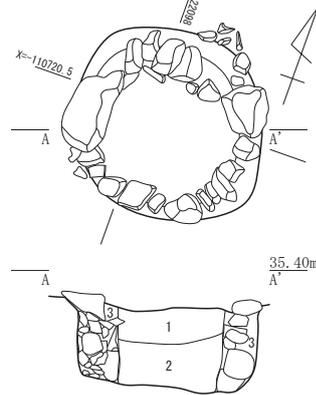
A2 グリッドに位置する。北側約半分を攪乱によって壊されている。残存状況から、円形の石組土坑と考えられる。規模は、掘り方で、径 1.15 m、深さ 0.43 m を測る。壁際に沿って径約 30 ~ 40 cm 大の礫が 3 段積まれている。石組の内径は、約 0.60 m を測る。平面形状は石組み

集石 1111



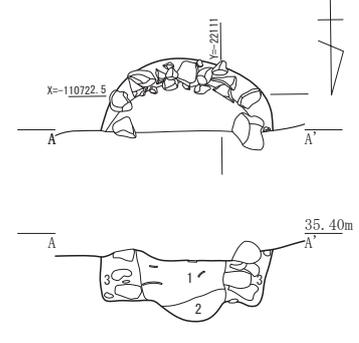
- 1 7.5YR4/1 褐灰色泥砂 粘性弱い
φ10~15cm 大の礫を中心に構成

石組み 1016



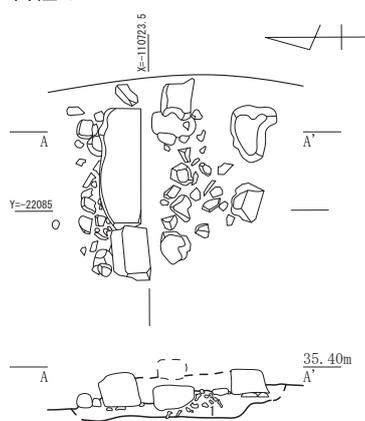
- 1 灰層
- 2 7.5YR4/2 灰褐色泥砂 しまり弱い
炭化物・焼土粒子少量含む
- 3 7.5YR4/2 灰褐色泥砂 しまりなし
粘性弱い 炭化物少量含む

石組み 1031



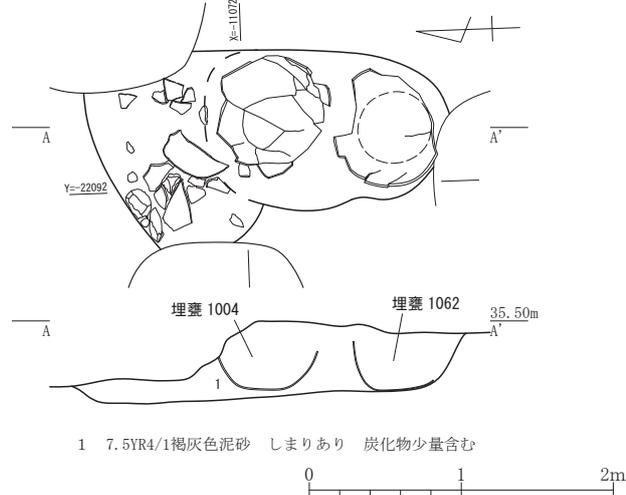
- 1 10YR5/1 褐灰色泥砂 しまり弱い
炭化物・貝殻片含む
- 2 1層に類似 やや粒子粗い
- 3 10YR4/1 褐灰色泥砂 しまり弱い
炭化物少量、焼土粒子多量含む

石組み 1040



- 1 7.5YR4/2 灰褐色泥砂 φ5cm 前後の礫多量含む

埋窆 1004・1062



- 1 7.5YR4/1 褐灰色泥砂 しまりあり 炭化物少量含む

第 14 図 第 1 遺構面遺構図 2 (縮尺 1/50)

1016と同様井戸状の形状を呈するが、深さは浅く井戸としての可能性は低いと思われる。便所の便槽の可能性も考えられる。出土遺物から、18世紀代（京都Ⅻ期新～ⅩⅢ期中）と考えられる。

石組み 1040（第14図、図版八）

F・Gグリッドに位置する。東側は調査区外へと延びる。また、西側は、攪乱によって失われている。このため検出された、東西方向の長さは、1.33 mである。溝状に2列に組まれた石が東西方向へ延びる。南と北の石の内側の間隔は、60 cmである。これに対し、南側の石は、上面は平坦であるものを使用しているが、自然石を使用している。側石の中には、さらに断面正方形の加工された石が、側石の中心よりやや北よりで検出された。部分的にはあるが2段になって構成されているように見られる。上の石は、両側の石の上端部とほぼ同一の高さで、下段の石は底面にとほぼ同じ高さであった。また、石組みの掘方と思われる小礫が、中心部と北側の石下から検出されている。この石組みは、攪乱を超えてさらに伸びることは無くまた、これ以外の地点では、検出されていない。以上のことから排水施設を兼ねた入口の施設の可能性が考えられる。土器類の出土はなかった。

埋甕 1004・1062（第14図、図版八）

E3グリッドに位置する。埋甕遺構である。堀方は、平面形状方形を呈する。規模は、長軸2.26 m、短軸1.04 m、深さ0.46 mの土坑である。土坑の中には二つの焼締陶器の甕が南北に並べて埋められていた。出土した遺物から16世紀～17世紀前半（京都Ⅹ期～Ⅺ期）と考えられる。

第4節 第2面の遺構

第2面は、16世紀半ば～17世紀の遺物を含む整地層上面で検出した。また、明確に整地層を確認できなかつたり、整地層のない部分があり、下層遺構を検出している部分もある。集石遺構、東西に道路状に延びる整地層等を検出した。

土坑 2037（第15図、図版十）

A2グリッドに位置する。西側は、調査区外へと延び、北西側の一部分が上層遺構によって失われている。平面形状は、やや歪んだ方形を呈する。規模は、長軸0.89 m、短軸0.86 m以上、深さ0.48 mを測る。覆土は、大きく2層に分かれる。1層は、褐灰色泥砂で焼土ブロックと共に上層部には20cm大の礫を含む。2層は、褐灰色泥砂で、多量の焼土が含まれていた。出土した遺物から16世紀代（京都Ⅹ期）の遺構と考えられる。

土坑 2113（第15図、図版十）

C3グリッドに位置する。遺構の壁は、南側と西側でのこるが、北側と東側は攪乱によって、失われている。覆土は、褐灰色泥砂で焼土、炭化物が多く含まれていた。攪乱された北側を除き、壁沿いに礫が配された状況が見られる。遺構の中心部からは、土師器皿が東西に2枚並べた状態で出土した。土師器皿は、正位におかれた状態であった。出土した遺物から13世紀後半～14世紀前半（京都Ⅶ期）と考えられる。

土坑 2131（第7図）

E3グリッドに位置する。東約半分は、攪乱によって失われている。残存状況から平面形状は、

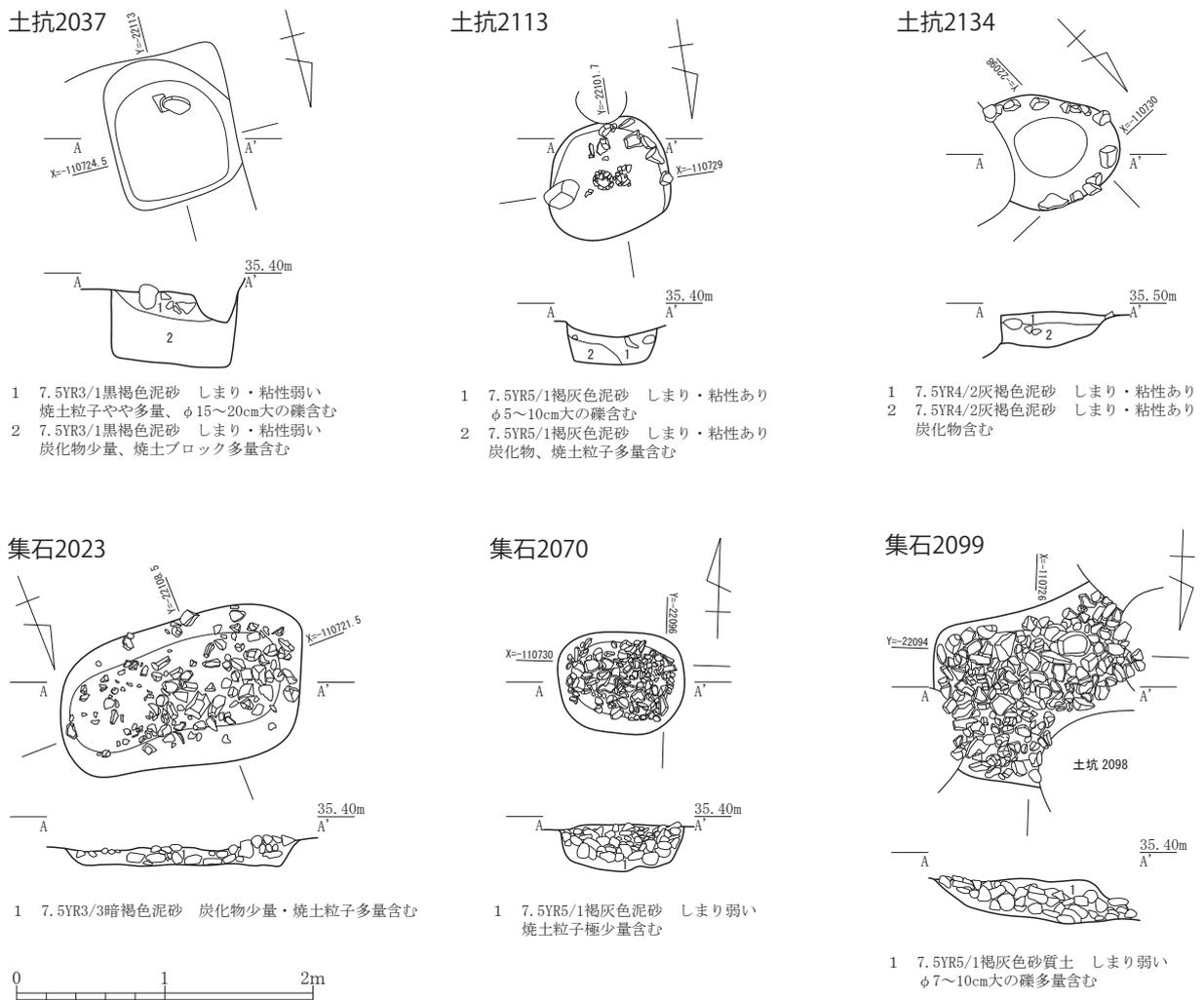
楕円形であったと推定できる。規模は、長軸 0.72 m、短軸 0.35 m 以上、深さ 0.11 m を測る。覆土は、にぶい赤褐色砂質土で炭化物が多く含まれていた。覆土中からは、やや大型の土師器皿が出土した。出土した遺物から 15 世紀後半(京都IX期)と考えられる。第 2 面で検出しているが、第 3 面の遺構とみられる。

土坑 2134 (第 15 図)

D4 グリッドに位置する。隣接遺構によって南東側が失われている。平面形状は、楕円形を呈する。規模は、長軸 0.73 m 以上、短軸 0.78 m、深さ 0.25 m を測る。上端の縁に沿って、径 15 cm 大の礫が配されていた。また、底部には、炭化物が多く見られた。出土した遺物から 15 世紀後半～16 世紀前半(京都IX期新～X中)と考えられる。第 2 面で検出しているが、第 3 面の遺構とみられる。

集石 2023 (第 15 図、図版十)

B2 グリッドに位置する。礫は、東西軸に 2.67 m、南北に 1.00 m の範囲で広がっていた。礫を除去すると、東側約 1 m は、面上に敷かれた状態で検出した。それより西側の礫は、やや歪んだ長方形で、約 0.20 m の窪みがみられた。窪みの中にも多量の礫が詰め込まれていた。規模は、



第 15 図 第 2 遺構面遺構図 (縮尺 1/50)

長軸 1m62 cm、短軸 1m、深さ 20cm を測る。出土した遺物から 15 世紀後半（京都IX期）と考えられる。第 2 面で検出しているが、第 3 面の遺構とみられる。

集石 2070（第 15 図）

D4 グリッドに位置する。平面形状は、長方形を呈する。規模は、長軸 0.86 m、短軸 0.68 m、深さ 0.33 m を測る。構内には、径 5 cm～10cm 程度の礫が詰め込まれていた。柱支えの礫かあるいは、排水施設の可能性も考えられる。集石 2070 から遺物の出土はなかった。

集石 2099（第 15 図、図版十）

E3 グリッドに位置する。北東側を、2098 に、また、北西側を上層遺構によって失われている。規模は、長軸 1m30 cm 以上、短軸 1m、深さ 29 cm を測る。構内には、多量の礫が詰め込まれていた。礫の隙間には、多量の焼土と炭化物が含まれていた。焼土と共に詰め込まれていたが、焼礫は、ほとんど見られなかった。また、礫を外すと床面にも焼土が溜まる状況が見られたが、床面そのものが焼けた状況はみられなかった。遺物は、11 世紀代（京都IV期）と 16 世紀代（京都X期）のものが出土している。

合わせ口土師器皿 2067（第 7 図、図版十）

E3 グリッドに位置する。2 面上から出土した 2 枚の大型の土師器皿が水平に合わせ口の状態で出土した。土師器皿の下からは、ピットを検出した。平面形状は、円形を呈する。規模は、直径約 40 cm、深さ 15 cm を測る。このピットからの出土遺物はないため、土師器皿との関連は不明である。出土した土師器皿から 15 世紀後半（京都IX期）と考えられる。第 2 面で検出しているが、第 3 面の遺構とみられる。

第 5 節 第 3 面の遺構

第 3 面は、15 世紀後半～16 世紀半ばの遺物を含む整地層上面で検出した。また、明確に整地層を確認できなかつたり、整地層のない部分もあり、一部下層遺構を検出している。区画と思われる溝、道状の整地層、集石遺構等を検出した。

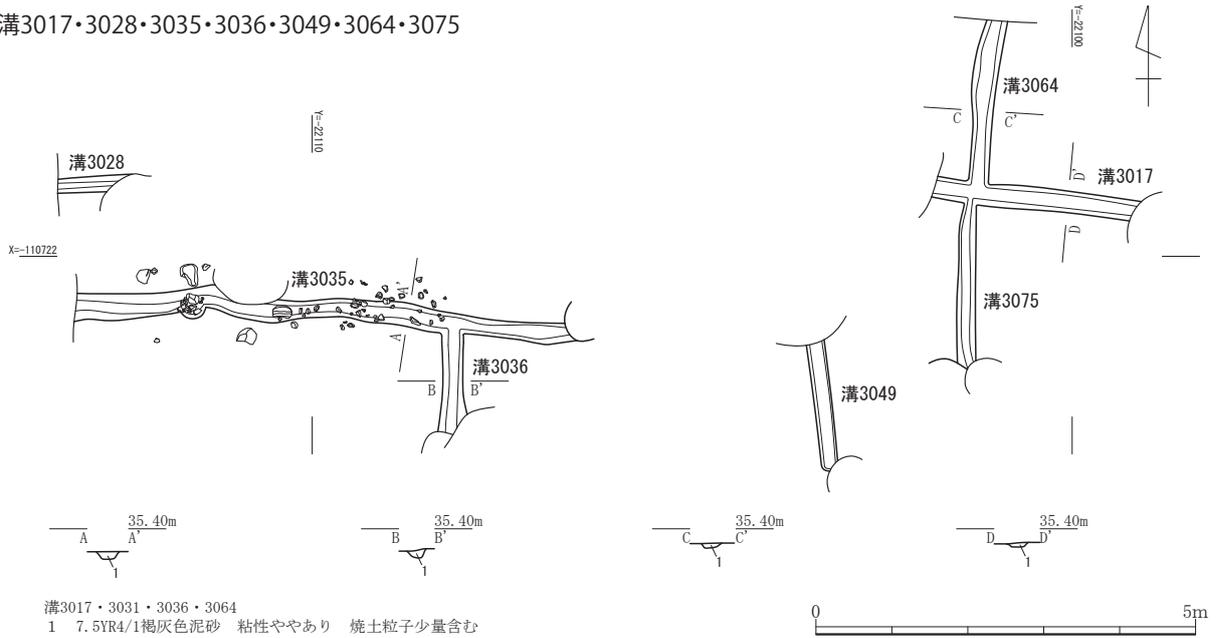
溝 3017・3028・3035・3036・3049・3064・3075（第 16 図、図版十一）

A～D 1・2 グリッドに位置する。溝状遺構である。規模は、幅 0.20 m、深さ 0.15 m を測る。断面形状は U 字を呈する。東西方向に延びる溝 3035 と、それに直交する溝 3036 がある。また、C1・2 付近で検出された、南北に延びる溝 3064 と東西に延びる溝 3017 は、同一遺構と考えられる。溝 3035 では、溝内から礎石が検出された。この状況からは、柵等の可能性が考えられる。出土した遺物から 15 世紀後半～16 世紀前半（京都IX期古～X期古）と考えられる。

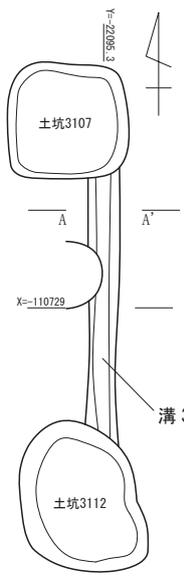
土坑 3107・3112、溝 3113（第 16 図）

D3 グリッドに位置する。2 基の土坑 3107・3112 と、その土坑の間をつなぐような状態で溝 3113 を検出した。北側に位置する土坑 3107 は、平面形状は正方形を呈する。規模は、一辺が 0.80 m、深さ 0.16 m を測る。南に位置する土坑 3112 は、歪んだ楕円形を呈する。規模は、長軸 0.97 m、短軸 0.82 m、深さ 0.24 m を測る。溝 3113 は、この 2 基の土坑を繋ぐような状態で検出している。溝の規模は、幅 0.19 m、深さ 0.09 m を測る。また、この溝の西側には、ほぼ同

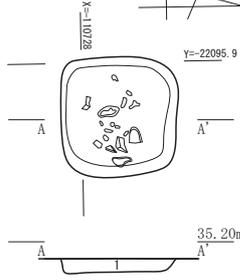
溝3017・3028・3035・3036・3049・3064・3075



溝3113

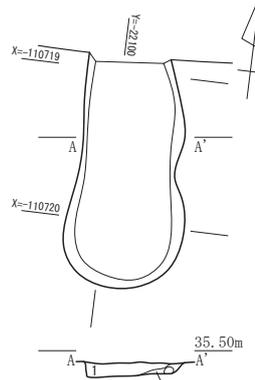


土坑3107



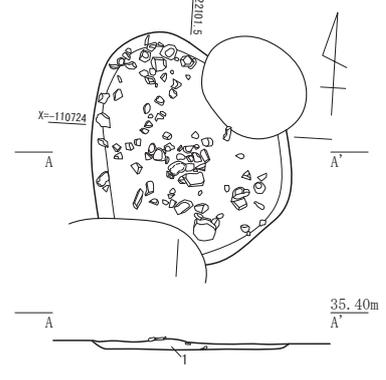
1 7.5YR4/3褐色泥砂 しまり・粘性弱い 焼土粒子少量含む

土坑3016



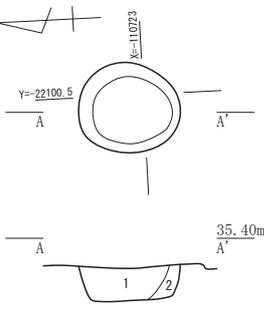
1 7.5YR4/2灰褐色泥砂 しまり・粘性弱い
2 10YR5/6黄褐色泥砂 しまりあり

土坑3050



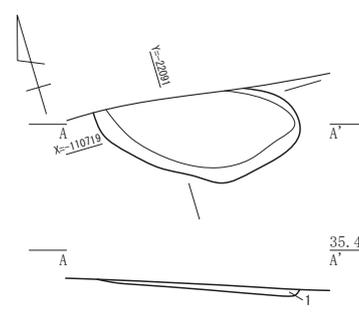
1 7.5YR5/1褐灰色泥砂 しまり・粘性弱い 炭化物・焼土粒子含む

土坑3052



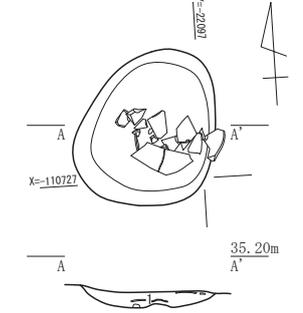
1 7.5YR5/2灰褐色泥砂 しまりあり 炭化物含む
2 7.5YR4/4褐色粘質土 しまり強い 炭化物・焼土粒子多量含む

土坑3060

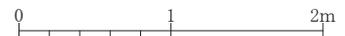


1 7.5YR5/2灰褐色泥砂 焼土粒子含む 多量の炭化物を中心に構成される

土坑3161



1 7.5YR4/4褐色泥砂 しまり・粘性弱い 炭化物多量含む



第16図 第3遺構面遺構図1 (縮尺 1/50、溝 3017 他は 1/100)

じ幅で西に向かって延びる整地層が確認できる。整地は、一部攪乱や上層遺構等によって壊されているが、調査区西壁まで延びている。また、この溝の東側には、敷石と思われる集石 3195 が広がりなどの状況がみられる。この溝や土坑が何らかの区画になる可能性も考えられる。土坑 3107 出土の遺物から 14 世紀後半～15 世紀代（京都Ⅷ期～Ⅸ期）とみられる。第 3 面で検出しているが、第 4 面の遺構とみられる。

土坑 3016（第 16 図）

C・D 1・2 グリッドに位置する。北側は、調査区外へと延びる。平面形状は、長方形を呈する。規模は、長軸 1.50 m 以上、短軸 0.66 m、深さ 0.11 m を測る。北側が調査区外へと延びるため遺構の性格は不明だが、溝 3064 と平行関係にあり区画の目的をもっていた可能性も考えられる。土坑 3016 から遺物の出土はなかった。

土坑 3050（第 16 図、図版十二）

C2 グリッドに位置する。南西及び北東隅を上層遺構によって壊されている。平面形状は、やや歪んだ円形を呈する。規模は、長軸 1.57 m、短軸 1.37 m、深さ 0.06 m を測る。構内には、礫がまばらに散らばった状態で出土した。出土した遺物から、15 世紀後半（京都Ⅸ期）と考えられる。

土坑 3052（第 16 図）

C2 グリッドに位置する。平面形状は、楕円形を呈する。規模は、長軸 0.71 m、短軸 0.60 m、深さ 0.20 m を測る。一部で土坑の壁を黄褐色粘土で固める様子が見られた。出土した遺物から 15 世紀後半～16 世紀（京都Ⅸ～Ⅹ期）と考えられる。

土坑 3060（第 16 図、図版十二）

E1 グリッドに位置する。北側は調査区外へと延びる。残存状況から平面形状は、円形と思われる。規模は、長軸 1.25 m、短軸 0.59 m 以上、深さ 0.08 m を測る。多量の炭で埋没していた。出土した遺物から 15 世紀後半～16 世紀（京都Ⅸ～Ⅹ期）と考えられる。

土坑 3156（第 17 図、図版十二）

D4 グリッドに位置する。平面形状は、やや歪な円形を呈する。規模は、長軸 0.47 m、短軸 0.43 m、深さ 0.25 m を測る。土坑に縁に沿って、土師器の炮烙鍋が出土している。鍋は、1/4 程しか残っていないが、出土状況からみて据え置かれていたと思われる。また、南西壁際からは、土師器皿が正位の状態で出土した。鍋の反対側にあたる南壁沿いには、2 つの礫が配されていた。出土した遺物から 16 世紀後半～



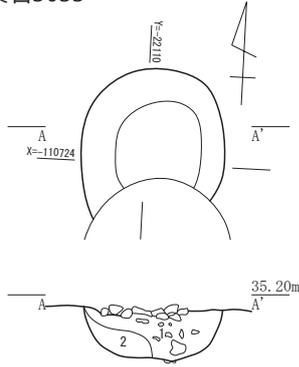
第 17 図 土坑 3156
遺物出土状況

17 世紀前半（京都Ⅹ期中～Ⅺ期中）と考えられる。第 3 面で検出しているが、第 2 面の残欠と考慮される。

土坑 3161（第 16 図、図版十二）

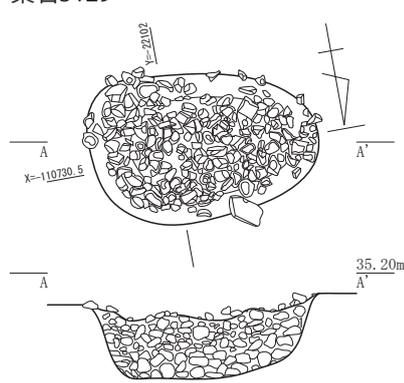
D3 グリッドに位置する。平面形状は、楕円形を呈する。規模は、長軸 1.0 m、短軸 0.70 m、深さ、0.20 m を測る。焼締陶器の甕の胴部が潰れた状態で出土している。出土した遺物から 18 世紀以

集石3033



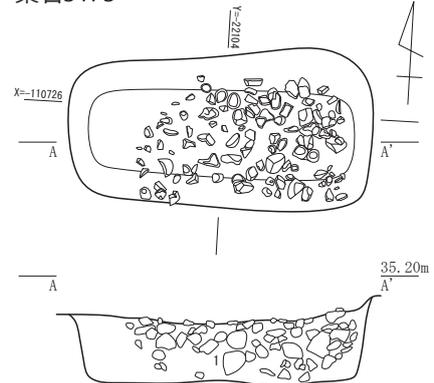
- 1 7.5YR5/2灰褐色泥砂 しまり弱い 粘性あり
焼土粒子少量含む
- 2 7.5YR4/1褐色泥砂 しまり・粘性あり
粘性あり 炭化物・焼土粒子含む

集石3129



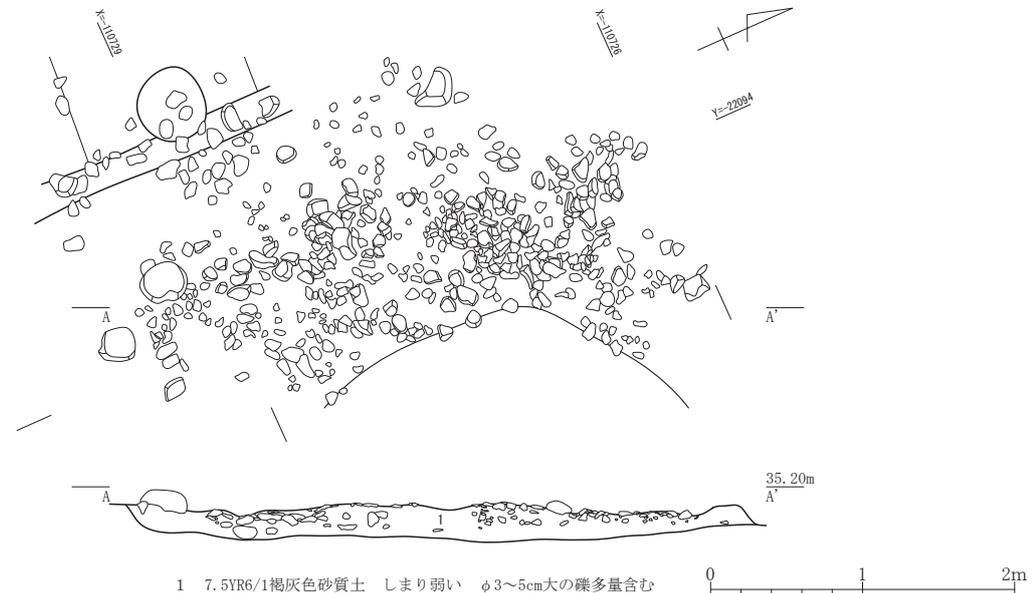
- 1 7.5YR4/1褐色泥砂 しまりなし 粘性弱い
φ10~15cm大の礫を中心に構成

集石3173



- 1 7.5YR4/2灰褐色泥砂 粘性弱い
焼土粒子、φ10~15cm大の礫多量含む

集石3195



- 1 7.5YR6/1褐色砂質土 しまり弱い φ3~5cm大の礫多量含む

第18図 第3遺構面遺構図2 (縮尺1/50)

降 (京都XII期新以降) と考えられる。第3面で検出しているが、第1面の残欠と考えられる。

集石 3033 (第18図、図版十一)

A・B2グリッドに位置する。南側を上層遺構によって壊されている。平面形状は、残存状態から円形と考えられる。規模は、径約1m、深さ0.35mを測る。断面を観察すると、礫は上層では、ほぼ構内全面に広がるが下層にゆくにつれ、東側に偏りが見られる。出土した遺物から15世紀後半 (京都IX期) と考えられる。

集石 3129 (第18図、図版十一)

C4グリッドに位置する。平面形状は、楕円形を呈する。規模は、長軸1.49m、短軸0.96m、深さ0.58mを測る。構内には、10~15cm大の礫が多量に詰め込まれている。出土した遺物は15世紀後半~16世紀前半 (京都IX期~X期) と17世紀 (京都XII期) のものがある。

集石 3173 (第18図、図版十二)

B・C3グリッドに位置する。平面形状は、長方形を呈する。規模は、長軸2.02m、短軸0.99m、

深さ 0.68 m を測る。構内には、多量に礫が詰め込まれている。出土した遺物から 15 世紀代（京都Ⅷ期中～Ⅸ期新）と考えられる。

集石 3195（第 18 図、図版十二）

E3 グリッドの西半分を覆う範囲で礫敷きが検出された。東側は、攪乱によって壊されているため全体的な拡がりは不明である。検出状況から、南北に主軸方向を持ち、溝 3113 の東側まで拡がっていたと考えられる。出土した遺物から 15 世紀後半（京都Ⅸ期）と考えられる。

第 6 節 第 4 面の遺構

第 4 面は、14 世紀後半～15 世紀半ばの遺物を含む整地層上面で検出した。明確な整地層が確認できない部分も多く、このため下層の遺構も検出している。区画と思われる溝、整地層、集石遺構等を検出した。

土器溜り 4022（第 21 図）

D1 グリッドに位置する。平瓦と軒瓦が平面的に置かれた状態で出土した。東側は、攪乱によって壊されている。平瓦の南側には、10～20 cm 大の礫が東西方向に直線的に置かれた状態で出土した。また、礫西端から直行するかのように、丸瓦が 2 枚出土し、その内側（礫の北、丸瓦の東側）で平瓦が 3 枚出土した。瓦を外すと、土器溜りが検出された。東側を攪乱によって壊され、北側は調査区外へと延びるため、形状は不明である。残存部の規模は、東西軸 0.48 m 以上、南北軸 0.58 m 以上、深さ 0.10 m を測る。土器は、土師器皿が正位のものや伏せた状態のものが出土した。東側では、合わせ口と思われる状態のものも出土した。覆土は、褐灰色泥砂で炭化物が多く見られた。上層の瓦は堀込みが無く面上に置かれた状態であったこと、その直下に土器溜りが存在することから上層の瓦は、下層の土器溜りに対する蓋の可能性も考えられる。土器溜り 4022 は、部分的な検出であり詳細は不明である。出土した遺物から 15 世紀後半（京都Ⅸ期）と考えられる。

土器溜り 4098（第 19 図）

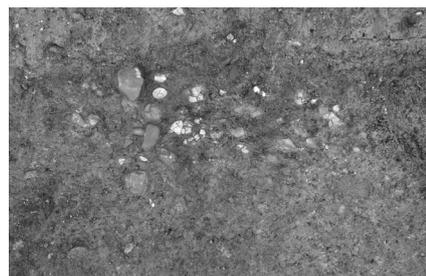
C3 グリッドに位置する。土坑 4087・4088 の底面より検出されが、土坑には伴わない。約 0.5 m の円形の範囲に土師器皿が数枚重なった状態で出土している。出土した土師器皿は、正位の状態で置かれた。土師器皿の下からは、須恵器の鉢が出土しており、土師器皿が鉢の中に入れていた可能性も考えられる。出土した遺物から 14 世紀前半（京都Ⅶ期中～新）と考えられる。第 4 面で検出しているが、第 5 面の遺構とみられる。



第 19 図 土器溜り 4098
遺物出土状況

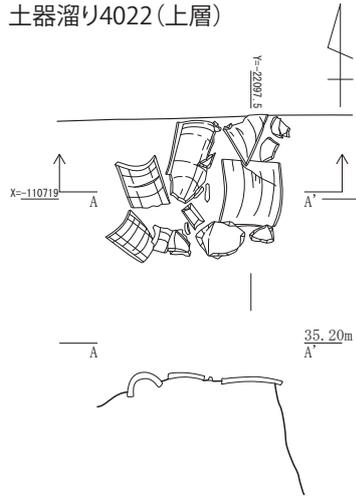
土器溜り 4137（第 20 図）

D4 グリッドに位置する。南側は、調査区外へと延びる。堀込みは確認できていない。面上に土師器皿がまとまりを持って出土している。範囲は方形状で、東西に 1.22 m、南北に

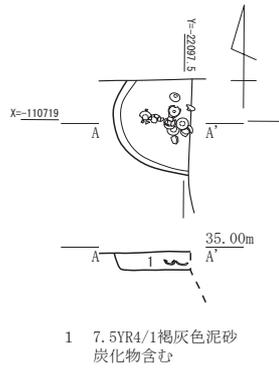


第 20 図 土器溜り 4137
遺物出土状況

土器溜り4022(上層)

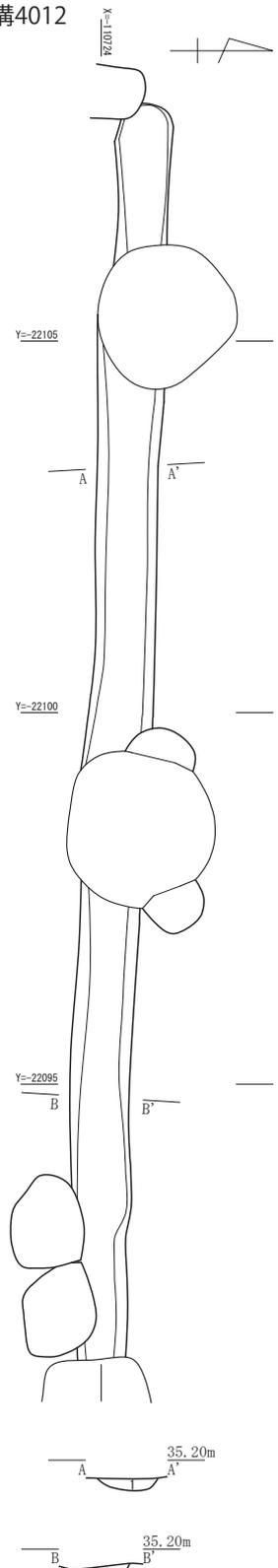


土器溜り4022(下層)

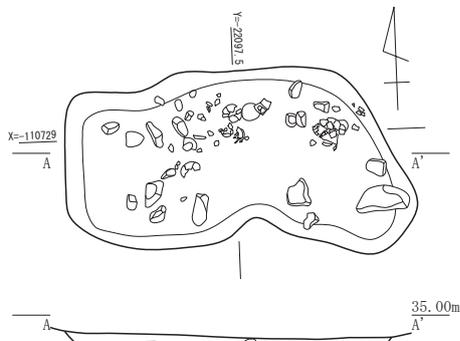


1 7.5YR4/1褐色泥砂
炭化物含む

溝4012

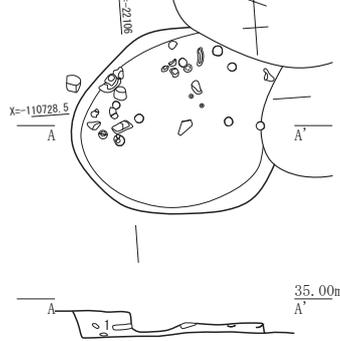


土器溜り4154



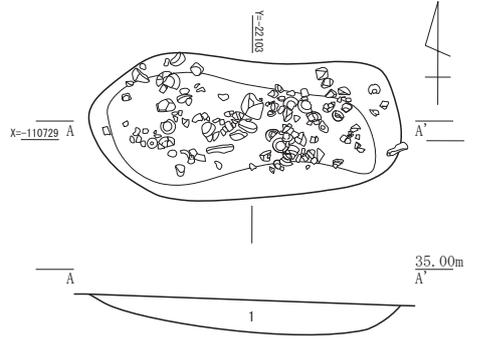
1 7.5YR5/1褐色泥砂 しまり・粘性あり 炭化物含む

土器溜り4168



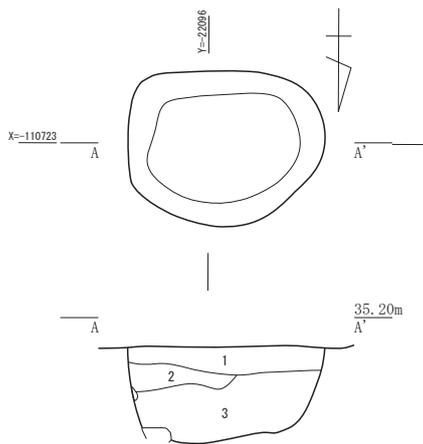
1 7.5YR4/1褐色泥砂 しまり・粘性弱い

土器溜り4192



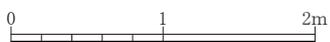
1 7.5YR4/1褐色泥砂 粘性ややあり 炭化物・焼土少量含む

土抗4018



1 7.5YR4/2灰褐色泥砂 しまり弱い 粘性弱い
焼土粒少量、炭化物含む
2 1層に類似 ややしまりあり
3 7.5YR5/1褐色泥砂 しまり・粘性弱い
黄褐色粘土ブロック混入

1 7.5YR5/1褐色泥砂 しまりあり
粘性弱い、焼土粒多量・炭化物含む



第21図 第4遺構面遺構図1 (縮尺1/50、溝4012は1/100)

0.40 m以上の範囲で出土している。出土状況は、土師器皿は、範囲内の縁に沿って出土しており中心部分には、見られない。また、ほとんどが細かく割れてはいるが、概ね伏せた状態であった。この出土状況から、現状では掘り込みは見つけられなかったが、本来は土坑内にあったものと推測される。出土した遺物から13世紀後半～14世紀前半（京都Ⅶ期）と考えられる。第4面で検出しているが、第5面の遺構とみられる。

土器溜り 4154（第21図）

D3グリッドに位置する。平面形状は長方形を呈する。規模は、長軸2.15 m、短軸0.99 m、深さ0.19 mを測る。土師器皿が南側にまとまって伏せられた状態で出土した。出土した遺物から13世紀後半～14世紀前半（京都Ⅶ期）と考えられる。第4面で検出しているが、第5面の遺構とみられる。

土器溜り 4168（第21図、図版十三）

B3グリッドに位置する。平面形状は、やや歪んだ円形を呈する。東側の一部を攪乱と上層遺構によって失われている。規模は、一辺、1.30 m、深さ0.10 mを測る。北側の壁に沿って土師器皿が正位の状態で置かれた状況がみられた。また、土坑の中心東西方向に沿うような形でも土師器皿が置かれた状況がみられた。また、ほぼ中央付近からは、古寛永通宝が6枚出土している。銭貨は、束ねられるような状況にはなく一定の範囲内に収まるが規則性を持って置かれた状況はみられなかった。また、床面の一部には木板の痕跡がみられた。出土した遺物から17世紀前半（京都Ⅺ期）と考えられる。なお、この遺構は、近世のものであり本来は1面に伴う遺構である。第1面で検出した土坑1099と位置、形状が一致しており第1面調査時に掘りきれていなかったため再度4面で検出したものである。1面からの深さは、0.50 mを測る。

土器溜り 4192（第21図、図版十二）

C3グリッドに位置する。平面形状は、長方形を呈する。規模は、長軸2.06 m、短軸、0.90 m、深さ0.30 mを測る。底部には、10 cm～15 cmの礫が敷かれて状況がみられその上に土師器皿が正位で置かれた状態で出土した。上層の土師器皿や礫を外すと、遺構東寄りから正位の状態で複数枚重ねられた状態で土師器皿が出土した。西壁から約20 cm程度東側では、平坦な礫が出土している。出土した遺物から15世紀代（京都Ⅷ期新～Ⅸ期中）と考えられる。

溝 4012（第21図、図版十三）

B～Eグリッドにかけて東西に走る溝状遺構である。東側は、攪乱で壊されている。規模は、幅0.82 m、深さ0.15 mを測る。検出した長さは、16.91 mを測る。断面形状は、皿状を呈する。区画溝の可能性が考えられる。出土遺物から15世紀後半（京都Ⅸ期）と考えられる。

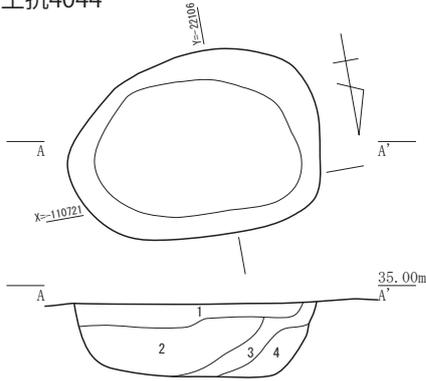
土坑 4018（第21図、図版十三）

D2グリッドに位置する。平面形状は、やや歪んだ方形を呈する。規模は、一辺が1.14 m、深さ0.64 mを測る。出土した遺物から16世紀代（京都Ⅹ期）と考えられる。第4面で検出しているが、第2面の残欠とみられる。

土坑 4044（第22図）

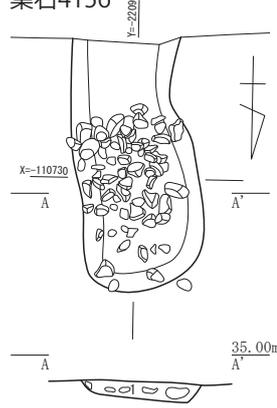
B・C2グリッド西壁に位置する。平面形状は、やや歪んだ長方形を呈する。規模は、長軸1.67 m、

土抗4044



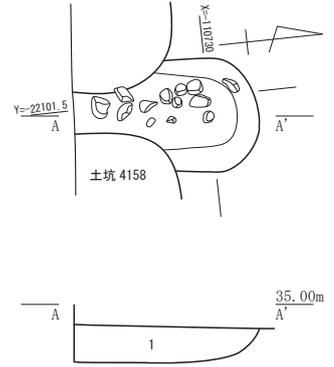
- 1 7.5YR6/1 褐灰色泥砂 しまり・粘性あり
炭化物・焼土粒多量含む
- 2 7.5YR6/1 褐灰色泥砂 しまり・粘性弱い
炭化物・焼土粒多量含む
- 3 5YR5/6 明赤褐色土 しまりややあり 粘性弱い
炭化物少量、焼土粒多量含む
- 4 7.5YR3/3 暗褐色泥砂 しまり・粘性弱い
炭化物少量、焼土粒多量含む

集石4156



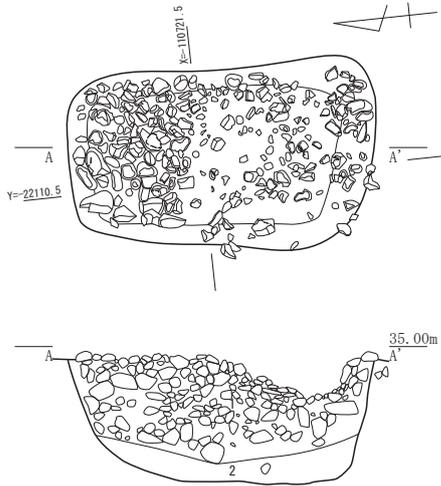
- 1 10YR4/1 褐灰色泥砂 しまりあり
φ10~20cmの礫多量含む

集石4188



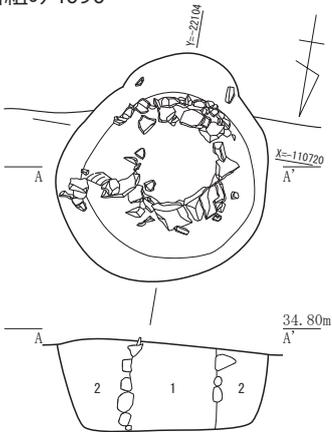
- 1 7.5YR4/1 褐灰色泥砂 しまりあり
粘性弱い、炭化物少量含む

集石 4059

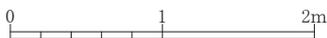


- 1 7.5YR5/1 褐灰色泥砂 雲母含む φ10~20cm大の礫を中心に構成
- 2 7.5YR5/1 褐灰色泥砂 しまり弱い 雲母多量、焼土ブロック含む

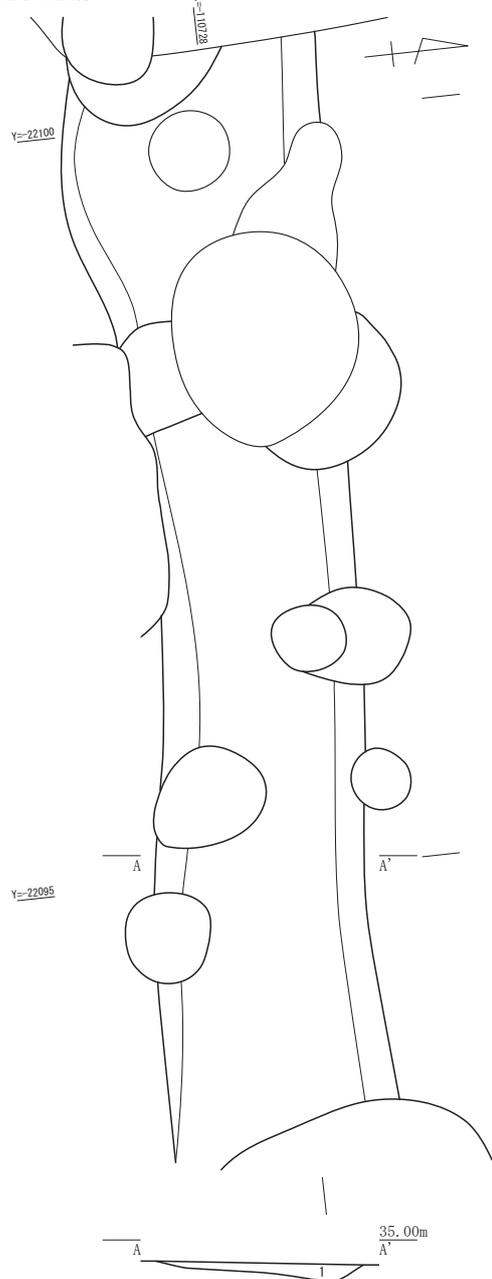
石組み4090



- 1 7.5YR4/2 灰褐色粘質土 しまりややあり
粘性強い、炭化物少量、φ1~3cm大の礫含む
- 2 7.5YR4/2 灰褐色泥砂 焼土含む



道状遺構4204



- 1 7.5YR5/1 褐灰色泥砂 しまり強い 褐色砂帯状に入る

第22図 第4遺構面遺構図2 (縮尺1/50)

短軸 1.26 m、深さ 0.58 mを測る。断面形状は、箱型を呈する。覆土は、大きく見ると1層で多量の焼土と炭化物が含まれる。火災等による焼土の廃棄土坑の可能性が考えられる。出土した遺物から17世紀後半～18世紀（京都Ⅻ～ⅩⅢ期）と考えられる。第4面で検出しているが、第1面の残欠とみられる。

集石 4045（第9図）

B2グリッドに位置する。10～20 cm大の礫が径 1.30 mの範囲に円形状に配されている。堀込みは無く面上に敷かれた状態である。柱あるいは、礎石を置くための地業と考えられる。

集石 4059（第22図、図版十三）

A2グリッドに位置する。平面形状は、長方形を呈する。主軸方向は、南北を示す。規模は、長軸 2.00 m、短軸 1.16 m、深さ 0.60 mを測る。断面形状は、舟形を呈する。南側は、垂直に近い状態で立ち上がり、北側では、緩やかに傾斜を持ちながら立ち上がる。大きく2層にわかれ第1層は、多量の礫によって埋められていた。第2層は、褐灰色泥砂で、少量の焼土を含む。また、第1・2層ともに雲母が多く含まれていた。出土した遺物から15世紀後半（京都Ⅸ期）と考えられる。

集石 4156（第22図、図版十三）

D3・4グリッドに位置する。南側は、調査区外へと延びる。平面形状は、長方形を呈する。規模は、長軸 1.65 m以上、短軸 0.80 m、深さ 0.20 mを測る。10～15 cm大の礫が詰め込まれている。出土した遺物から15世紀後半（京都Ⅸ期）と考えられる。

集石 4188（第22図、図版十三）

C4グリッドに位置する。土坑 4158 と重複し、土坑 4158 によって東側の一部が壊されている。西壁南側も上層遺構によって失われている。また、南側は、調査区外へと延びる。残存状況から平面形状は、長方形と思われる。規模は、長軸 1.22 m以上、短軸 0.74 m、深さ 0.22 mを測る。径 10～15 cm大の礫が詰め込まれている。形状や礫の詰め込まれた状況など、集石 4156 と共通すること、道状遺構 4204 やその南に沿った礫等と直角方向にあることから、区画などに関わる可能性も考えられる。出土した遺物から15世紀後半（京都Ⅸ期）と考えられる。

石組み 4090（第22図、図版十三）

C1・2グリッドに位置する。石組み遺構である。平面形状は、円形を呈する。掘方規模は、長軸 1.48 m、短軸 1.30 m、深さ 0.54 mを測る。掘方壁面より、約 0.3 m内側に径 15 cm～20 cmの礫を円形に5段井戸状に組まれていた。石組みの内径は、約 0.5 mを測る。形状は、井戸に類似するが、0.54 mと浅く井戸としての機能は無かったと考えられる。便所の便槽あるいは、一時的な水溜の可能性も考えられる。出土した遺物から15世紀後半～16世紀前半（京都Ⅸ期古～Ⅹ期古）と考えられる。第4面で検出しているが、第3面の遺構とみられる。

道状遺構 4204（第22図）

B～E3グリッドに位置する。明瞭に確認できるのは、D・E 4グリッド付近である。これより西では、不明瞭であるが、部分的に同一方向へのラインが見られる。東側は、土坑 4151 によって失われている。また、その先からもプランは確認できなかった。明瞭な部分では、先に浅い溝

を掘り、その後土をいれて叩いている状況がみられた。また、遺構南側では、礎石ピットや礫が集中する箇所が散在して見られる。出土した遺物から、15世紀後半（京都IX期）と考えられる。

第7節 第5面の遺構

第5遺構面では、部分的に確認できる整地層上面を基盤として広げ、その上面で遺構を検出した。また整地層は部分的にしか広がらず、整地層のない部分もあったため、一部下層面の遺構も検出した。土器溜り、集石遺構、土坑等を検出した。

土器溜り 5036（第25図）

F2グリッドに位置する。北側約1/3が攪乱によって壊されている。平面形状は、やや歪な方形を呈する。規模は、長軸1.32m、短軸0.78m以上、深さ0.34mを測る。土師器皿は土坑中心部から出土している。出土状況に規則性は見られない。廃棄土坑の可能性が考えられる。出土した遺物から14世紀代（京都VII～VIII期）と考えられる。

土器溜り 5045（第25図、図版十四）

E1グリッドに位置する。遺構の北側は調査区外に延びるため詳細は示し得ないが、残存状況から平面形状は、方形か長方形の土坑と考えられる。規模は、東西軸0.72m、南北軸0.53m以上、深さ0.15mを測る。土師器皿は、南東壁際と北調査区壁際の2点を除き、伏せられた状態で出土した。出土した遺物から13世紀後半～15世紀前半（京都VII期～VIII期）と考えられる。

土器溜り 5058（第10図、図版十四）

D2グリッドに位置する。平面形状は楕円形を呈する。長軸0.98m、短軸0.85m、深さ0.10mを測る。浅く掘り窪めた土坑から、土師器皿、青磁の皿等が出土した。土師器皿の下からは、瓦質土器の羽釜が出土している。出土した遺物から12世紀代（京都V期中～VI期古）と考えられる。第5面で検出しているが、第6面の遺構とみられる。

土器溜り 5061（第23図、図版十四）

D2グリッドに位置する。平面形状は、土器溜り5062によって壊されているため詳細は不明である。残存状況から推定して平面形状は、方形であると思われる。土師器皿は、正位で置かれた状態で出土した。出土遺物から14世紀後半～15世紀前半（京都VIII期）と考えられる。第5面で検出しているが、第4面の遺構とみられる。



第23図 土器溜り 5061
遺物出土状況

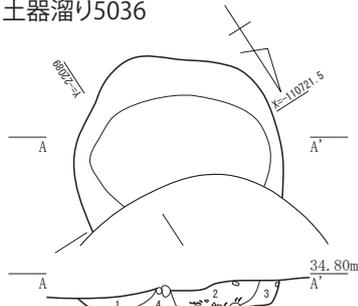
土器溜り 5062（第24図、図版十四）

D2グリッドに位置する。平面形状は、楕円形を呈する。規模は、長軸1m54cm、短軸1m9cm、深さ18cmを測る。土師器皿は、土坑の南掘りに集中して出土した。土師器皿集中部の中央付近は、伏せられた状態で出土しているものが多いのに対し、周囲のものは正位に置かれた状態で出土している。一部には数枚の土師器皿が重ねられた状態で出土し



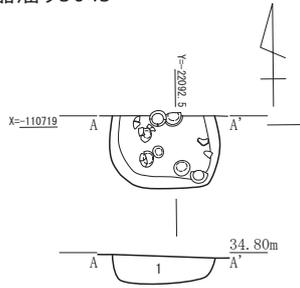
第24図 土器溜り 5062
遺物出土状況

土器溜り5036



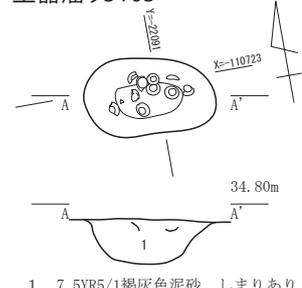
- 1 7.5YR4/1 褐灰色泥砂 しまり・粘性あり
炭化物・φ1cm大の礫少量含む
- 2 7.5YR4/1 褐灰色泥砂 しまりあり 粘性弱い
炭化物含む
- 3 10YR6/2 灰黄褐色泥砂 しまり・粘性あり
- 4 10YR5/2 灰黄褐色泥砂 しまり・粘性あり
炭化物少量含む

土器溜り5045



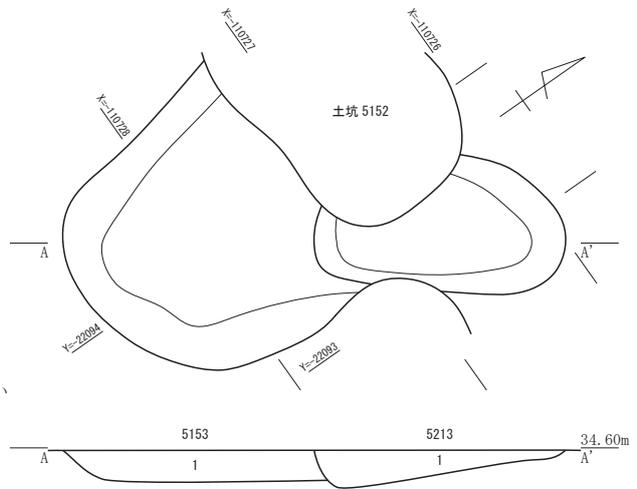
- 1 7.5YR5/1 褐灰色泥砂 しまり弱い 炭化物少量含む

土器溜り5105



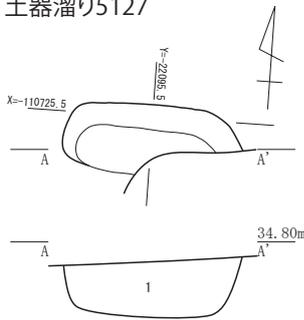
- 1 7.5YR5/1 褐灰色泥砂 しまりあり
炭化物少量含む

土器溜り5153・5213



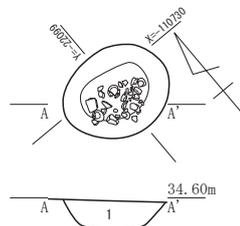
- 5153
- 1 7.5YR4/1 褐灰色泥砂 しまり・粘性弱い 炭化物、φ0.5~1.0cm大の砂利多量含む
- 5213
- 1 7.5YR4/1 褐灰色泥砂 しまり・粘性弱い 炭化物・焼土粒子含む

土器溜り5127



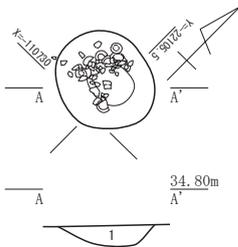
- 1 7.5YR4/1 褐灰色泥砂 粘性ややあり
炭化物極少量含む

土器溜り5139



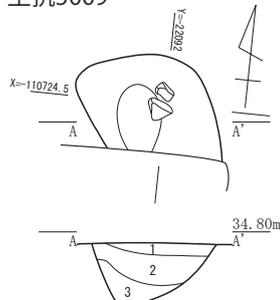
- 1 7.5YR4/2 灰褐色泥砂 しまり弱い
粘性あり 炭化物含む

土器溜り5175



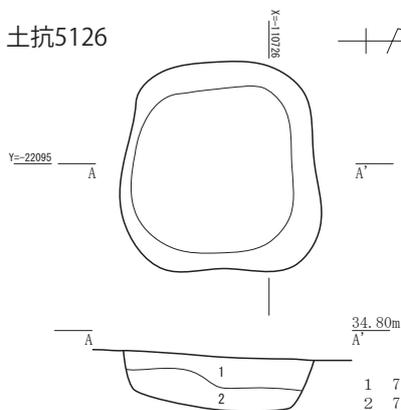
- 1 7.5YR4/2 灰褐色泥砂
炭化物少量、黄色粒子多量含む

土抗5009



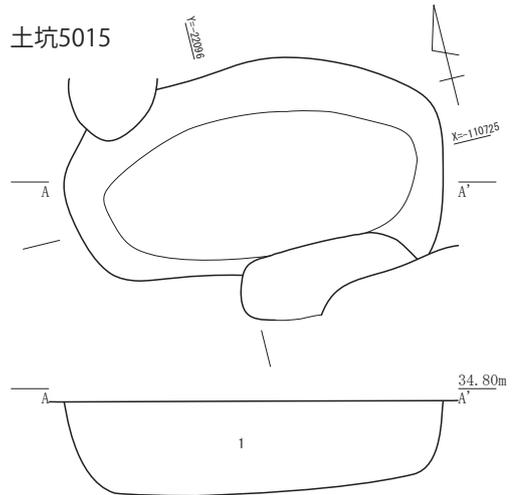
- 1 炭層
- 2 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 しまりあり
- 3 7.5YR4/1 褐灰色泥砂 やや粘性あり

土抗5126

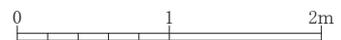


- 1 7.5YR6/2 灰褐色泥砂 粘性あり 焼土・炭化物含む
- 2 7.5YR6/2 灰褐色砂質土 しまり弱い 焼土・炭化物少量含む

土坑5015



- 1 7.5YR4/1 褐灰色泥砂 しまり弱い 炭化物少量含む



第25図 第5遺構面遺構図1 (縮尺 1/50)

ている。出土した遺物から15世紀前半(京都Ⅷ期中～Ⅸ期古)と考えられる。第5面で検出しているが、第4面の遺構とみられる。

土器溜まり 5069 (第10図、図版十四)

D2グリッドに位置する。平面形状は、円形を呈する。長軸0.51m、短軸0.31m以上、深さ0.09mを測る。土坑東側には、長径21cmの長方形の礫が置かれ、西側からは土師器皿が正位の状態出土した。また、土師器皿と礫の下には、瓦質土器の盤がつぶれた状態で出土した。また、土坑の東縁からは、哺乳類の骨が出土している。出土した遺物から12世紀前半(京都Ⅴ期)と考えられる。第5面で検出しているが、第6面の遺構とみられる。

土器溜り 5083 (第10図、図版十四)

D2グリッドに位置する。平面形状は、楕円形を呈する。規模は、長軸1.52m、短軸1.23m、深さ0.20mを測る。出土した土師器皿は、正位に置かれ、土坑中央付近に集中した状態で置かれていた。土師器皿以外には焼締陶器の甕胴部が出土している。出土した遺物から15世紀後半(京都Ⅸ期)と考えられる。第5面で検出しているが、第3面の遺構とみられる。

土器溜り 5105 (第25図、図版十四)

E2グリッドに位置する。平面形状は楕円形を呈する。規模は、長軸0.86m、短軸0.50m、深さ0.31mを測る。土坑の長軸線中央をなぞるように土師器皿が直線的に正位の置かれた状態で出土した。

土器溜り 5127 (第25・26図、図版十四)

D3グリッドに位置する。平面形状は、長楕円形を呈する。土坑5126と重複関係にあり、土坑5126によって南東角が壊されている。規模は、長軸1.19m、短軸0.51m、深さ0.29mを測る。上層に集中して土師器皿が正位の状態出土した。遺物の出土状況、遺構の形状から墓の可能性が考えられる。出土した遺物から13世紀後半(京都Ⅵ期中～Ⅶ期古)と考えられる。



第26図 土器溜り 5127
遺物出土状況

土器溜り 5129 (第27図、図版十四・十五)

D3グリッドに位置する。土器溜り5212と重複し、土器溜り5212に壊されている。平面形状は、長方形を呈する。規模は、長軸1.37m、短軸1.06m、深さ0.19mを測る。遺構の南壁及び東壁に沿って遺物が集中して出土している。北側では、青銅製の銚子が正位で出土している。また、土師器皿も同様に正位で南北両壁際から出土している。遺物に混じって、5～10cm大の礫が出土している。出土した遺物から、13世紀後半～14世前半(京都Ⅶ期)と考えられる。



第27図 土器溜り 5129
遺物出土状況

土器溜り 5139 (第25図、図版十五)

C3グリッドに位置する。平面形状は、円形を呈する。長軸0.68m、短軸0.62m、深さ0.29

mを測る。中心部に纏まった状態で、土師器皿が出土しているが、規則性はみられない。出土状況からは、廃棄土坑の可能性が考えられる。出土した遺物から13世紀半ば（京都VI新～VII期古）と考えられる。

土器溜り 5153（第28図、図版十五）

E3グリッドに位置する。土坑5152・土器溜り5213と重複し、土坑5152・土器溜り5213によって壊されている。残存状況から平面形状は、やや歪んだ方形を呈する。規模は、長軸1.72m、短軸1.62m以上、深さ0.34mを測る。覆土は、褐灰色泥砂で多量の炭化物が含まれている。多量の土師器皿が出土したが、明確な規則性はみられなかった。土師器皿を除去すると多量の炭が散っていた。出土した遺物から14世紀後半～15世紀前半（京都VIII期）と考えられる。第5面で検出しているが、第4面の遺構とみられる。



第28図 土器溜り5153
遺物出土状況

土器溜り 5175（第25図、図版十五）

B3グリッドに位置する。平面形状は円形を呈する。規模は、長軸0.28m、短軸0.25m、深さ0.16mを測る。土坑内西側に集中して土師器皿が出土した。土師器皿は、正位の状態で出土している。西壁際の土師器皿のみ伏せた状態で出土しているが、その下から正位の状態で土師器皿が出土している。出土した遺物から14世紀後半～15世紀前半（京都VIII期）と考えられる。第5面で検出しているが、第4面の遺構とみられる。

土器溜り 5212（第29図、図版十五）

D3グリッドに位置する。平面形状は楕円形を呈する。規模は、長軸1.54m、短軸1.07m、深さ0.23mを測る。断面形状は、皿状である。覆土層に土師器皿と共に礫が出土している。遺構の南西から北東に礫が4個並んでいる。土師器皿は、北壁沿い正位で置かれていた。出土した遺物から13世紀後半～14世紀前半（京都VII期）と考えられる。



第29図 土器溜り5212
遺物出土状況

土器溜り 5213（第25・30図、図版十五）

E3グリッドに位置する。土器溜り5152と重複し、西側が壊されている。残存状況から平面形状は楕円形と思われる。南北に軸をもち、規模は、長軸1.36m以上、短軸0.91m、深さ0.25mを測る。多量の炭層の上から土師器皿が出土した。土師器皿はほぼ土坑内全面に広がっており、瓦質土器の火鉢が伏せた状態で出土している。出土した遺物から14世紀代（京都VII～VIII期）と考えられる。



第30図 土器溜り5213
遺物出土状況

土坑 5009（第25図、図版十六）

E2グリッドに位置する。土坑5010と重複し、土坑5010によって西壁側が壊されている。残

存状況から、平面形状は方形を呈する。規模は、1.28 m、短軸 0.74 m以上、深さ 0.28 mを測る。覆土は、大きく2層に分かれ、第1層の焼土ブロックを含む黄褐色土を外すと、径 15 cm程の礫が壁際から出土した。礫の下には、厚さ 13 cmで繊維状の炭化層があり、炭化層は敷き詰めたような状態で検出した。出土した遺物から 15 世紀後半～16 世紀前半（京都IX期～X期古）と考えられる。第5面で検出しているが、第3面の遺構とみられる。

土坑 5015（第 25 図）

D2・3 グリッドに位置する。南側の一部上端を 5127 によって失われている。平面形状は、楕円形を呈する。規模は、長軸 2.55 m、短軸 1.40 m、深さ 0.50 mを測る。

土坑 5111（第 31 図、図版十六）

A・B 2 グリッドに位置する。西は調査区外へと延び、南は試掘坑や攪乱によって大部分が失われている。平面形状は長方形を呈する。規模は、長軸 5.63 m以上、短軸 2.17 m、深さ 0.72 mを測る。規模や位置等から廃棄土坑の可能性が考えられる。出土遺物は 15 世紀後半（京都IX期）と 13 世紀（京都VI期）のものがある。下層の遺物が混入しているが、遺構の年代は 15 世紀後半とみられ、第3面に相当すると考えられる。。

土坑 5126（第 10 図、図版十六）

D・E3 グリッドに位置する。平面形状は、隅丸方形を呈する。規模は、一辺が 1.37 m、短軸 1.25 m、深さ 0.41 mを測る。

土坑 5158（第 31 図）

D3 グリッドに位置する。約半分が西側にある攪乱によって壊されている。また、5134 によっても北側の一部が壊されている。残存状況から平面形状は、やや歪んだ楕円形を呈する。規模は、長軸 1.65 m、短軸 0.64 m以上、深さ 0.62 mを測る。土師器皿、青磁の碗が出土している。出土した遺物から 13 世紀後半～14 世紀前半（京都VII期）と考えられる。

土坑 5172（第 32 図、図版十六）

C・D3 グリッドに位置する。平面形状円形を呈する。規模は、径 1.60 m、深さ 1.98 mを測る。約 1 m掘り下げたところで、多量の礫が詰め込まれたような状況がみられた。礫は、20～30cm 大と 10cm 大の礫が見られた。井戸の可能性も考えられるが、断面等の状況から礫が組まれた状況は、見られなかった。出土遺物は、土師器皿、瓦質の羽釜が出土している。出土した遺物から 13 世紀代（京都VI期中～VII期古）と考えられる。

土坑 5178（第 31 図、図版十六）

B・C3 グリッドに位置する。南約半分を攪乱によって失っている。平面形状からやや歪な円形を呈する。規模は、長軸 97 cm、短軸 39 cm以上、深さ 80 cmを測る。遺物の出土はなかった。

土坑 5186（第 31 図、図版十六）

C3 グリッドに位置する。平面形状は、楕円形を呈する。規模は、長軸 1.00 m、短軸 0.89 m、深さ 0.44 mを測る。底部では灰層を確認した。出土した遺物から 13 世紀後半～14 世紀前半（京都VII期）と考えられる。

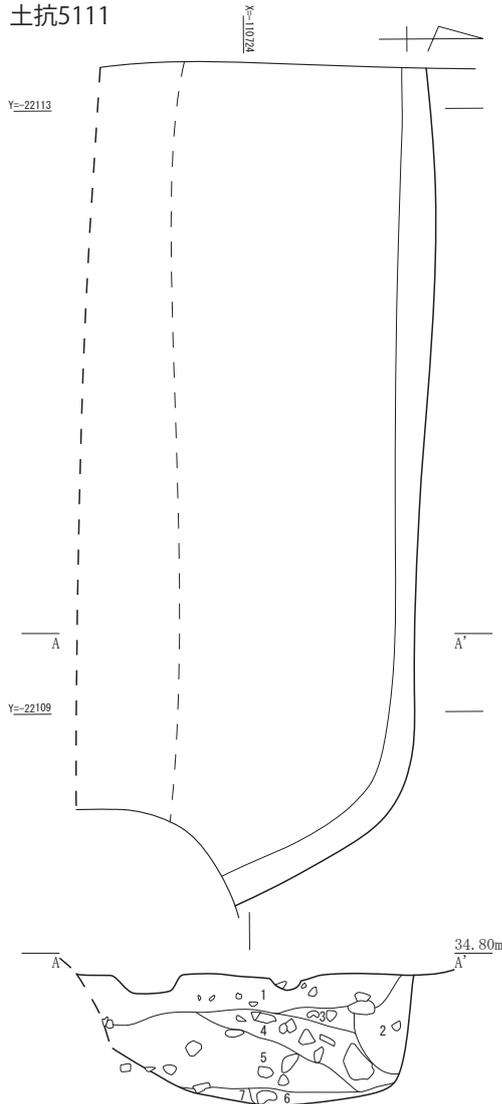
土坑 5188 (第 32 図、図版十六)

C3 グリッドに位置する。土坑 5174・5187 と重複し、土坑 5174・5187 によって北側が壊されている。規模は、長軸 0.77 m、短軸 0.67 m 以上、深さ 0.33 m を測る。底部には灰層が堆積し、その中からは土師器の鉢が出土した。出土した遺物から 12 世紀後半～13 世紀前半 (京都 VI 期) と考えられる。第 5 面で検出しているが、第 6 面の遺構とみられる。

土坑 5211 (第 32 図)

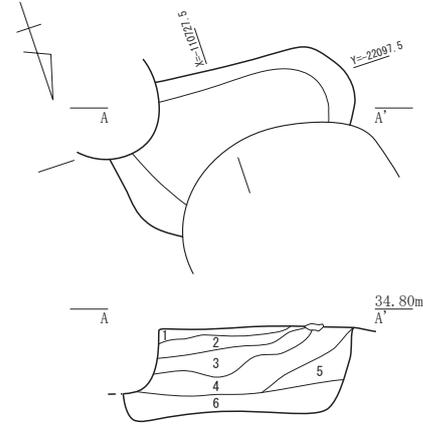
D3 グリッドに位置する。平面形状は円形を呈する。規模は、径 1.30 m、深さ 1.50 m を測る。断面形状は、箱型を呈する。形状から井戸の可能性も考えられるが、井戸枠や底部の曲物の痕跡

土坑5111



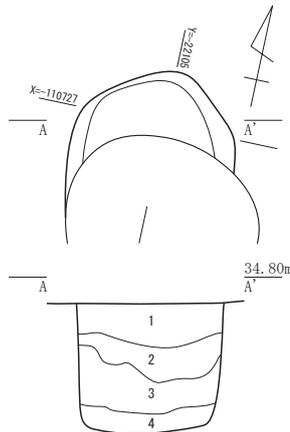
- 1 7.5YR4/1 褐灰色砂泥 しまりあり 粘性弱い 焼土粒子・炭化物・φ3cm 大の礫少量含む
- 2 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 しまりあり 粘性弱い 焼土粒子やや多量、炭化物少量含む
- 3 1層にやや類似する しまりあり 粘性弱い やや大型(10cm 大)の礫含む
- 4 7.5YR4/1 褐灰色砂泥 しまりあり 粘性弱い 焼土粒子・炭化物、φ5~15cm 大の礫少量含む
- 5 2.5Y4/1 黄灰色泥砂 しまりあり 粘性弱い 焼土粒子少量、炭化物・黄色ブロック多量含む
- 6 2.5Y5/1 黄灰色泥砂 しまり・粘性あり
- 7 2.5Y4/1 黄灰色泥砂 しまり・粘性あり 焼土粒子少量、炭化物・黄褐色土ブロック多量含む

土坑5158



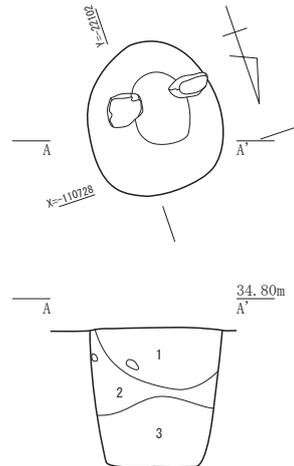
- 1 7.5YR3/2 黒褐色泥砂 しまり・粘性弱い 炭化物少量含む
- 2 2.5YR6/3 に近い 橙色砂質泥砂 しまりややあり 粘性なし 炭化物含む
- 3 7.5YR5/2 灰褐色泥砂 しまり弱い 粘性あり φ2~3cm の小石多量含む
- 4 7.5YR5/2 灰褐色泥砂 しまりあり 粘性弱い 焼土粒子少量含む
- 5 7.5YR5/2 灰褐色泥砂 焼土粒子少量・砂利混じる
- 6 7.5YR5/2 灰褐色泥砂 しまり・粘性あり φ3cm 大の礫多量含む

土坑5178

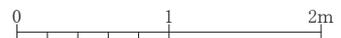


- 1 7.5YR4/1 褐灰色土 しまり・粘性あり 炭化物含む
- 2 7.5YR5/2 灰褐色土 しまり・粘性あり 黄色ブロック含む
- 3 7.5YR5/1 褐灰色土 しまり・粘性あり 炭化物少量含む
- 4 7.5YR5/1 褐灰色土 しまり・粘性あり 炭化物・黄色ブロック含む

土坑5186



- 1 7.5YR5/2 灰褐色泥砂 しまり・粘性あり 炭化物多量含む
- 2 7.5YR5/2 灰褐色泥砂 しまり強い
- 3 7.5YR3/2 黒褐色粘質土 しまり・粘性強い 炭化物含む



第 31 図 第 5 遺構面遺構図 2 (縮尺 1/50)

等はみられなかった。形状から素掘りの井戸の可能性も残るが、確定できなかった。出土した遺物から15世紀後半(京都IX期)と考えられる。第5面で検出しているが、第3面の遺構とみられる。

集石 5040 (第10図)

C2グリッドに位置する。攪乱によって8割方失われている。攪乱壁際で検出した集石遺構である。断面を観察する限りでは、土坑状の遺構の中に詰め込まれた状態であったと考えられる。遺物の出土はなかった。

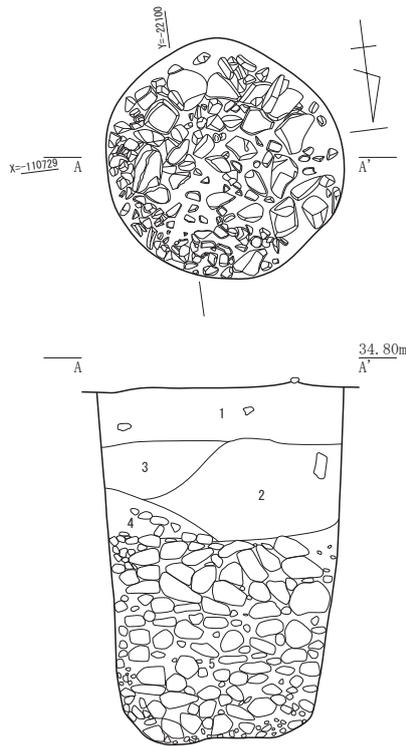
集石 5060 (第32図、図版十五)

C2グリッドに位置する。平面形状は、やや歪な楕円形を呈する。規模は、長軸0.66m、短軸0.46m、深さ0.16mを測る。平面プランは、10cm~20cm大の礫が地表面に露出した状態で確認された礫は土坑の中央部では床面まで詰め込まれた状態であった。礫を外すと、北壁際で東西に軸をおき、直線的で正位に土師器皿が5枚置かれていた。出土した遺物から15世紀後半(京都IX期)と考えられる。第5面で検出しているが、第3面の遺構とみられる。

集石 5073 (第32図、図版十五)

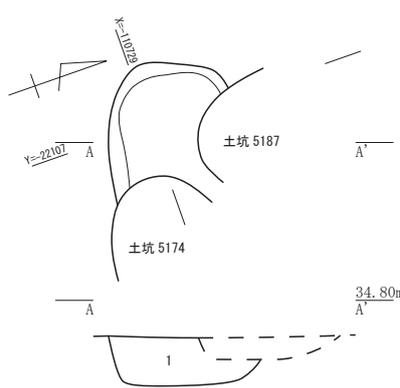
E2グリッドに位置する。平面形状は、やや歪んだ円形を呈する。規模は、長軸0.84m、短軸

土抗5172



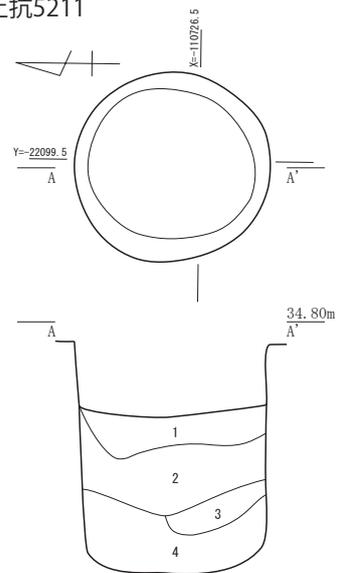
- 1 7.5YR4/2灰褐色泥砂 しまり・粘性弱い
炭化物・焼土粒子少量、φ1~2cm大の砂利多量含む
- 2 7.5YR5/1褐灰色泥砂 しまり弱い 粘性あり
炭化物少量含む
- 3 7.5YR5/1褐灰色泥砂 しまり弱い 粘性あり
黄褐色ブロック多量含む
- 4 7.5YR5/1褐灰色泥砂 φ10cm大の礫含む
- 5 7.5YR5/1褐灰色泥砂 炭化物少量含む
多量の礫を中心に構成

土抗5188



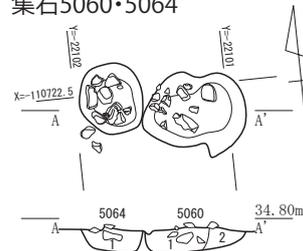
- 1 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまり・粘性あり
炭化物多量含む

土抗5211



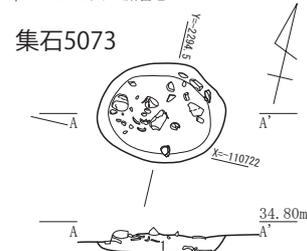
- 1 7.5YR4/1褐灰色泥粘質土 粘性強い
炭化物少量含む
- 2 7.5YR5/1褐灰色泥砂 しまりあり 粘性弱い
炭化物やや多量、焼土粒子含む
- 3 2.5YR4/3にぶい赤褐色泥砂
炭化物、焼土粒子多量、φ1cm大の礫少量含む
- 4 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまりややあり 粘性弱い
φ10~20cm大の礫含む

集石5060・5064

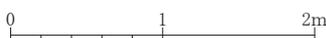


- 5064
- 1 2.5Y3/1黒褐色泥砂 しまりあり 粘性弱い
焼土粒子含む
- 5060
- 1 2.5Y3/1黒褐色泥砂 しまり・粘性あり
炭化物少量含む
- 2 7.5YR4/2灰褐色泥砂 しまり・粘性あり
やや砂質帯びる

集石5073



- 1 7.5YR5/1褐灰色泥砂 炭化物少量、
φ0.5~1cm大の小石多量含む



第32図 第5遺構面遺構図3 (縮尺1/50)

0.67 m、深さ 0.10 m を測る。5 ～ 15 cm 大の礫が多量に詰め込まれていた。出土した遺物から 12 世紀後半～ 13 世紀前半（京都 VI 期）とみられる。

第 8 節 第 6 面の遺構

第 6 遺構面は、11 ～ 12 世紀の遺構を中心とした平安時代後期のいわゆるウグイス整地層上で検出した遺構群である。また、上層面で未掘の遺構や、確認できなかった遺構も検出した。土器溜り、ヤコウガイの廃棄土坑、集石遺構等を検出した。

土器溜り 6026（第 33 図、図版十七）

F1 グリッドに位置する。土器溜り 6026 は、そのほとんどを南側の攪乱によって壊されている。また、北側は調査区外へと延びるため、正確な規模は不明である。残存部分での規模は、東西軸で 2.7 m、南北軸で 1.1 m 以上、深さ 0.36 m を測る。遺構の壁に沿って約 20 cm 大の礫が出土している。出土遺物は、土師器皿が出土している。出土した遺物から 14 世紀代（京都 VII 期中～VIII 期古）と考えられる。第 6 面で検出しているが、第 5 面の遺構とみられる。

土器溜り 6028（第 33 図、図版十七）

F1 グリッドに位置する。南西側を土器溜り 6026 によって壊されている。また北側は調査区外に延びる。そのため、検出されたのは、僅かな部分であり、規模の詳細は不明である。残存部分での規模は、東西軸で 1.21 m 以上、深さ 0.10 m を測る。土師器皿が多く出土している。出土状況は、正位のものと同伏せられた状態の土師器皿が混在している。出土遺物からみて、14 世紀後半（京都 VII 期新～VIII 期中）と考えられる。第 6 面で検出しているが、第 4 面の遺構とみられる。

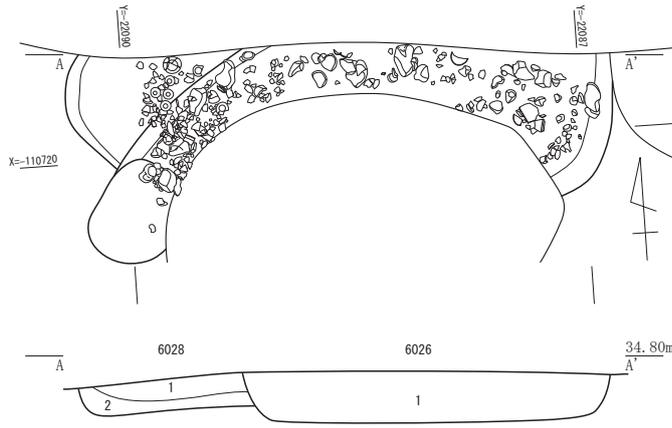
土器溜り 6117（第 33 図、図版十八）

E2 グリッドに位置する。平面形状は、隅丸長方形を呈する。東側を攪乱によって壊されている。規模は、長軸 1.13 m 以上、短軸 0.62 m、深さは 0.32 m を測る。断面形状は、箱形を呈する。上層部分から土師器皿が正位の状態で 30 点以上出土した。他にも鉢、白磁などと共に鉄釘が出土している。土師器皿等を取り除くと、底部中央よりやや東よりで、短刀が出土した。短刀は、長辺を南北方向にした状態で出土している。また、木質が検出されていることから鞘に収まった状態で埋納されていたと考えられる。土器の出土状況や短刀の位置などから墓と考えられる。出土遺物は、14 世紀代（京都 VII 期中～VIII 期古）と考えられる。第 6 面で検出しているが、第 5 面の遺構とみられる。

土器溜り 6165（第 33 図）

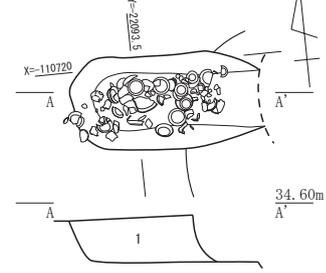
D 2 グリッドに位置する。平面形状は、長方形を呈する。規模は、長軸 1.50 m、短軸 0.75 m、深さ 0.44 m を測る。東側に底面との比高 0.16 m のテラス状の段差を有する。底面中心部には、径 15 cm 程度の礫があり、その下からは、須恵器の甕の口縁部が出土した。また、この礫を中心にして、周囲には土師器皿、白磁の小皿などが正位の状態で出土している。また、伏せた状態の白磁の碗が出土した。テラス部分では、北側に遺物が集中している状況が見られた。テラス部北壁際に 15 cm 前後の礫が集中し、また須恵器の甕胴部や底部の破片が出土している。その内側からは、規則性は見られないが土師器皿が正位ものと伏せた状態のものが出土している。テラス上

土器溜り6026・6028



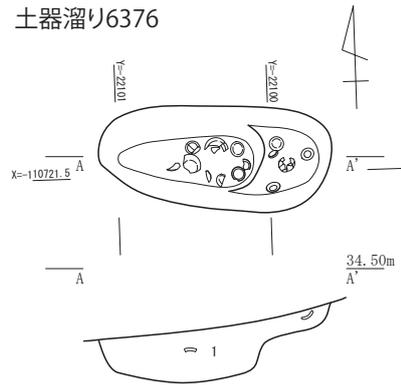
- 6026
1 5Y4/2灰オリブ色泥砂 しまり・粘性あり 炭化物少量含む
- 6028
1 7.5YR4/1褐灰色泥砂
2 5Y4/2灰オリブ色泥砂 しまり弱い 炭化物多量含む

土器溜り6117



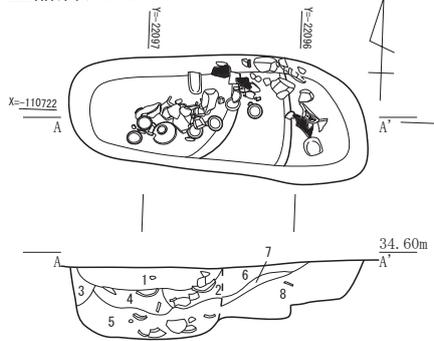
- 1 7.5YR4/1褐灰色泥砂 粘性ややあり 炭化物少量含む

土器溜り6376



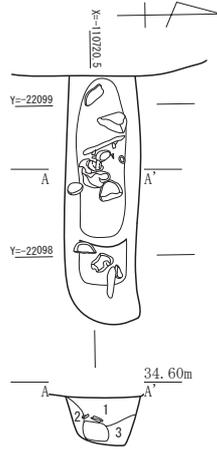
- 1 7.5YR4/2灰褐色泥砂 しまり弱い 粘性あり 炭化物やや多量、焼土粒子極少量含む

土器溜り6165



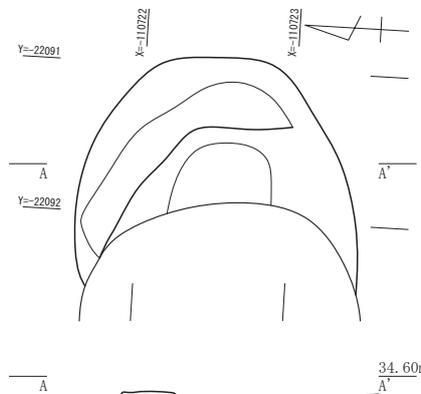
- 1 2.5Y6/2灰黄色泥砂 しまり弱い 粘性あり 炭化物多量・橙色粒子少量含む
- 2 2.5Y7/2灰黄色泥砂 しまり弱い 粘性あり 炭化物少量含む
- 3 2.5Y6/2灰黄色泥砂 しまり・粘性あり 炭化物少量含む
- 4 2.5Y7/2灰黄色泥砂 しまりあり 粘性やや弱い 炭化物少量含む
- 5 2.5Y6/2灰黄色泥砂 しまり弱い 粘性あり 黄褐色ブロック含む
- 6 2.5Y6/2灰黄色泥砂 粘性あり
- 7 2.5Y6/3にぶい黄色泥砂 粘性ややあり 炭化物少量含む
- 8 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 炭化物少量含む

土器溜り6192



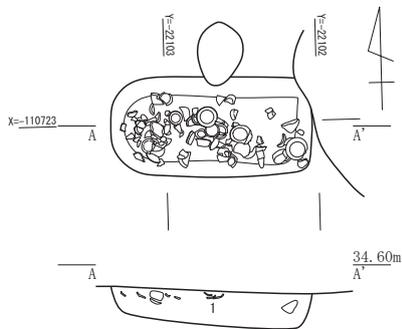
- 1 7.5YR4/1褐灰色泥砂 炭化物、黄色粒子多量含む
- 2 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまり・粘性あり 炭化物少量含む
- 3 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまり・粘性あり 炭化物・黄褐色粒子少量含む

土器溜り6377



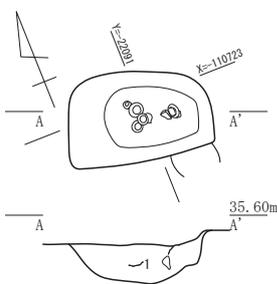
- 1 10YR3/2黒褐色泥砂 しまりあり 粘性弱い 炭化物やや多量含む
- 2 10YR4/2灰黄褐色泥砂 しまりあり 粘性ややあり 炭化物・焼土粒子少量含む
- 3 10YR4/2灰黄褐色泥砂 2層に類似 色調やや明るい
- 4 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 上部部に帯状で炭化物多量に混入 黄褐色土ブロック含む
- 5 10YR3/1黒褐色泥砂 炭化物含む 多量の土器で埋没

土器溜り6256

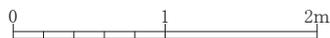


- 1 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまりあり 粘性弱い 炭化物少量含む

土器溜り6342



- 1 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまり弱い 炭化物少量含む



第33図 第6遺構面遺構図1 (縮尺 1/50)

と底部での遺物には、15 cm程度の標高差がある。形状、出土状況から墓の可能性が考えられる。出土遺物から12世紀半ば（京都V期中～新）と考えられる。

土器溜り 6192（第33図、図版十八）

D2グリッドに位置する。平面形状は、長方形を呈する。1.52 m以上、0.49 m、深さ0.60 mを測る。東側上端部を、土坑6369によって壊されている。東壁際、中央付近や西壁付近には、人頭大の礫が置かれていた。中央の礫の上には3枚の土師器皿が伏せた状態で出土している。また、2本の短刀が出土している。東壁際から出土した短刀（金61）は、東壁にたけかけていたような状態で出土した。もう一本の短刀（金60）は、重なり合う土師器皿の西側で水平に置かれた状態で出土した。短刀は、何れも鞘に収まった状態で出土している。出土遺物から14世紀後半～15世紀前半（京都VIII期）と考えられる。第6面で検出しているが、第4面の遺構とみられる。

土器溜り 6256（第33図、図版十九）

C2グリッドに位置する。平面形状は長方形を呈する。規模は、長軸1 m 32 cm、短軸66 cm、深さ26 cmを測る。断面形状は、箱形を呈する。覆土は、灰黄褐色砂質土で炭化物を少量含む層である。土師器皿がほぼ正位で置かれていた。土師器皿の他に、白磁や焼締陶器などが出土した。出土した遺物から12世紀前半（京都V期）と考えられる。

土器溜り 6342（第33図、図版十九）

E2グリッドに位置する。平面形状は、隅丸長方形を呈する。規模は、長軸1.03 m以上、短軸0.61 m、深さ0.37 mを測る。底部より約5 cm上層で土師器皿が3枚出土した。また、東壁に張り付くように伏せた状態で土師器皿が出土している。また、この土師器皿の下からも土師器皿が合わせ口のような状態で出土している。出土した土師器皿から15世紀後半（京都IX期）と考えられる。第6面で検出しているが、第3面の遺構とみられる。

土器溜り 6376（第11図、図版十九）

C・D2グリッドに位置する。平面形状は、東西の短辺が弧を描く長楕円形を呈する。主軸方向は、東西にとる。規模は、長軸1.52 m、短軸0.64 m、深さ0.67 mを測る。東側約1/3程度のあたりは、テラス状で一段高くなり、深さは、0.22 mを測る。このテラス状部からは、土師器皿4点と青白磁の合子が出土している。土坑6117と同様に土器が上層に集中して出土していることから、墓としての可能性も考えられる。出土した遺物から12世紀代（京都V期中～VI期古）と考えられる。

土器溜り 6377（第33図、図版十七）

E2グリッドに位置する。大型土坑である。西側半分以上が攪乱によって壊されている。残存部分での規模は、南北軸1.84 m、東西軸0.96 m以上、深さ1.83 mを測る。断面形状は、漏斗型を呈する。覆土は灰褐色泥砂で、隙間無く土師器皿など多量の土器で埋まっていた。出土状況から廃棄土坑と考えられる。出土した遺物から11世紀半ば～後半（京都IV期中）と考えられる。

土器溜り 6541（第34図、図版十七）

C3グリッドに位置する。平面形状は、隅丸長方形を呈する。規模は、長軸1.35 m以上、短軸0.90 m、深さ0.20 mを測る。断面形状は、箱型を呈する。主軸方向は北東に向く。覆土は褐灰

色泥砂で埋まっており、内部には、土師器皿、瓦器皿が正位に置かれ出土している。この他に須恵器甕の胴部、瓦が出土している。出土した遺物から12世紀後半～13世紀前半（京都VI期）と考えられる。

土器溜り 6559（第34図、図版十七）

C3グリッドに位置する。平面形状は、楕円形を呈する。長軸0.67m、短軸0.45m、深さ0.25mを測る。覆土は、灰褐色泥砂で、細かく割れた状態で焼締陶器が礫と共にぎっしりと詰め込まれたような状態で出土した。この他、土師器皿、白磁などが出土している。出土した遺物から15世紀後半～16世紀前半（京都IX期中～X期中）と考えられる。第6面として検出しているが、第3面の遺構とみられる。

土器溜り 6561（第34図、図版十八）

C3グリッドに位置する。土坑6540と重複し、土坑6540に壊されている。残存状況から平面形状は、やや歪んだ方形と考えられる。規模は、南北軸で1.67m、東西軸で0.93m以上、深さ0.27mを測る。主軸方向は、南北を示す。土師器皿は、概ね正位に置かれた状態で出土した。出土した遺物から12世紀後半（京都V期中～VI期古）と考えられる。

土坑 6007（第34図、図版二十）

F2グリッドに位置する。平面形状楕円形を呈する。規模は、長軸0.41m、短軸0.36m、深さ0.19mを測る。土師器皿が横位に合わせ口の状態で出土した。出土した遺物から10世紀後半（京都III期）と考えられる。

土坑 6049（第34図）

F2グリッドに位置する。土坑6048・6051と重複し、北側を土坑6048に、南西側を土坑6051によって壊されている。残存状況から平面形状は、長方形と思われる。残存規模は、南北軸0.58m以上、東西軸0.75m以上、深さ0.39mを測る。

土坑内からは、ヤコウガイの貝殻がまとまった状態で出土した。

土坑 6066（第11図）

E2グリッドに位置する。南側上端の一部を上層遺構によって壊されている。残存状況から平面形状は、楕円形を呈する。規模は、長軸0.80m、短軸0.34m以上、深さ0.10mを測る。土坑内には、5～10cm大の礫が壁に沿うようにして検出された。出土した土師器皿から14世紀後半～15世紀前半（京都VIII期）と考えられる。第6面で検出しているが、第4面の遺構とみられる。

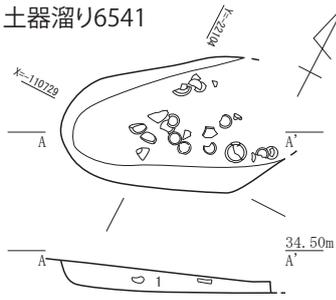
土坑 6092（第34図）

E2グリッドに位置する。平面形状はやや歪んだ円形を呈する。規模は、長軸0.42m、短軸0.37m、深さ0.30mを測る。覆土中に多量の焼土ブロックが含まれる。

土坑 6095（第34図、図版十九）

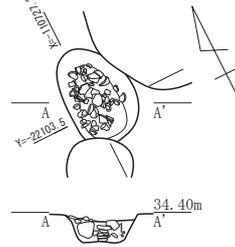
E2グリッドに位置する。平面形状は、隅丸長方形を呈する。規模は、長軸0.68m、短軸0.47m、深さ0.30mを測る。断面形状は、箱型を呈する。遺構内は、約10cm大の礫の礫で覆われていた。礫の下には、瓦質土器の鍋がほぼ中央付近に据えられた状態で出土した。鍋の中の礫を外すと、底部中心よりやや南よりで、土師器皿が4枚重なった状態で出土した。4枚の土師器皿は

土器溜り6541



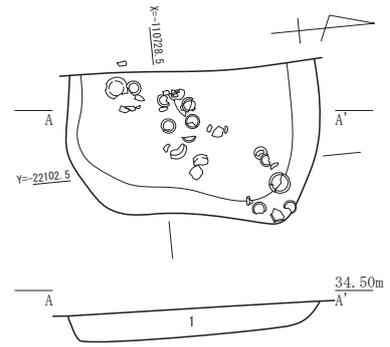
1 7.5YR5/1褐灰色泥砂 しまり・粘性弱い
炭化物多量含む

土器溜り6559



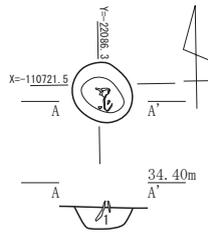
1 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまり弱い
焼土粒少量含む

土器溜り6561



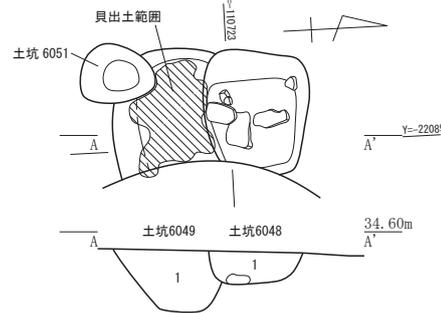
1 7.5YR4/2灰褐色泥砂 しまり弱い 炭化物少量含む

土坑6007



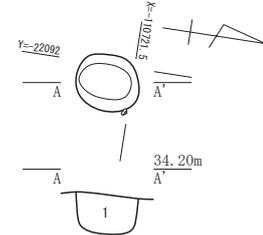
1 7.5YR4/1褐灰色泥砂 粘性あり
炭化物少量含む

土坑6048・6049



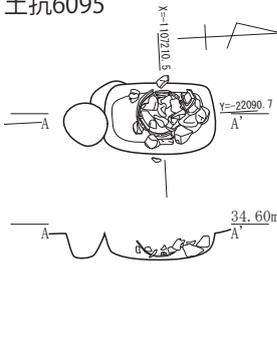
6048
1 7.5YR4/1褐灰色泥砂 炭化物少量含む
6049
2 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまり弱い 貝殻多量含む

土坑6092

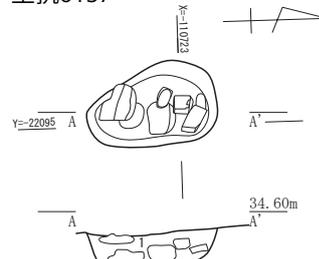


1 7.5YR4/2灰褐色泥砂
しまりやや弱い 粘性弱い
炭化物、焼土粒子多量、
黄褐色粘土ブロック含む

土坑6095

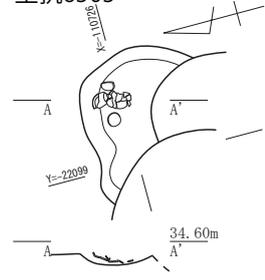


土坑6137

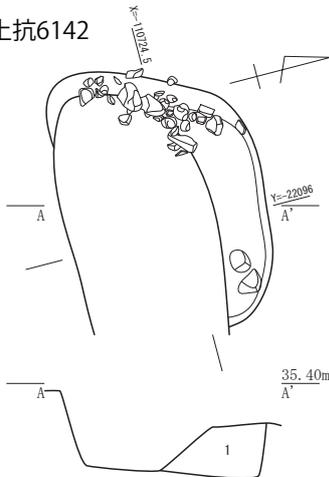


1 7.5YR5/2灰褐色泥砂 しまりあり
粘性弱い 炭化物やや多量含む

土坑6505

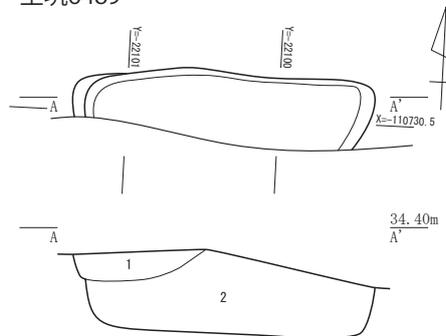


土坑6142



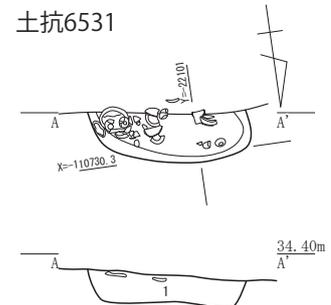
1 7.5YR4/2灰褐色泥砂 しまり弱い 炭化物少量含む

土坑6489

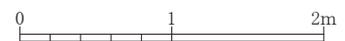


1 6531覆土
2 2.5YR3/1黒褐色泥砂 しまり・粘性あり 炭化物多量含む

土坑6531



1 7.5YR5/1褐灰色泥砂 しまり弱い
粘性あり やや砂質強い
炭化物やや多量、φ5cm大の礫少量、
黄色ブロック含む



第34図 第6遺構面遺構図2 (縮尺1/50)

全て正位で重なっていた。この土師器皿を外すと、鍋の底部中心は、破損した状態が見られた。鍋を外すと底部下と鍋の南西壁際、北西壁際から土師器皿が出土している。北西壁の土師器皿は破片で、南西と鉢の下から出土した土師器皿は、正位の状態で出土している。出土した遺物から14世紀後半～15世紀前半（京都Ⅷ期）と考えられる。第6面で検出しているが、第4面の遺構とみられる。

土坑 6119（第11図）

D・E 1 グリッドに位置する。北側は調査区外に延びる。また、南側の上端部を上層遺構によって壊されている。残存状況から方形もしくは長方形であったと考えられる。残存規模は、南北軸1.00 m以上、東西軸1.32 m以上、深さ0.35 mを測る。

出土遺物は、土師器皿、入子、捏ね鉢、などが出土している。出土した遺物から14世紀後半（京都Ⅷ期）と考えられる。第6面で検出しているが、第4面の遺構とみられる。

土坑 6137（第34図、図版二十）

D2 グリッドに位置する。平面形状は、長方形を呈する。規模は、長軸0.80 m、短軸0.53 m、深さ0.24 mを測る。断面形状は、箱型を呈する。坑内には、礎石と思われる平坦な礫が3個置かれていた。また、瓦加工の床板が敷かれていた。検出状況から礎石建物の一部と考えるが、これと同様な状態の礎石建物は検出されていない。出土遺物から15世紀代（京都Ⅷ期中～Ⅸ期新）と考えられる。第6面で検出しているが、第4面の遺構とみられる。

土坑 6142（第34図）

D 2 グリッドに位置する。上層遺構によってそのほとんどが失われている。残存部の規模は、東西軸1.62 m、南北軸1.31 m以上、深さ0.48 mを測る。西壁際に10～20 cm大の礫が壁に沿って出土した。遺物の出土はなかった。

土坑 6251（第11図）

C2 グリッドに位置する。北側及び西側のほぼ2/3が土坑 6390によって壊されている。残存規模は、長軸1.28 m以上、短軸0.70 m以上、深さ0.30 mを測る。出土遺物は、土師器皿、瓦質の鍋がある。出土した遺物から14世紀前半（京都Ⅶ期中～新）と考えられる。第6面で検出しているが、第5面の遺構とみられる。

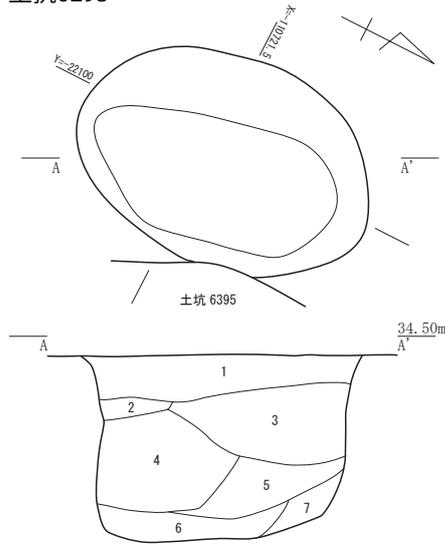
土坑 6293（第35図、図版二十）

B2 グリッドに位置する。平面形状は、楕円形を呈する。東側で上端の一部が土坑 6395と重複するが、6395が新しい。規模は、長軸1.91 m、短軸1.41 m、深さ1.39 mを測る。断面形状は、箱型である。出土した遺物から15世紀後半（京都Ⅸ期）と考えられる。第6面で検出しているが、第3面の遺構とみられる。

土坑 6294（第11図、図版二十）

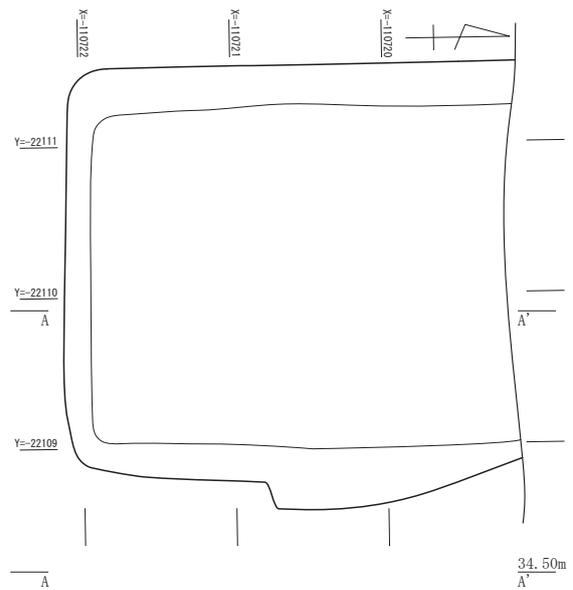
B2 グリッドに位置する。土坑 6293・6295と重複するが、どの遺構よりも古い。平面形状は、残存状況からみてほぼ正方形と見られる。規模は、長軸2.13 m、短軸1.70 m以上、深さ、0.82 mを測る。断面形状は、箱型を呈する。出土した遺物から15世紀後半（京都Ⅸ期）と考えられる。第6面で検出しているが、第3面の遺構とみられる。

土抗6293



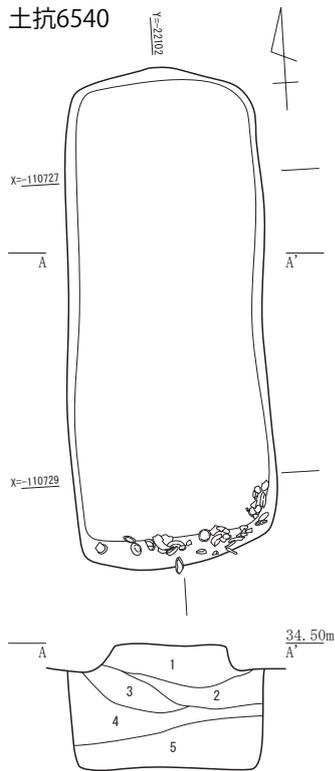
- 1 2.5Y5/3黄褐色泥砂 炭化物少量、
φ6~13cm大の礫・黄色ブロック含む
- 2 2.5Y5/3黄褐色泥砂 焼土粒子含む
- 3 2.5Y5/4黄褐色泥砂 炭化物少量、
焼土粒子・φ2~8cm大の礫含む
- 4 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 炭化物少量、
φ2~5cm大の礫含む
- 5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 しまりあり
φ3cm大の礫含む
- 6 10YR4/4褐色泥砂 しまりあり 粘性弱い
- 7 10YR4/4褐色泥砂 しまりあり 粘性弱い

土抗6295



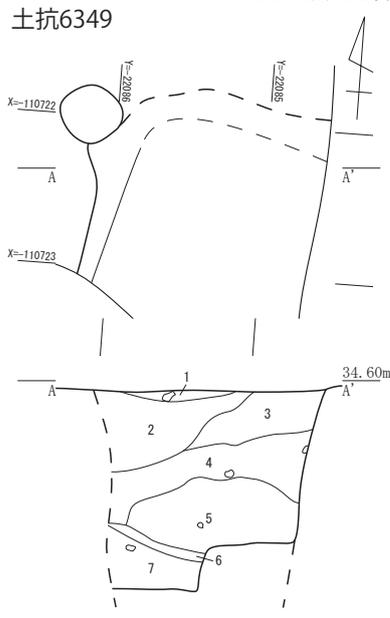
- 1 7.5YR4/1褐灰色砂泥 しまり・粘性弱い 炭化物・焼土粒子多量、
φ10cm大の礫含む
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂泥 しまりややあり 炭化物やや多量、
焼土ブロック少量含む 黄灰色土多量に混入
- 3 7.5YR4/1褐灰色泥砂 粘性あり 炭化物・焼土含む
- 4 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまり弱い 炭化物・焼土少量含む
- 5 10YR5/6黄褐色粘質土 しまり・粘性あり
- 6 10YR5/1褐灰色砂質土 しまり弱い

土抗6540



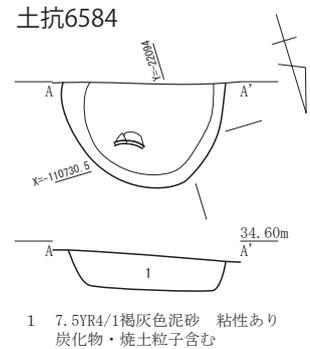
- 1 7.5YR5/2灰褐色泥砂 しまり・粘性弱い
炭化物多量、焼土粒子含む
- 2 炭層 しまり・粘性あり 焼土粒少量含む
- 3 7.5YR5/1褐灰色泥砂 しまりあり 粘性弱い
炭化物やや多量、焼土粒子少量含む
- 4 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまりあり 粘性弱い
炭化物多量含む
- 5 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまり・粘性弱い
炭化物含む

土抗6349



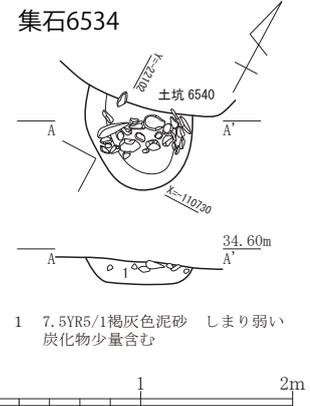
- 1 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまりあり 粘性弱い
炭化物少量含む
- 2 7.5YR4/1褐灰色泥砂 しまりあり 粘性弱い
φ3cm大の礫・黄褐色土ブロック含む
- 3 2層に類似 色調やや明るい
- 4 10YR5/2灰黄褐色泥砂 炭化物、φ3cm大の礫少量含む
- 5 炭層
- 6 5Y6/1灰色粘土層 しまりあり 炭化物少量含む
- 7 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂 しまり弱い 粘性あり
炭化物少量含む

土抗6584



- 1 7.5YR4/1褐灰色泥砂 粘性あり
炭化物・焼土粒子含む

集石6534



- 1 7.5YR5/1褐灰色泥砂 しまり弱い
炭化物少量含む

第35図 第6遺構面遺構図3 (縮尺 1/50)

土坑 6295 (第 35 図、図版二十)

B2 グリッドに位置する。北側は、土坑 6312 によって壊されている。平面形状は、残存状況からみて長方形であったと考えられる。規模は、長軸 2.90 m 以上、短軸 2.80 m、深さ 1.44 m を測る。断面形状は、箱型を呈する。床面からは、輸入陶器の褐釉壺と黄釉鉄絵盤が出土した。遺物からみて 13 世紀半ば～後半（京都VI期新～VII期古）と考えられる。第 6 面で検出しているが、第 5 面の遺構とみられる。

土坑 6349 (第 35 図)

F2 グリッドに位置する。大型土坑である。西側を攪乱と土坑 6008 によって壊されている。また、調査区壁際での検出であったため、表層から 3 m 以上の深さがあり崩落の危険性を考慮し、半裁で調査を留めた。平面形状は、残存状況から円形あるいは楕円形であったと考えられる。平面プランを含めた規模は、南北軸 1.87 m 以上、東西軸 1.47 m 以上、深さ 1.30 m 以上を測る。覆土は、7 層に分層したが、5 層からは粒子の細かい有機質の炭層が検出された。遺構の形状や規模からは大型の廃棄土坑と考えられるが、調査区東端にあり、室町通り沿いであるため、廃棄土坑が長期間あいていた可能性は低いと考えられる。一時的な作業で掘られた土坑であると考えられる。出土した遺物から 16 世紀代（京都X期）と考えられる。第 6 面で検出しているが、第 3 面の遺構とみられる。

土坑 6489 (第 34 図)

C・D4 グリッドに位置する。ほとんどの部分が南調査区外のため、平面形状は不明である。検出規模は、長軸 1.80 m、短軸 0.40 m 以上、深さ 0.60 m を測る。遺物の出土はなかった。

土坑 6505 (第 34 図、図版十七)

D3 グリッドに位置する。6504 と重複し、6504 に壊されている。残存状況での規模は、南北軸で 0.49 m、深さ 0.15 m を測る。遺構は、部分的にしか残っていないため詳細は不明であるが、北壁際から南に向かって土師器が正位の状態で出土している。出土した遺物から 12 世紀後半（京都V期新～VI期古）と考えられる。

土坑 6531 (第 34 図、図版十七)

C4 グリッドに位置する。調査区南壁際で検出した。平面形状は、調査区壁際での検出であり、詳細は不明である。規模は、検出状況で長軸 1.04 m、短軸 0.32 m、深さ 0.20 m を測る。出土した遺物から 15 世紀半ば（京都VIII期新～IX期中）と考えられる。第 6 面で検出しているが、第 4 面の遺構とみられる。

土坑 6540 (第 35 図、図版二十)

C3 グリッドに位置する。平面形状長方形の大型土坑である。主軸方向は、南北である。規模は、長軸 3.31 m、短軸 1.28 m、深さ 0.82 m を測る。遺物がまとまって出土したのは、南壁に貼り付いたような状態で土師器皿・須恵器の甕胴部・鍋口縁部などが出土している。出土遺物に規則性は無く、廃棄されていたものと考えられる。出土遺物から 14 世紀前半（京都VII期）と考えられる。第 6 面で検出しているが、第 5 面の遺構とみられる。

土坑 6584 (第 35 図、図版二十)

E4 グリッドに位置する南側は、調査区外へ延びるため。正確な規模は不明である。残存状況からみて円形もしくは楕円形の土坑と考えられる。規模は、東西軸 0.99 m、南北軸 0.69 m、深さ 0.24 m を測る。底部からは、瓦質土器の羽釜が出土している。出土した遺物から 12 世紀後半～13 世紀前半(京都VI期)と考えられる。

集石 6534 (第 35 図)

C3 グリッドに位置する。土坑 6540 と重複し、土坑 6540 によって壊されている。平面形状は、残存状況から楕円形であったと考えられる。規模は、長軸 0.65 m、短径 0.55 m 以上、深さ 0.30 m を測る。15 cm～20 cm の礫が、南西から北東方向に長軸をもって、平面形状が長方形に埋め込まれていた。礫の範囲は、長軸 0.58 m、短軸 0.22 m を測る。根石の可能性が考えられる。遺物の出土はわずかであり、年代の特定はできなかった。

集石 6556 (第 36 図)

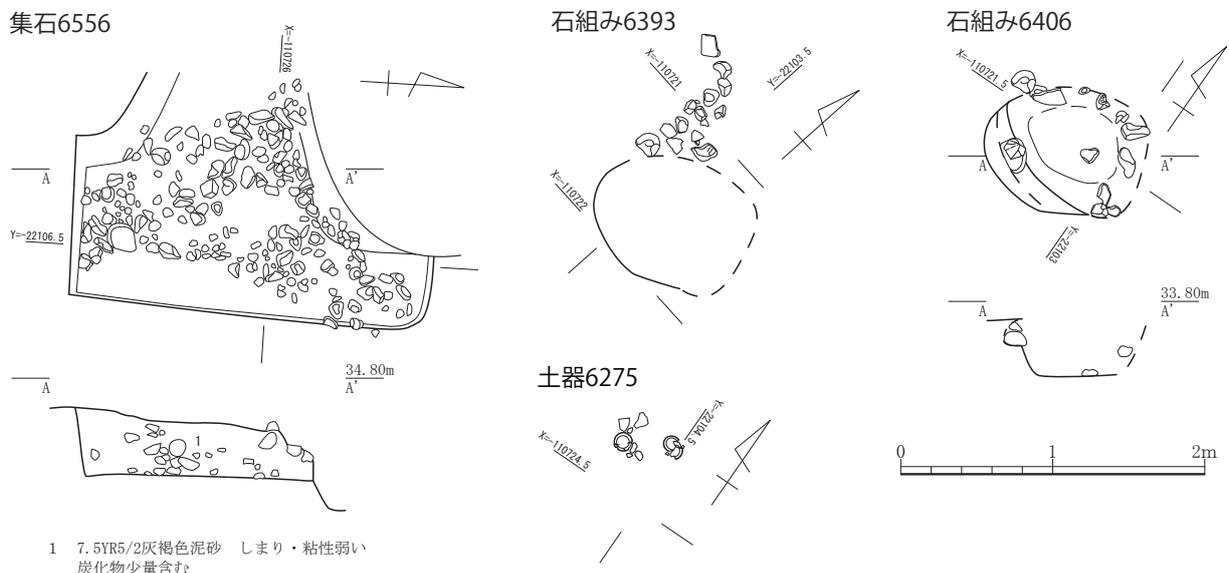
B3 グリッドに位置する。北西角と南西側は攪乱と上層遺構に拗って壊されている。残存状況から平面形状は方形もしくは、長方形であったと考えられる。規模は、長軸 2.39 m、短軸 1.65 m、深さ 0.44 m を測る。上層は、一見石敷のような様相を呈している。壁面は、ほぼ 90° で垂直に立ち上がる。床面には、礫が敷き詰められた状況は見られない。出土遺物から 14 世紀代(京都VII期中～VIII期古)と考えられる。第 6 面で検出しているが、第 5 面の遺構とみられる。

石組み 6393 (第 36 図)

C2 グリッドに位置する。土坑 6345 掘削中に検出した。上層遺構等によってそのほとんどが失われている。15 cm 前後の礫が南北方向に南から約 73 cm 直線的に認められたが、詳細は不明である。出土した遺物から 15 世紀後半(京都IX期)と考えられる。第 6 面で検出しているが、第 3 面の遺構とみられる。

石組み 6406 (第 36 図)

C2 グリッドに位置する。土坑 6390 を掘削中に検出したため、明確な壁はごく一部分しか検出



第 36 図 第 6 遺構面遺構図 4 (縮尺 1/50)

できなかつた。検出状況か見て、壁際に礫が楕円形状に巡っていたと考えられる。礫を壁際とにあるとした場合の規模は、長軸 0.62 m、短軸 0.52 m、深さ、0.70 mを測る。柱を据えその周りに礫を用いて固定した可能性も考えられる。

石組み 6623 (第 11 図)

C3 グリッドに位置する。石組み遺構である。上層遺構によってほとんど壊されているため一部分しか検出できていない。南北方向に礫が検出された。出土遺物から 14 世紀後半～15 世紀前半(京都Ⅷ期)と考えられる。第 6 面で検出しているが、第 4 面の遺構とみられる。

土器 6275 (第 36 図、図版十九)

C2 グリッドに位置する。土坑等の遺構は、確認できないが、3 枚の土師器皿が全て正位の状態で出土した地点である。このうち東側の 2 枚は、重なった状態で出土している。この 2 枚の土師器皿より約 30 cm 北東で 1 枚の土師器皿が出土している。また、この土師器皿との関連は、不明であるが、土師器皿の周囲からは、須恵器甕の胴部が出土している。出土した遺物から 14 世紀前半～半ば(京都Ⅶ期中～Ⅷ期古)と考えられる。第 6 面で検出しているが、第 5 面の遺構とみられる。

第 9 節 第 7 面の遺構

第 7 面では、弥生時代～古墳時代の遺物を伴う自然流路を検出した。また、この面では、平安時代初頭から中期にかかる遺構を検出したが、上層からの掘込みによってその多くは失われていた。

土坑 7034 (第 12 図)

C2 グリッドに位置する。西側を上層遺構によって失われている。残存状況から平面形状は、楕円形と思われる。規模は、長軸 0.61 m 以上、短軸 0.56 m、深さ 0.15 mを測る。出土遺物は、古式土師器の甕が出土している。出土した遺物から古墳時代中期の布留式古段階から中段階の時期と考えられる。

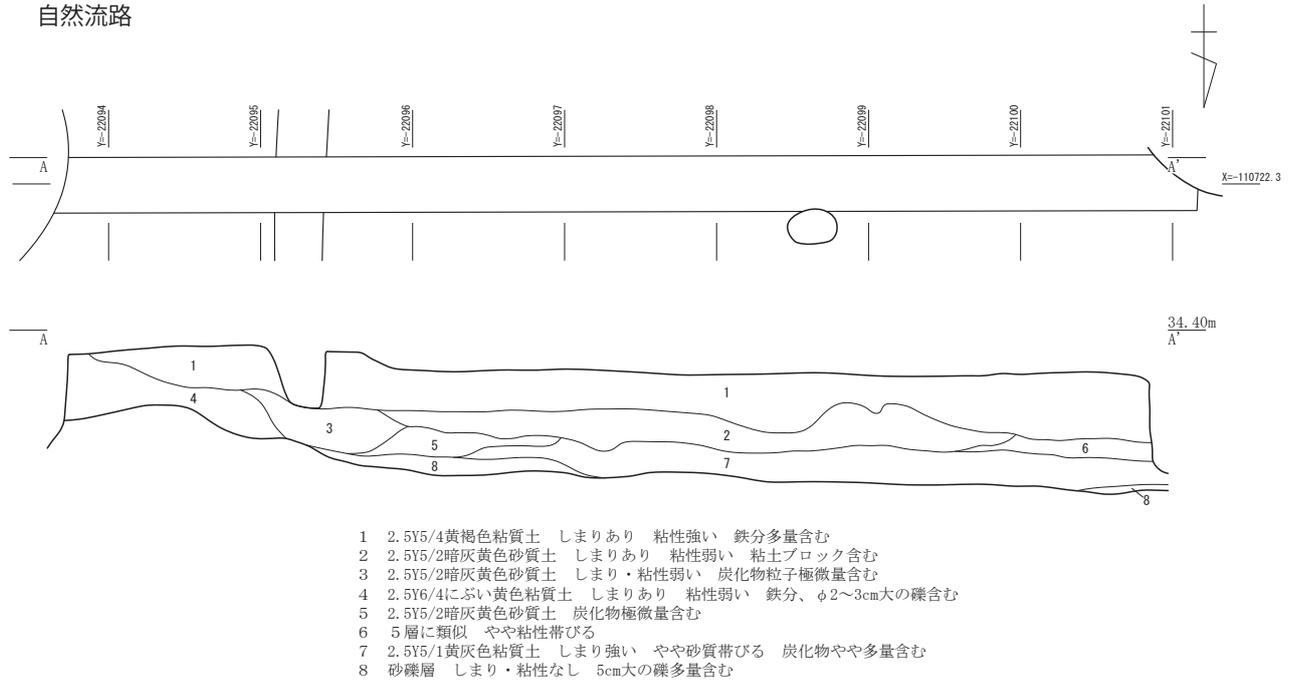
竪穴状遺構 7030 (第 37 図、図版二十)

C2 グリッドに位置する。平面形状は、不整形な方形を呈する。規模は、長軸 2m94cm、短軸 2m34 cmを測る。断面形状は、箱型である。構内からは 5 基の土坑(7015、7016、7051、7052、7045)と東側壁際に溝状の遺構(7053)を検出した。小型の住居址を想定したがこれらの遺構は、支柱穴としては捉えられるものはなかつた。深さは、概ね 0.10～0.15 mである。また壁際の溝状遺構は、壁に沿って 1.18 m、幅 0.17 m、深さ 0.12 mで、断面形状は U 字を呈する。検出されているのは、東壁の一部分のため周溝としての機能は無かつたものと考えられる。出土遺物から 9 世紀前半～半ば(京都Ⅰ期中～Ⅱ期古)と考えられる。

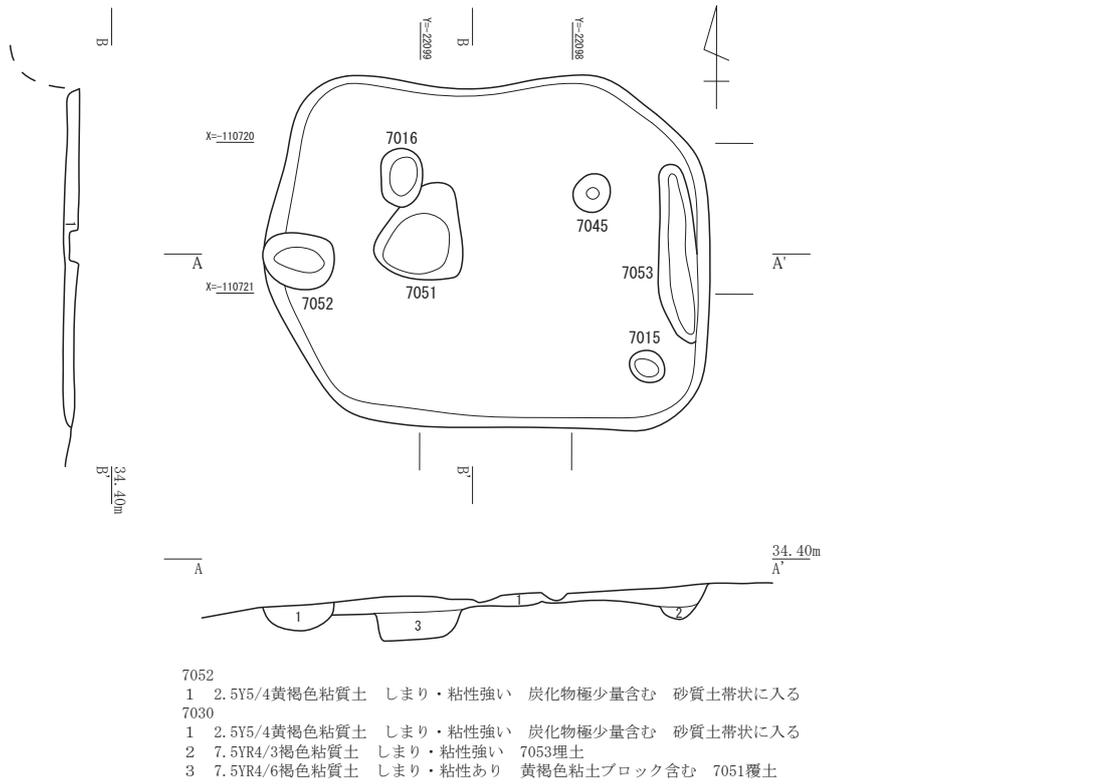
自然流路 (第 37 図)

調査区北西から南東に延びる流路を確認した。深さは、約 0.4 mを測る。覆土は、灰褐色の粘土層で流路底には砂礫層が広がる。東岸は確認できたが、西岸は調査区内では確認できなかつた。流路の幅は、15m 以上あつたものと考えられる。ただし流路は深さ 0.4 mと浅いため湿地状の窪みであつた可能性も考えられる。この砂礫層上から弥生時代中期の遺物が確認された。

自然流路



豎穴状遺構7030



第37図 第7遺構面遺構図 (縮尺 1/50)

第4章 遺物

第1節 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物はコンテナ数で286箱である。なお、整理段階でランク分けを行った結果、211箱となった。遺物の種類は土師器、須恵器、陶磁器、焼締陶器、瓦質土器、弥生土器、金属製品、石製品など弥生時代から江戸時代までの遺物が出土した。

以下、遺構別に概要を述べる。掲載遺物の詳細については、第6表の出土遺物観察表に記載した。

第4表 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
江戸時代中期以降	土師器、陶磁器、金属製品		陶磁器1点、金属製品6点、石製品1点		
安土桃山時代～江戸時代前期	土師器、陶磁器、金属製品、石製品		土師器6点、陶磁器6点、金属製品7点、石製品1点		
戦国時代	土師器、陶磁器、瓦質土器、瓦、金属製品		土師器41点、陶磁器9点、瓦質土器5点、瓦2点、金属製品29点		
室町時代後期	土師器、須恵器、陶磁器、瓦質土器、金属製品、石製品		土師器40点、須恵器1点、陶磁器2点、瓦質土器7点、金属製品9点、石製品1点		
鎌倉時代後期～室町時代前期	土師器、須恵器、陶磁器、瓦器、瓦質土器、白色土器、金属製品、石製品		土師器61点、須恵器1点、陶磁器16点、瓦器1点、瓦質土器7点、白色土器1点、金属製品10点、石製品3点		
平安時代後期～鎌倉時代前期	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、陶磁器、金属製品、石製品		土師器51点、須恵器2点、瓦器3点、瓦質土器4点、白色土器2点、黒色土器1点、緑釉陶器1点、灰釉陶器2点、陶磁器12点、金属製品19点、石製品2点		
平安時代前期～中期	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、金属製品、石製品		土師器3点、須恵器1点、緑釉陶器1点、灰釉陶器2点、金属製品1点、石製品1点		
弥生・古墳時代	弥生土器、土師器		弥生土器5点、土師器1点		
合計		211箱	391点(23箱)	52箱	136箱

第2節 第1面の遺物

土坑 1048 (第38図、図版二十一・二十八)

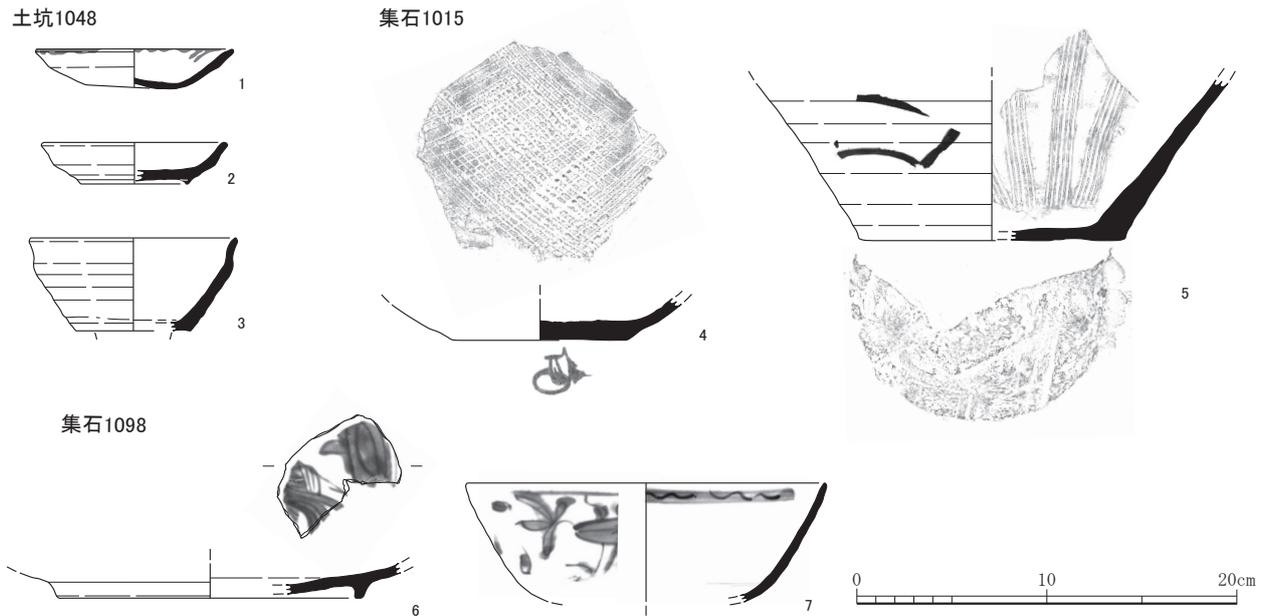
1は土師器の皿である。体部は丸みをもって広がり、口縁端部は尖り気味に終わる。口縁部に煤が付着する。2は施釉陶器(瀬戸美濃)の皿である。外面体部下半は回転ヘラケズリ調整される。全面に灰釉を施している。3は施釉陶器(瀬戸美濃)の天目茶椀である。体部は直線的に開き、口縁部のくびれは強く端部はやや外反する。褐色の銹釉を施している。大塚編年第4～5段階(16世紀末～17世紀初)のものと考えられる。

土坑 1048 から出土した遺物は、16世紀半ば～17世紀後半(京都X期中～XI期中)と考えられる。

集石 1015 (第38図、図版二十一・二十八)

4は施釉陶器(古瀬戸)の卸し皿である。外面体部はロクロナデ、底部は糸切り痕が残り判読不明であるが墨書がみられる。体部に灰釉を施している。5は焼締陶器(信楽)の播り鉢である。体部は直線的に開く。外面底部には下駄印がある。外面に墨で扇が描かれる。播り目は5条で推定約20本である。16世紀後半～17世紀初めのものと考えられる。

集石 1015 から出土した遺物は16世紀後半～17世紀前半(京都X期～XI期)と考えられる。



第38図 第1面出土遺物実測図 (縮尺1/4)

集石 1098 (第38図、図版二十八)

6は輸入染付磁器の皿である。見込みに花鳥文と思われる文様を描き、高台には砂が付着する。

7は輸入染付磁器の碗である。外面に蓮葉文を描く。

集石 1098 から出土した遺物は、16世紀代～17世紀前半(京都X期古～XI期中)と考えられる。

第3節 第2面の遺物

土坑 2113 (第39図、図版二十一)

8・9は土師器の皿である。8は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む皿である。9は碗形の皿である。

土坑 2113 から出土した遺物は、13世紀後半～14世紀前半(京都VII期)と考えられる。

土坑 2131 (第39図、図版二十一)

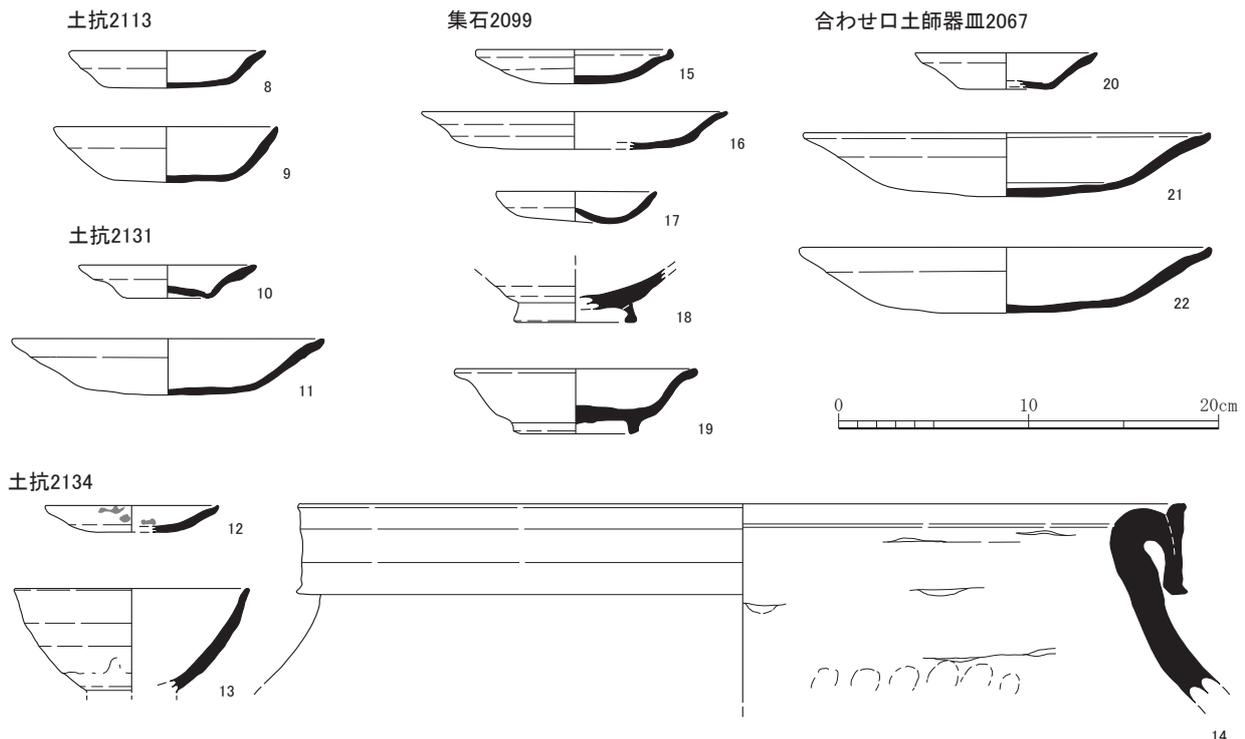
10・11は土師器の皿である。10は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む皿である。11は体部が外反して大きく開く皿である。

土坑 2131 から出土した遺物は、15世紀後半(京都IX期)と考えられる。

土坑 2134 (第39図、図版二十八)

12は土師器の皿である。底部から体部の立ち上がりは不明瞭で、口縁部はやや外反し端部をわずかにつまみ上げる。13は施釉陶器(瀬戸美濃)の天目茶碗である。体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部のくびれは弱く端部はやや外反する。古瀬戸編年後期I期(14世紀後葉)のものと考えられる。14は焼締陶器(信楽)の甕である。口縁部は端部を2回折り返したN字状で、頸部と接着した幅広の縁帯につくる。14世紀のもので混入品と考えられる。

土坑 2134 から出土した遺物は、15世紀後半～16世紀前半(京都IX期新～X中)と考えられる。



第 39 図 第 2 面出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

集石 2099 (第 39 図、図版二十一・二十八)

15～17 は土師器の皿である。15 はいわゆる「て」の字状口縁の皿である。16 は二段ナデで口縁部が外反する皿である。17 は外面をオサエのみ、内面は一定方向のナデで仕上げた皿で、底部を押し上げている。18 は緑釉陶器の椀である。全体が被熱している。外面底部は足高の貼り付け角高台がつく。9 世紀～10 世紀の混入品と考えられる。19 は青磁の皿である。口縁部と高台内に砂が付着する。

集石 2099 から出土した遺物は、11 世紀代 (京都IV期) と 16 世紀代 (京都X期) の遺物が混じる。

合わせ口土師器皿 2067 (第 39 図、図版二十一)

20～22 は土師器の皿である。20 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む赤褐色系の皿である。21・22 は口径 21.5cm 前後と非常に大型で、体部が大きく開き口縁部が外反する皿である。21 は見込みにわずかにハケメが残る。この 2 点が合わせ口の状態で出土した。

これらの遺物は、15 世紀後半 (京都IX期) と考えられる。

第 4 節 第 3 面の遺物

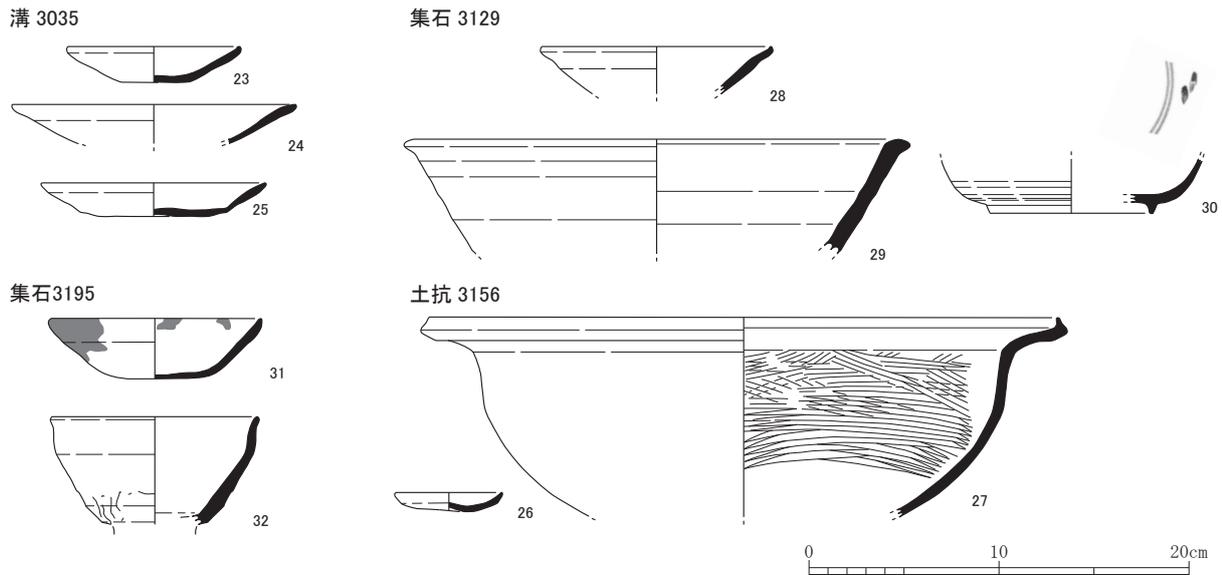
溝 3035 (第 40 図、図版二十一・二十八)

23～25 は土師器の皿である。23・24 は体部が大きく開く白色系の皿である。小型 (23) と大型 (24) がある。25 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。口縁部に煤が付着する。

溝 3035 から出土した遺物は、15 世紀後半～16 世紀前半 (京都IX期古～X期古) と考えられる。

土坑 3156 (第 40 図、図版二十一・二十八)

26 は土師器の皿である。外面はオサエのみ、内面は一定方向のナデで仕上げる。底部中央を



第40図 第3面出土遺物実測図（縮尺1/4）

少し押し上げる。27は土師器の焙烙鍋である。体部は丸く深さがあり、内面は粗いハケ調整である。外面に煤が付着する。

土坑3156から出土した遺物は、16世紀後半～17世紀前半（京都X期中～XI期中）と考えられる。

集石3129（第40図、図版二十八）

28は土師器の皿である。29は焼締陶器（信楽）の捏ね鉢である。口縁端部は外側へつまみ出す。14世紀後半～16世紀初めのものと考えられる。30は国産染付磁器の皿である。内面の染付は二重圏線と植物文様と思われる。高台の畳付きは露胎している。全体に被熱しているため、釉が変色して白濁している。17世紀代のものと考えられる。

集石3129から出土した遺物は、15世紀後半～16世紀前半（京都IX期～X期）と17世紀（京都XII期）のものがある。

集石3195（第40図、図版二十一・二十八）

31は土師器の皿である。底部外面に煤が付着する。32は施釉陶器（建窯）の天目茶碗である。体部は直線的に開き、口縁部のくびれは弱く端部はやや外反する。施釉は銹釉がハケヌリされたのち黒釉が掛けられている。

集石3195から出土した遺物は、15世紀後半（京都IX期）と考えられる。

第5節 第4面の遺物

土器溜り4022（第41図、図版二十一・二十八）

33～36は土師器の皿である。33はへそ皿で、押し上げられた底部外面に爪痕がみられる。34～36は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿で、小型（34・35）と大型（36）がある。37は軒丸瓦である。瓦当文様は珠文を配した側面蓮華文と推定される。同様の文様の軒丸瓦が特別史跡・特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園の平成15年度の発掘調査で出土している⁽¹⁾。38は平瓦である。凹面には凹線の斜め十字文、凸面には凸線の斜め十字文のタタキ目が認められる。小口に二重円の刻印が施される。37・38とも被熱痕がある。

土器溜り 4022 から出土した遺物は、15 世紀後半（京都IX期）と考えられる。

土器溜り 4098（第 41 図、図版二十一・二十八）

39～42 は土師器の皿である。39 はへそ皿である。40 は白色系の椀形の皿である。41・42 は褐色系の皿で小型（41）と大型（42）がある。43 は東播系須恵器の捏ね鉢である。口縁は片口が付き、端部が内上方と外下方に肥厚し、断面が「く」の字状を呈する。13 世紀後半のものと考えられる。

土器溜り 4098 から出土した遺物は、14 世紀前半（京都VII期中～新）と考えられる。

土器溜り 4137（第 41 図、図版二十一・二十九）

44～46 は土師器の皿である。44 はへそ皿である。45 は白色系の椀形の皿である。46 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。

土器溜り 4137 から出土した遺物は、13 世紀後半～14 世紀前半（京都VII期）と考えられる。

土器溜り 4154（第 41 図、図版二十一・二十九）

47～49 は土師器の皿である。47 はへそ皿である。48 は白色系の椀形の皿である。49 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。50 は瓦質土器の火鉢である。平面形が輪花状を呈する奈良火鉢である。51 は白磁の皿である。底部は浅く削った碁笥底である。内面には草花文を陰刻する。

土器溜り 4154 から出土した遺物は、13 世紀後半～14 世紀前半（京都VII期）と考えられる。

土器溜り 4168（第 41 図、図版二十一）

52・53 は土師器の皿である。外面はオサエのみ、内面は一定方向のナデで仕上げた皿で、多数出土している。54 は施釉陶器（肥前か）の椀である。器厚は薄手で、体部は内弯し口縁端部は強く外反している。透明釉を施している。

土器溜り 4168 から出土した遺物は、17 世紀前半（京都XI期）と考えられる。

土器溜り 4192（第 41 図、図版二十一・二十九）

55～57 は土師器の皿である。55 はへそ皿で、押し上げられた底部外面に爪跡がみられる。56 は体部がやや外反する白色系の皿である。57 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。58 は瓦質土器の片手鍋である。

土器溜り 4192 から出土した遺物は、15 世紀代（京都VIII期新～IX期中）と考えられる。

集石 4059（第 41 図、図版二十二・二十九）

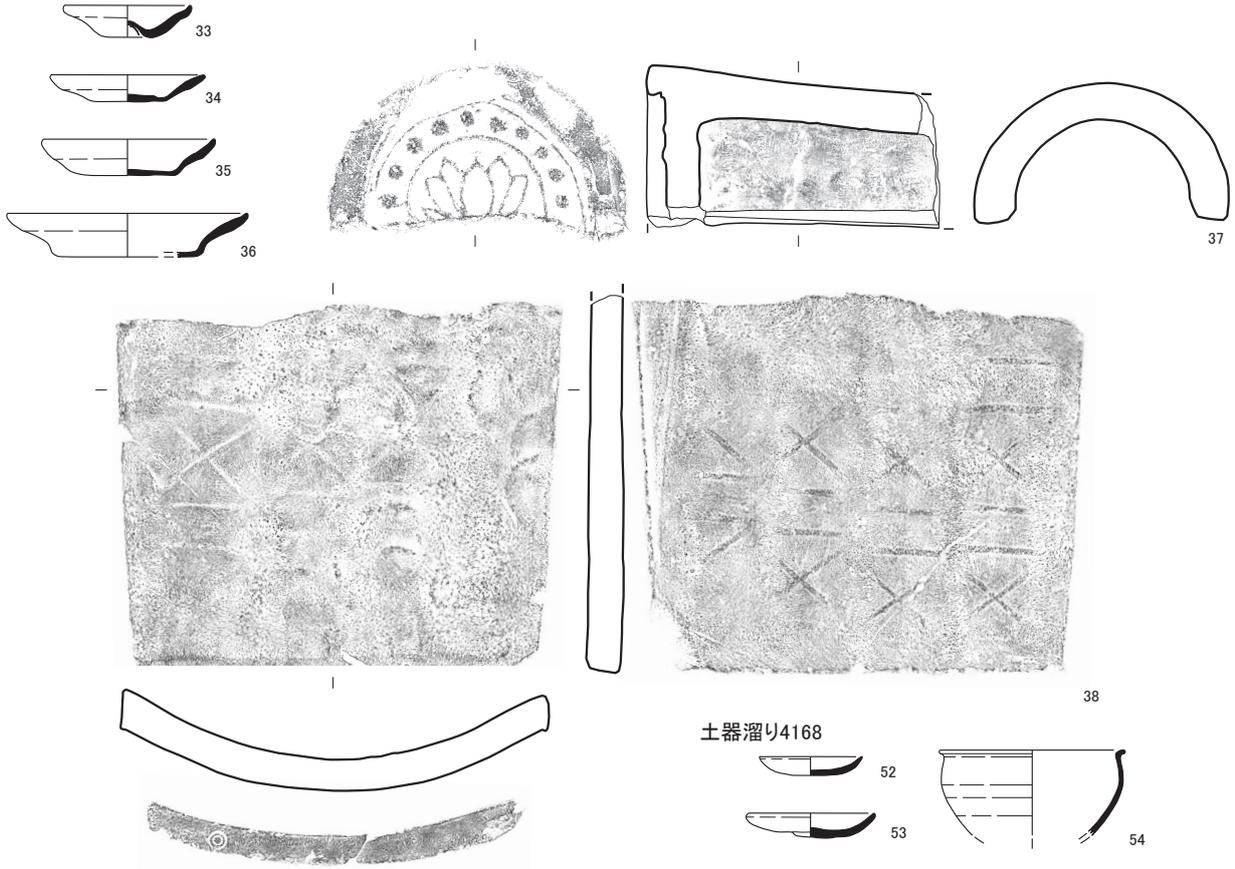
59・60 は土師器の皿である。59 はへそ皿である。60 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。61 は焼締陶器（信楽）の播り鉢である。口縁端部は外上方へつまみ上げ、内側に浅い凹みをもつ。外面に墨で扇が描かれる。播り目は 4 条で推定約 10 本である。内面には煤が付着しており、播り目は摩耗している。16 世紀前半～後半のものと考えられる。上層遺構からの混入品と考えられる。

集石 4059 から出土した遺物は、15 世紀後半（京都IX期）と考えられる。

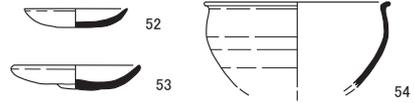
集石 4156（第 41 図、図版二十九）

62 は土師器の皿である。63 は瓦質土器の羽釜である。口縁部は端部に水平な面をもち、鏝部

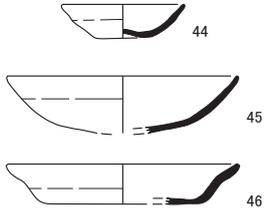
土器溜り4022



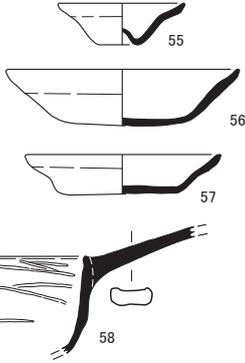
土器溜り4168



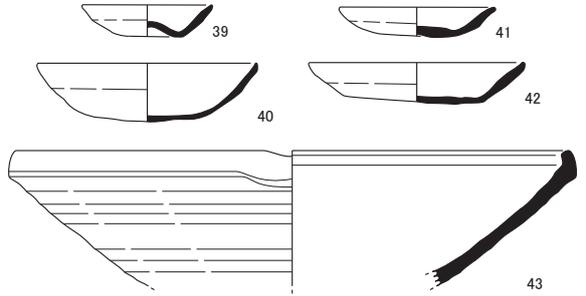
土器溜り4137



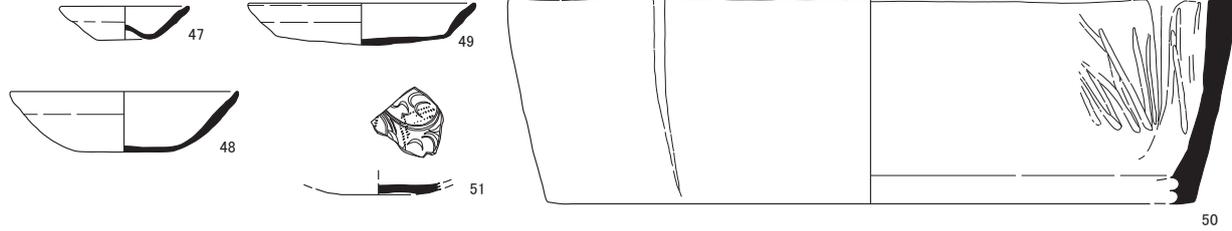
土器溜り4192



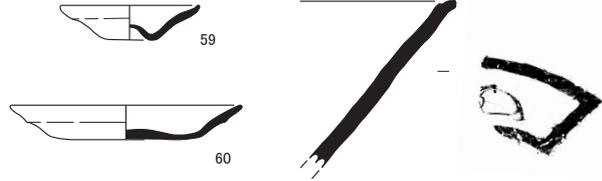
土器溜り 4098



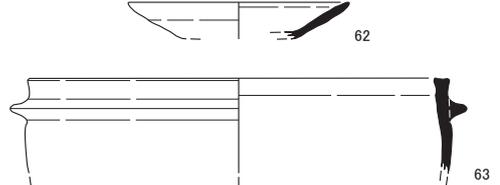
土器溜り4154



集石4059



集石4156



0 10 20cm

第41図 第4面出土遺物実測図1 (縮尺1/4)

はやや長い三角形状を呈する。

集石 4156 から出土した遺物は、15世紀後半（京都IX期）と考えられる。

集石 4188

（第 42 図、図版二十二・二十九）

64～66 は土師器の皿である。64 は押し上げの弱いへそ皿で、14 世紀代

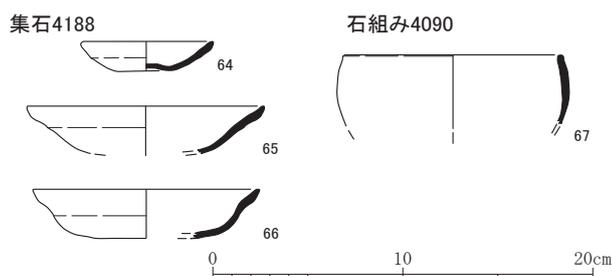
（京都VII期中～VIII期中）のものである。65 は体部がやや外反する白色系の皿である。66 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。

集石 4188 から出土した遺物は、15 世紀後半（京都IX期）と考えられるが、14 世紀代（京都VII期中～VIII期中）の遺物も多く出土している。

石組み 4090（第 42 図、図版二十九）

67 は土師器の丸底小鉢である。内面は使用により平滑である。

石組み 4090 から出土した遺物は、15 世紀後半～16 世紀前半（京都IX期古～X期古）と考えられる。



第 42 図 第 4 面出土遺物実測図 2（縮尺 1/4）

第 6 節 第 5 面の遺物

土器溜り 5036（第 43 図、図版二十二・二十九）

68～70 は土師器の皿である。68・69 は白色系の皿である。68 はへそ皿である。69 は椀形の白色系の皿である。70 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。71 は焼締陶器（常滑）の甕である。口縁端部は上方につまみ上げる。

土器溜り 5036 から出土した遺物は、14 世紀代（京都VII～VIII期）と考えられる。

土器溜り 5058（第 43 図、図版二十二・二十九）

72～76 は土師器の皿である。小型（72～74）と大型（75・76）がある。77 は瓦質土器の三足付羽釜である。78 は青磁の皿である。79 は青白磁の合子の身である。型押し成形で、体部下半に花卉文が表現されている。外面の釉は体部上半のみに施される。

土器溜り 5058 から出土した遺物は、12 世紀代（京都V期中～VI期古）と考えられる。

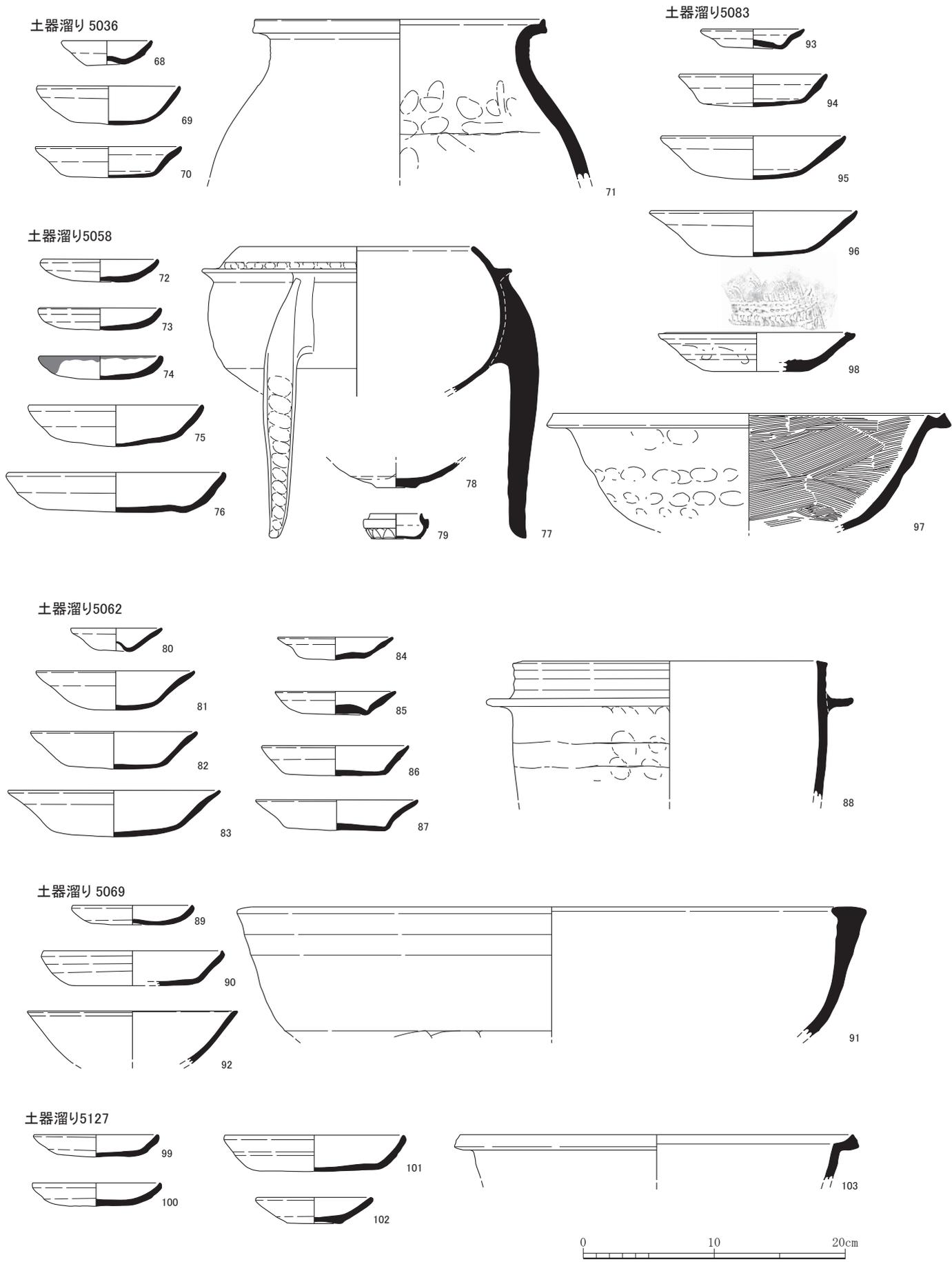
土器溜り 5062（第 43 図、図版二十二・二十九）

80～87 は土師器の皿である。80～83 は白色系である。80 はへそ皿で、押し上げられた底部外面に爪跡がみられる。81～83 は体部が外反して大きく開く。84～87 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿で、口径 8.8～9.2cm の小型（84・85）と口径 11.2～12.4cm の大型（86・87）がある。88 は瓦質土器の羽釜である。外面の鏝部より上方全体に煤が付着する。

土器溜り 5062 から出土した遺物は、15 世紀前半（京都VIII期中～IX期古）と考えられる。

土器溜り 5069（第 43 図、図版二十二・二十九）

89・90 は土師器の皿である。小型（89）と大型（90）がある。90 は二段ナデで、口縁端部は



第43図 第5面出土遺物実測図1 (縮尺 1/4)

三角形状を呈する。91は瓦質土器の盤である。底部から体部は丸みをもって立ち上がる。口縁端部は肥厚し水平な面をもつ。92は白磁の碗である。口縁端部は外方に折れる。

土器溜り 5069 から出土した遺物は、12世紀前半（京都V期）と考えられる。

土器溜り 5083（第43図、図版二十二・二十九）

93～96は土師器の皿である。93・94は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む皿で小型（93）と大型（94）がある。95・96は口径14.2～15.8cmの大型で、底部から口縁部の開きが大きく先端は尖り気味である。97は瓦質土器の鍋である。受け口状の口縁部の端部は尖る。98は施釉陶器（古瀬戸）の卸し皿である。口縁端部は内側に折り返し面をもつ。灰釉はツケガケされる。体部はロクロナデ、底部は糸切り痕が残る。

土器溜り 5083 から出土した遺物は、15世紀後半（京都IX期）と考えられる。

土器溜り 5127（第43図、図版二十二・三十）

99～101は土師器の皿である。口径9.6～9.9cmの小型（99・100）と口径13.9cmの大型（101）がある。102は白色土器の皿である。底部外面に糸切り痕が残る。103は瓦質土器の鍋である。

土器溜り 5127 から出土した遺物は、13世紀後半（京都VI期中～VII期古）と考えられる。

土器溜り 5129（第44図、図版三十）

104は土師器の皿である。105は白磁の碗である。口縁部外面に幅広い玉縁がつく。

土器溜り 5129 から出土した遺物は、13世紀後半～14世紀前半（京都VII期）と考えられる。

土器溜り 5139（第44図、図版二十二・三十）

106～108は土師器の皿である。106はコースター形の皿である。107は椀形の白色系の皿である。108は褐色系の小型の皿である。109は須恵器の皿である。底部外面は糸切り痕が残る。

土器溜り 5139 から出土した遺物は、13世紀半ば（京都VI新～VII期古）と考えられる。

土器溜り 5153（第44図、図版二十三）

110～115は土師器の皿である。110はへそ皿である。111～113は椀形の白色系の皿である。小型（111）と大型（112・113）がある。111は口縁部に、112は口縁部から体部内面に煤が付着する。114・115は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。小型（114）と大型（115）がある。116は瓦質土器の鍋である。受け口状の口縁部の端部は尖る。

土器溜り 5153 から出土した遺物は、14世紀後半～15世紀前半（京都VIII期）と考えられる。

土器溜り 5175（第44図、図版二十三・三十）

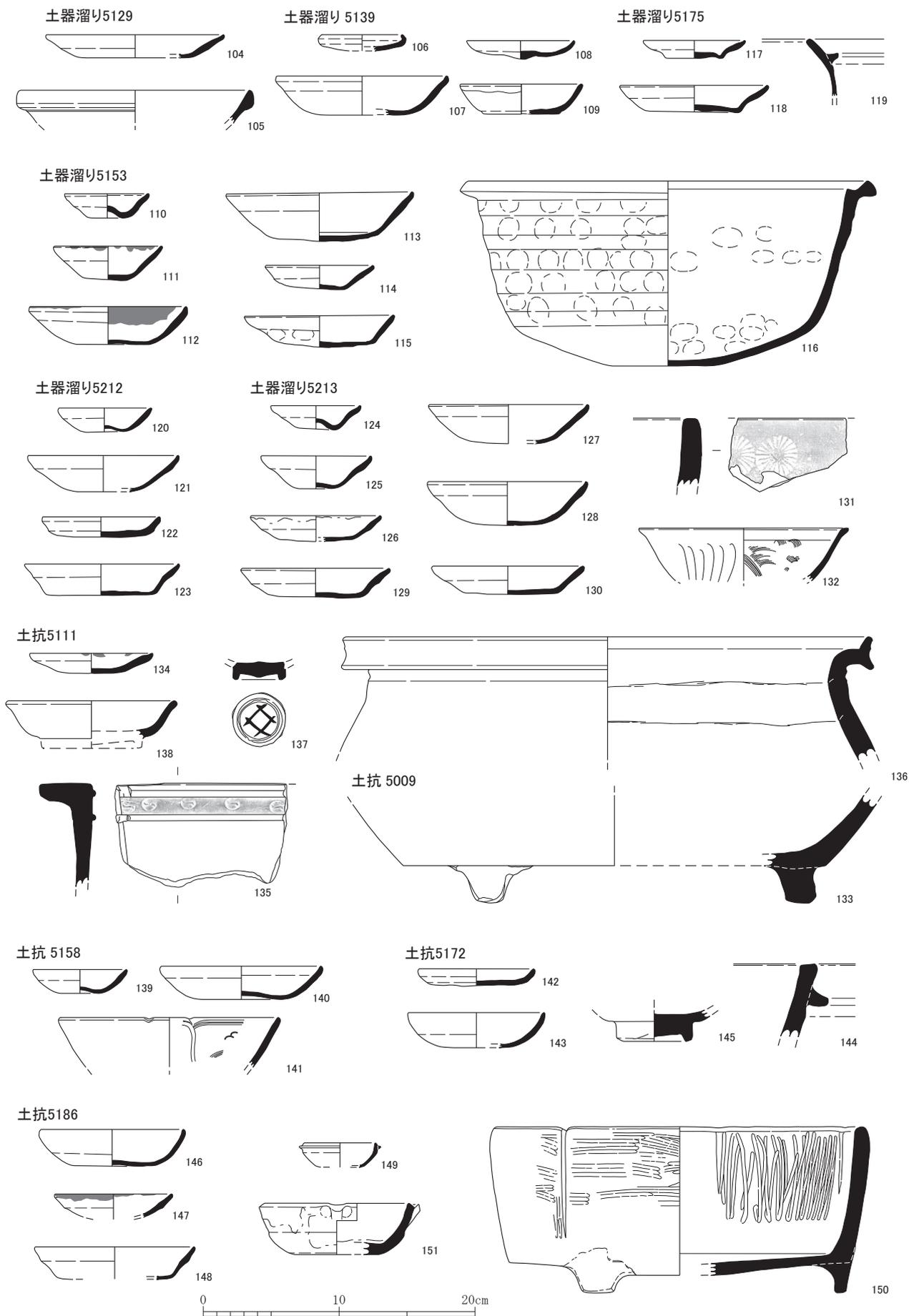
117・118は土師器の皿である。いずれも口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿で小型（117）と大型（118）がある。119は瓦質土器の羽釜である。体部は内湾し、鏝部は短く断面が三角形状に近い。

土器溜り 5175 から出土した遺物は、14世紀後半～15世紀前半（京都VIII期）と考えられる。

土器溜り 5212（第44図、図版二十三）

120～123は土師器の皿である。120はへそ皿である。121は椀形の白色系の皿である。122・123は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿で、小型（122）と大型（123）がある。

土器溜り 5212 から出土した遺物は、13世紀後半～14世紀前半（京都VII期）と考えられる。



第44図 第5面出土遺物実測図2 (縮尺 1/4)

土器溜り 5213 (第 44 図、図版二十三・三十)

124～130 は土師器の皿である。124～128 は白色系の皿である。124 はへそ皿である。椀形のものには小型 (125・126) と大型 (127・128) がある。129・130 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。131 は瓦質土器の火鉢である。平面形状が輪花状を呈する奈良火鉢である。132 は白磁の碗である。口縁端部は外方に折れる。両面に文様を陰刻する。

土器溜り 5213 から出土した遺物は、14 世紀代 (京都 VII～VIII 期) と考えられる。

土坑 5009 (第 44 図、図版三十)

133 は瓦質土器の火鉢である。平面形状が円形で、脚部はやや粗いつくりである。

土坑 5009 から出土した遺物は、15 世紀後半～16 世紀前半 (京都 IX 期～X 期古) と考えられる。

土坑 5111 (第 44 図、図版二十三・三十)

134 は土師器の皿である。口縁端部に煤が付着する。135 は瓦質土器の火鉢である。口縁部が内側に水平に折れ曲がる。体部外面に突帯を二条巡らせ、間に丸に一文字の印刻を施す。136 は焼締陶器 (常滑) の甕である。口縁端部は上下につまみ出され、帯状になる。13 世紀後半と考えられる。137 は白磁の碗あるいは皿である。高台内に「井」形の墨書がみられる。138 は青磁の皿である。

土坑 5111 から出土した遺物は、15 世紀後半 (京都 IX 期) と 13 世紀 (京都 VI 期) が混じっている。

土坑 5158 (第 44 図、図版二十三・三十)

139・140 は白色系の土師器の皿である。139 は底部の押し上げの弱いへそ皿である。140 は椀形の皿である。141 は青磁の碗である。内面に花卉文を陰刻する。

土坑 5158 から出土した遺物は、13 世紀後半～14 世紀前半 (京都 VII 期) と考えられる。

土坑 5172 (第 44 図、図版二十三・三十)

142・143 は土師器の皿である。142 は褐色系、143 は白色系で椀形の皿である。144 は瓦質土器の羽釜である。口縁端部に水平な面をもつ。145 は青磁の碗である。

土坑 5172 から出土した遺物は、13 世紀代 (京都 VI 期中～VII 期古) と考えられる。

土坑 5186 (第 44 図、図版二十三・三十)

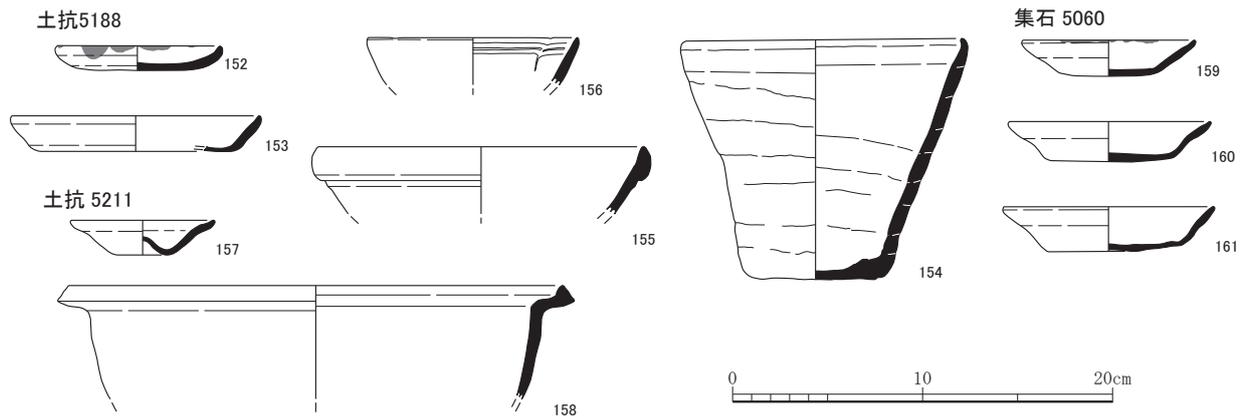
146～148 は土師器の皿である。146 は椀形の白色系で、147・148 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。149 は土師器のミニチュア羽釜である。150 は瓦質土器の火鉢である。平面形状が輪花状を呈する奈良火鉢である。151 は施釉陶器 (古瀬戸) の卸し皿である。片口が付き、体部はロクロナデ、底部は糸切り痕が残る。灰釉はハケヌリされる。

土坑 5186 から出土した遺物は、13 世紀後半～14 世紀前半 (京都 VII 期) と考えられる。

土坑 5188 (第 45 図、図版二十四・三十)

152・153 は土師器の皿である。152 は口縁部に煤が付着する。154 は土師器の鉢である。体部外面に輪積み痕が明瞭に残る。内面はナデで仕上げるが、体部下半に輪積み痕がわずかに残る。155 は白磁の碗である。口縁部外面に幅広い玉縁がつく。156 は青磁の碗である。輪花碗で内面に花卉文を陰刻する。

土坑 5188 から出土した遺物は、12 世紀後半～13 世紀前半 (京都 VI 期) と考えられる。



第45図 第5面出土遺物実測図3 (縮尺1/4)

土坑5211 (第45図、図版二十四・三十)

157は土師器の皿である。へそ皿で、全体に煤が付着する。158は瓦質土器の鍋である。14世紀代のもので、混入品か。

土坑5211から出土した遺物は、15世紀後半(京都IX期)と考えられる。

集石5060 (第45図、図版二十四)

159～161は土師器の皿である。159は白色系の小型の皿である。口縁端部と外面の底部から体部の一部に煤が付着する。160・161は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。

集石5060から出土した遺物は、15世紀後半(京都IX期)と考えられる。

第7節 第6面の遺物

土器溜り6026 (第46図、図版二十四)

162～164は土師器の皿である。162はへそ皿で底部を除いて内外面に煤が付着する。163は椀形の白色系の皿である。164は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。

土器溜り6026から出土した遺物は、14世紀代(京都VII期中～VIII期古)と考えられる。

土器溜り6028 (第46図、図版二十四)

165～167は土師器の皿である。165・166は白色系で、165はへそ皿、166は椀形の皿である。167は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。

土器溜り6028から出土した遺物は、14世紀後半(京都VII期新～VIII期中)と考えられる。

土器溜り6117 (第46図、図版二十四・三十)

168～173は土師器の皿である。168・169は椀形の白色系、170～173は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿で口径8.1～8.4cmの小型(170・171)と口径11.2～12.0cmの大型(172・173)がある。174は白磁の碗である。口縁部にわずかに段が付き、端部は外反する。

土器溜り6117から出土した遺物は、14世紀代(京都VII期中～VIII期古)と考えられる。

土器溜り6165 (第46図、図版二十四・三十)

175・176は土師器の皿である。二段ナデの皿で、口縁端部は断面三角形状を呈する。177は土

師器の鉢の高台部である。178は灰釉陶器の椀である。底部の高台は断面三角形である。灰釉はハケヌリされている。11世紀のもので、混入品と考えられる。179は須恵器の甕である。体部外面に左上りの太い平行タタキを施す。内面はナデにより調整される。180は白磁の皿である。口縁の立ち上がり部の内面に沈線状に稜がつく。181は白磁の碗である。体部は直線的で口縁部は幅の広い玉縁状である。内面全体から外面の体部上半まで施釉するが、内面の一部が露胎する。

土器溜り 6165 から出土した遺物は、12世紀半ば（京都Ⅴ期中～新）と考えられる。

土器溜り 6192（第46図、図版二十四）

182・183は土師器の皿である。182は椀形の白色系の皿である。183は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。

土器溜り 6192 から出土した遺物は、14世紀後半～15世紀前半（京都Ⅷ期）と考えられる。

土器溜り 6256（第46図、図版二十四・三十）

184・185は土師器の皿である。184は小型、185は大型の皿である。186は白磁の皿である。体部内面に沈線状に段がつく。

土器溜り 6256 から出土した遺物は、12世紀前半（京都Ⅴ期）と考えられる。

土器溜り 6342（第46図、図版二十四）

187～189は土師器の皿である。187・188は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む皿である。小型（187）と大型（188）がある。189は体部が大きく開き、口縁部が外反する皿である。

土器溜り 6342 から出土した遺物は、15世紀後半（京都Ⅸ期）と考えられる。

土器溜り 6376（第46図、図版二十四）

190～192は土師器の皿である。小型（190・191）と大型（192）がある。193は瓦器の小椀である。高台は三角形状を呈する。194は青磁の折れ皿である。195は青白磁の合子の身である。

土器溜り 6376 から出土した遺物は、12世紀代（京都Ⅴ期中～Ⅵ期古）と考えられる。

土器溜り 6377（第47図、図版二十五・三十）

196～217は土師器の皿である。196～203はいわゆる「て」の字状口縁の皿で、口径は10.4～11.5cmである。204・205はコースター形の皿で、口径11.2～12.0cm、底部外面外周にナデによる段がつく。206～216は二段ナデの皿で、口縁端部が外反する。口径10.8～11.0cmの小型（206～209）、13.6cmの中型（210・211）、15.5～16.8cmの大型（212～216）がある。217はロクロ土師器で、底部外面に糸切り痕が残る。218は須恵器の皿である。底部外面はわずかに高台状に作り出し糸切り痕が残る。219は須恵器の椀である。焼成不良のため胎土は浅黄橙色を呈する。底部外面に糸切り痕が残る。220は白色土器の蓋である。221は白色土器の椀である。底部を高台状に作り出し、底部外面に糸切り痕が残る。222は灰釉陶器（東濃窯）の皿である。底部の高台は断面三角形である。灰釉はツケガケされている。口縁部には煤が付着し、灯明皿の受け皿として使用されている。見込みは平滑で赤色顔料が薄く付着する。223は灰釉陶器（東濃窯）の椀である。底部の高台は断面三角形である。灰釉はツケガケされている。224は緑釉陶器の皿、あるいは椀である。底部は低い削り出し輪高台で、釉はほとんど剥離している。225は両黒の黒色土器の椀である。226は瓦器の椀である。両面とも丁寧なミガキが施される。227は瓦質土器

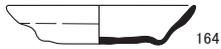
土器溜り6026



162



163



164

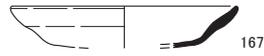
土器溜り 6028



165



166

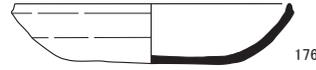


167

土器溜り6165



175



176



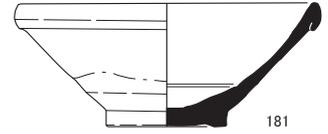
177



180



178



181

土器溜り6117



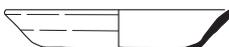
170



171



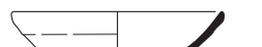
172



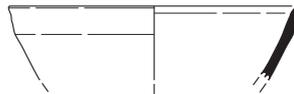
173



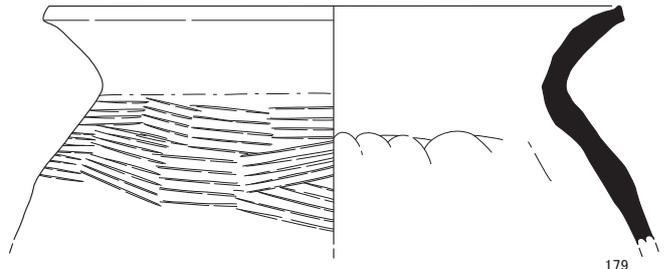
168



169



174

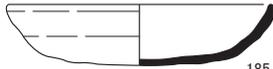


179

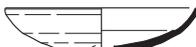
土器溜り6256



184



185

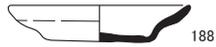


186

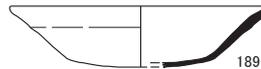
土器溜り6342



187



188

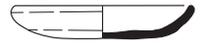


189

土器溜り6376



190



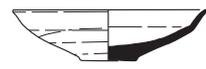
191



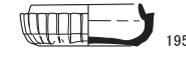
192



193

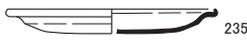


194



195

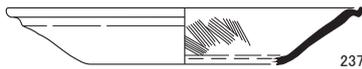
土坑6007



235

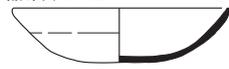


236

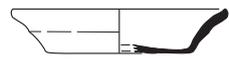


237

土器溜り6192



182

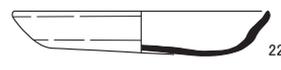


183

土器溜り6541



228



229

土器溜り 6561



231



232

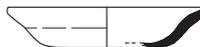


233

土坑6051

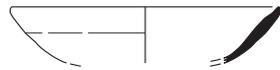


238



239

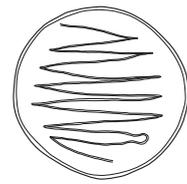
土坑6066



242



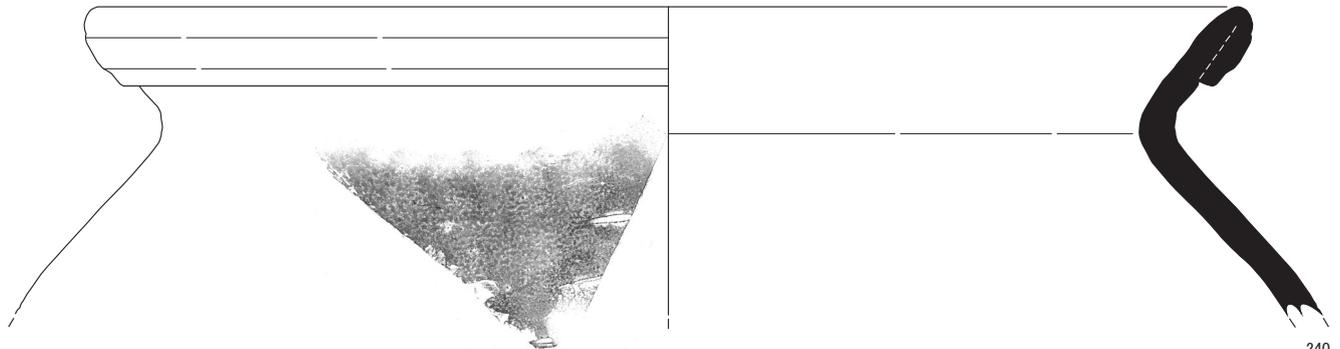
241



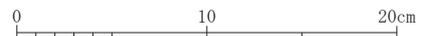
230



234

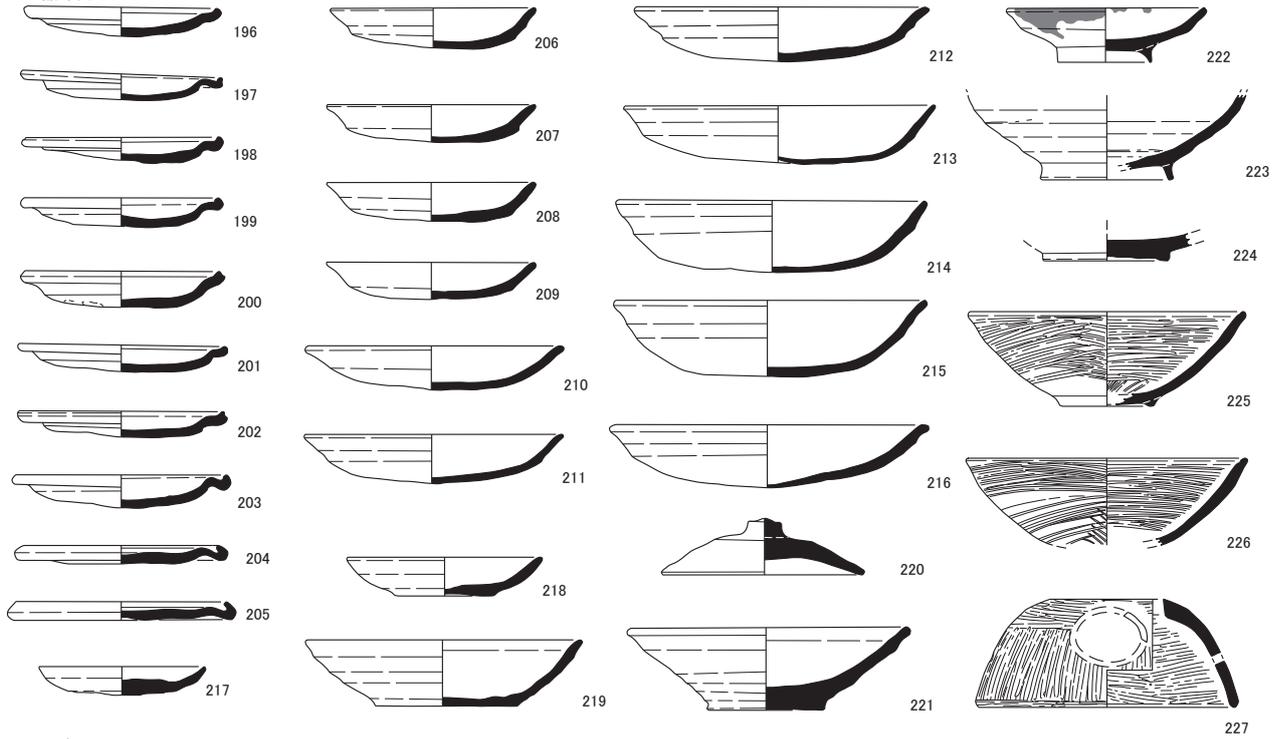


240

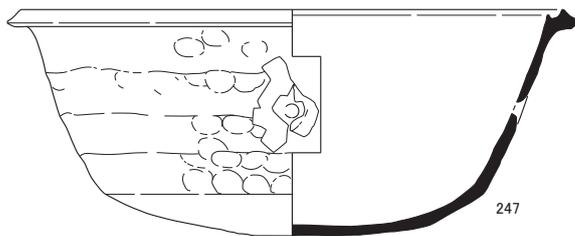
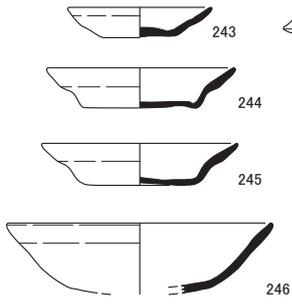


第46図 第6面出土遺物実測図1 (縮尺1/4)

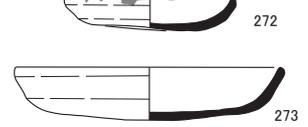
土器溜り6377



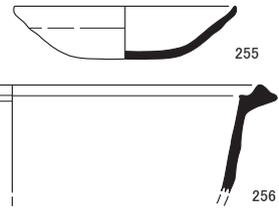
土坑 6095



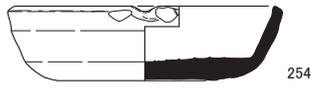
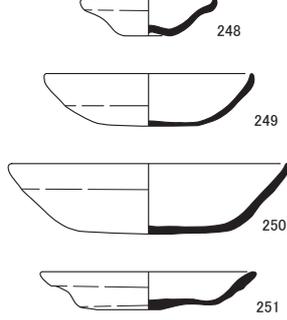
土坑6505



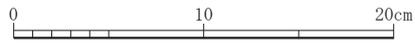
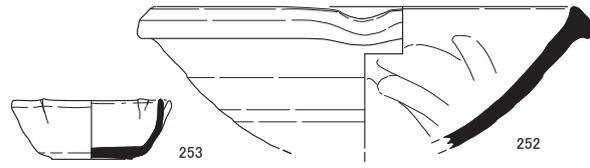
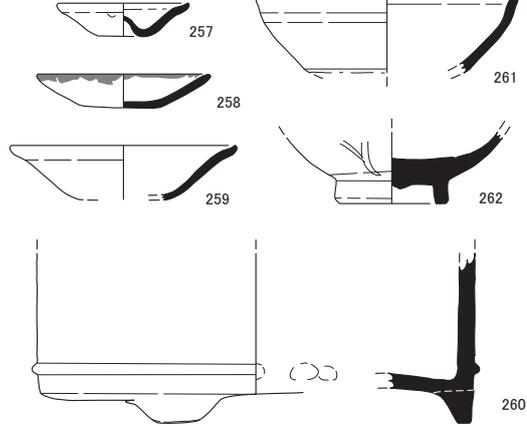
土坑6251



土坑6119



土坑6293



第47図 第6面出土遺物実測図2 (縮尺 1/4)

の火舎の蓋か。

土器溜り 6377 から出土した遺物は、11 世紀半ば～後半（京都Ⅳ期中）と考えられる。

土器溜り 6541（第 46 図、図版二十五）

228・229 は土師器の皿である。小型（228）と大型（229）があり、口縁端部は三角形状を呈す。230 は瓦器の皿である。見込みにジグザグ状の暗文を施し、他の部分にはミガキはみられない。

土器溜り 6541 から出土した遺物は、12 世紀後半～13 世紀前半（京都Ⅵ期）と考えられる。

土器溜り 6561（第 46 図、図版二十五・三十一）

231～233 は土師器の皿である。小型（231・232）と大型（233）がある。234 は白磁の碗である。口縁端部は外側に折れる。

土器溜り 6561 から出土した遺物は、12 世紀後半（京都Ⅴ期中～Ⅵ期古）と考えられる。

土坑 6007（第 46 図、図版二十六・三十一）

235～237 は土師器の皿である。いずれも厚さ 2～3mm 程度の薄手で、「て」の字状口縁である。口径 11.1cm の小型（235）、口径 15.2cm の中型（236）、口径 18.8cm の大型（237）がある。236・237 の内面にはハケメがわずかに残る。

土坑 6007 から出土した遺物は、10 世紀後半（京都Ⅲ期）と考えられる。

土坑 6051（第 46 図、図版二十六・三十一）

238・239 は土師器の皿である。238 はへそ皿で、押し上げられた底部外面に爪痕がみられる。239 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。240 は焼締陶器（備前）の甕である。口縁端部は外に折り返して扁平な玉縁状になる。外面体部にヘラ描きの線刻が施される。15 世紀～16 世紀のものと考えられる。

土坑 6051 から出土した遺物は、14 世紀後半～15 世紀代（京都Ⅷ期～Ⅸ期）と考えられる。

土坑 6066（第 46 図、図版二十六・三十一）

241・242 は土師器の皿である。241 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。242 は白色系の皿で口縁部がやや外反する。

土坑 6066 から出土した遺物は 14 世紀後半～15 世紀前半（京都Ⅷ期）と考えられる。

土坑 6095（第 47 図、図版二十六）

243～246 は土師器の皿である。243～245 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿で、小型（243）と大型（244・245）がある。246 は椀形で体部の開きがやや大きい白色系の皿である。247 は瓦質土器の鍋である。受け口状の口縁部の端部は尖る。体部には径 1.5cm ほどの孔が外側から穿たれている。

土坑 6095 から出土した遺物は、14 世紀後半～15 世紀前半（京都Ⅷ期）と考えられる。

土坑 6119（第 47 図、図版二十六・三十一）

248～251 は土師器の皿である。248～250 は白色系で 248 はへそ皿、249・250 は椀形の皿である。251 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系である。252 は須恵器の捏ね鉢である。口縁は片口が付き、端部は上下に肥厚した縁帯となる。内面には使用痕が認められる。東播系須恵器の 14 世紀後半のものと考えられる。253 は施釉陶器（古瀬戸）の輪花の入子である。口縁

端部から外面中位にかけて灰釉をハケヌリしている。底部は無高台で糸切り痕が残る。254は施釉陶器（古瀬戸）の卸し皿である。片口が付き、体部はロクロナデ、底部は糸切り痕が残る。灰釉はハケヌリされる。13世紀のもので混入品と考えられる。

土坑 6119 から出土した遺物は、14世紀後半（京都Ⅷ期）と考えられる。

土坑 6251（第 47 図、図版二十六・三十一）

255は土師器の皿である。白色系の皿である。256は瓦質土器の鍋である。受け口状の口縁部の端部は尖る。

土坑 6251 から出土した遺物は、14世紀前半（京都Ⅶ期中～新）と考えられる。

土坑 6293（第 47 図、図版二十六・三十一）

257～259は土師器の皿である。いずれも白色系の皿である。257はへそ皿で、押し上げられた底部外面に爪跡がわずかにみられる。258は小型、259は大型で、底部から口縁部の開きが大きく先端は尖り気味である。260は瓦質土器の火鉢である。体部外面下方に突帯を一条巡らせる。261は施釉陶器（瀬戸美濃）の天目茶椀である。体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部のくびれは弱く端部はやや外反する。古瀬戸編年後期Ⅳ期新段階（15世紀後半）のものと考えられる。262は青磁の碗である。外面に蓮弁文、見込に草花文を陰刻する。

土坑 6293 から出土した遺物は、15世紀後半（京都Ⅸ期）と考えられる。

土坑 6295（第 48 図、図版二十六・二十七・三十一）

263～266は土師器の皿である。263は口径6.0cmの小型のコースター形の皿である。266は椀形の白色系の皿である。267は瓦器の椀である。内面はやや粗い横方向の磨きを施し、外面はヨコナデとオサエのみで仕上げ、ミガキはみられない。268は焼締陶器（丹波か常滑）の甕である。口縁部は端部が内上方と外下方に肥厚して受け口状のN字口縁となる。13世紀後半のものと考えられる。269は陶器（常滑）の片口鉢である。外面底部の高台は幅が薄く高い。内面は使用のため磨滅している。外面底部に判読できないが、墨書がある。13世紀後半のものと考えられる。270は輸入陶器の褐釉壺である。長胴形で、口縁部は外方に折れる。体部外面に細いへら状のもので釉を掻き取った跡がある。271は輸入陶器の黄釉鉄絵盤である。口縁端部は角ばった玉縁状である。底部内面に草花文を描く。底部外面に墨書がみられる。

土坑 6295 から出土した遺物は、13世紀半ば～後半（京都Ⅵ期新～Ⅶ期古）と考えられる。

土坑 6505（第 47 図、図版二十七）

272・273は土師器の皿である。口縁端部が断面三角形状を呈する。小型（272）と大型（273）がある。

土坑 6505 から出土した遺物は、12世紀後半（京都Ⅴ期新～Ⅵ期古）と考えられる。

土坑 6531（第 49 図、図版二十七・三十一）

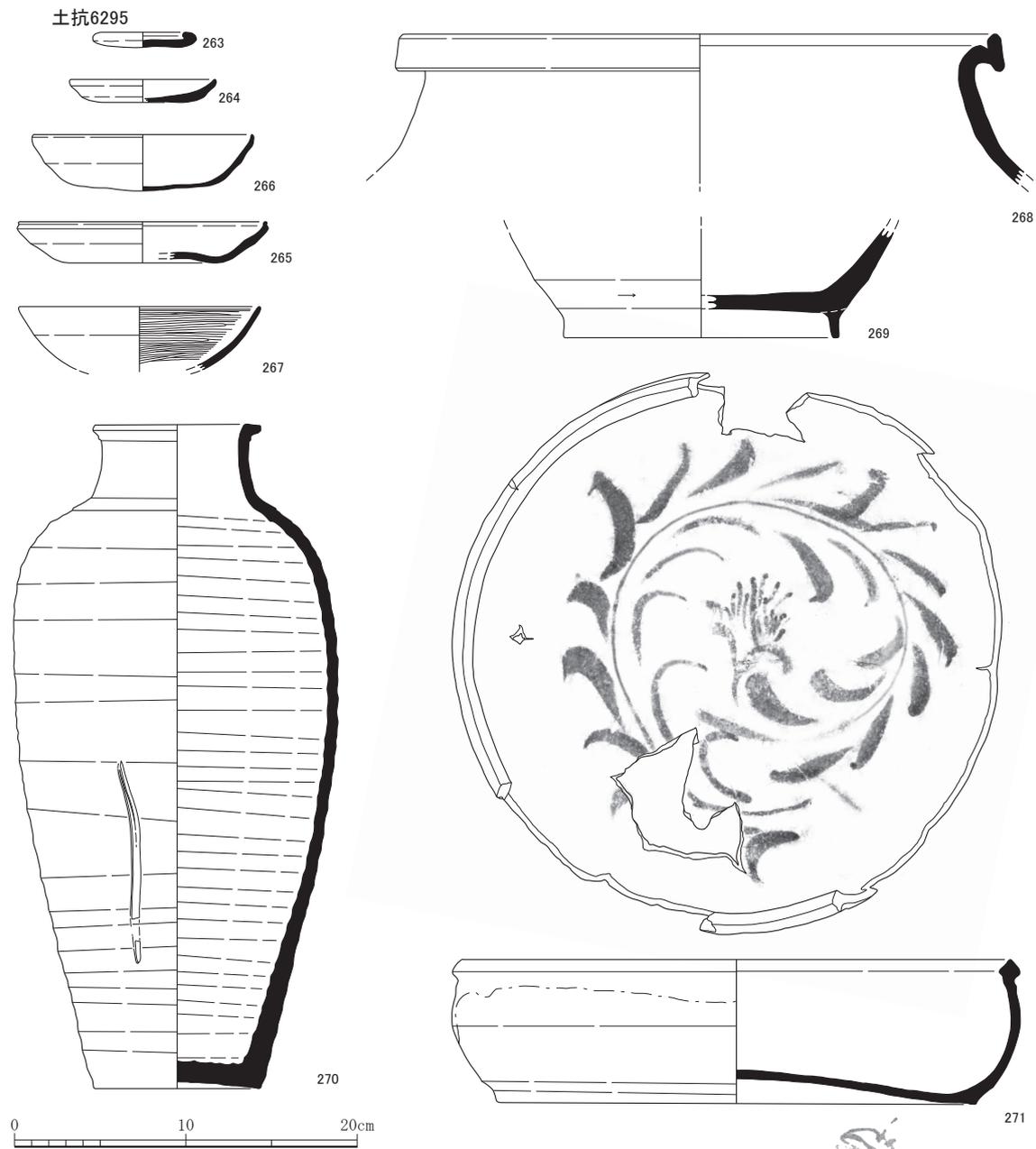
274～277は土師器の皿である。274～276は白色系である。274はへそ皿で、押し上げられた底部外面に爪跡がみられる。275・276は椀形で体部の開きがやや大きい皿である。277は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。278は瓦質土器の火鉢である。体部は内湾し、口縁端部は水平な幅広い面をもつ。外面の口縁付近に二条の突帯を巡らせ、その間に

幾何学文を印刻する。279 は施釉陶器（古瀬戸）の小杯である。口縁端部が外反し、上端が面状を呈する。

土坑 6531 から出土した遺物は、15 世紀半ば（京都Ⅷ期新～Ⅸ期中）と考えられる。

土坑 6540（第 49 図、図版二十七・三十一）

280～284 は土師器の皿である。280～282 は白色系の皿である。280 は口径 6.3cm と小型のコースター型の皿である。281 はへそ皿、282 は椀形の皿である。283・284 は褐色系の皿で、小型（283）と大型（284）がある。285 は瓦質土器の鍋である。口縁部は断面が L 字状で端部に面をもつ。286 は白磁の四耳壺である。口縁部を下方に丸く折り曲げる。内面に体部と頸部の接合痕が明瞭に残る。287 は青磁の碗である。外面に蓮弁文が陽刻され、釉色は釉調が変じたのか褐色である。



第 48 図 第 6 面出土遺物実測図 3（縮尺 1/4）

土坑 6540 から出土した遺物は、14 世紀前半（京都Ⅶ期）と考えられる。

土坑 6584（第 49 図、図版三十二）

288 は土師器の皿である。289 は瓦質土器の羽釜である。口縁端部は水平な面をもつ。鏝はやや長く端部に面をもつ。

土坑 6584 から出土した遺物は、12 世紀後半～13 世紀前半（京都Ⅵ期）と考えられる。

石組み 6623（第 49 図、図版二十七・三十二）

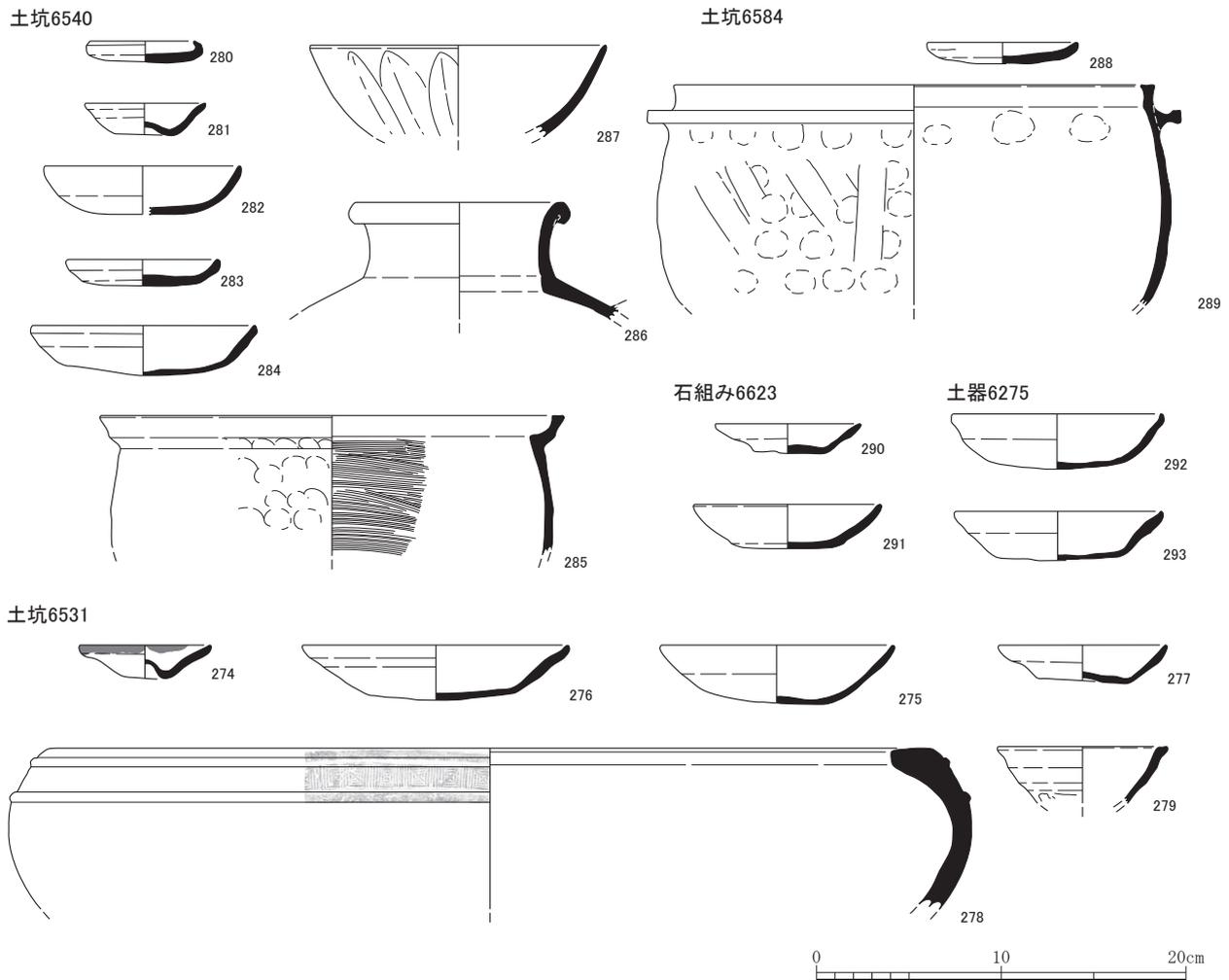
290・291 は土師器の皿である。290 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。

石組み 6623 から出土した遺物は、14 世紀後半～15 世紀前半（京都Ⅷ期）と考えられる。

土器 6275（第 49 図、図版二十七）

292・293 は土師器の皿である。292 は碗形の白色系の皿である。293 は口縁下半部が外面のオサエにより内側へ窪む褐色系の皿である。

土器 6275 から出土した遺物は、14 世紀前半～半ば（京都Ⅶ期中～Ⅷ期古）と考えられる。



第 49 図 第 6 面出土遺物実測図 4（縮尺 1/4）

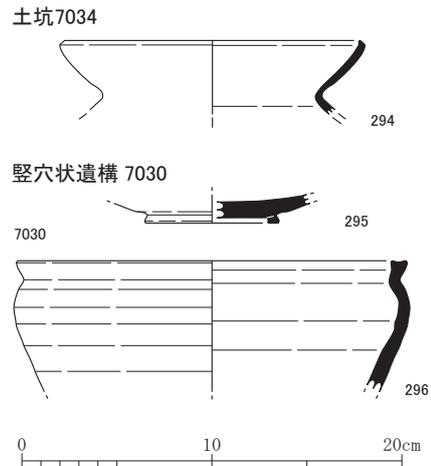
第8節 第7面の遺物

土坑 7034 (第50図、図版三十二)

294は古式土師器の甕で、口縁部は内傾気味に広がり、端部の形状は、内面に断面三角形に小さく折り返す。器壁は2～3mmと薄く、体部外面は頸部に横ナデが見られるが、おそらくこれより下半からハケ調整を施しているものと思われる。内面は頸部よりやや下半から、ヘラ削りを行っている。古墳時代の布留式古段階～中段階のものである。

竪穴状遺構 7030 (第50図、図版三十二)

295は灰釉陶器(黒笹14号窯式)の皿である。底部の高台は断面四角形である。296は須恵器の鉢である。体部上部が内弯し、口縁部は外方へ屈曲する。口縁端部は水平に近い面をもつ。



第50図 第7面出土遺物実測図1
(縮尺1/4)

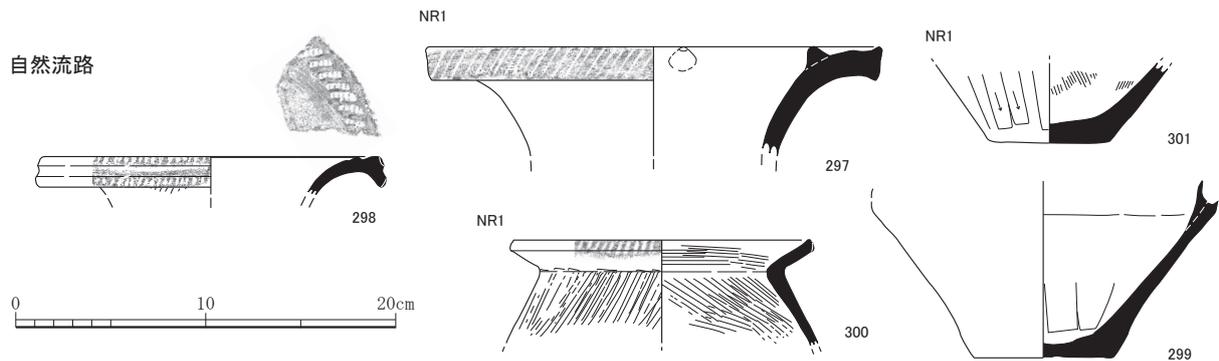
竪穴状遺構7030から出土した遺物は、9世紀前半～半ば(京都I期中～II期古)と考えられる。

自然流路 (第51図、図版二十七・三十二)

297～301は弥生土器である。

297は広口壺で、口縁端部をわずかに上下に拡張し、口縁部外面にはヘラによる右上がりの斜線文をめぐらせる。内面に口縁部付近にコブ状突起をつける。頸部内外面は、ナデ仕上げ。山城Ⅲ-1様式まで遡る可能性がある。298は広口壺で、口縁端部下半をわずかに外方に拡張する。口縁部外面には一条の浅い凹線をめぐらせ、その上下に刻目を施す。内面は、上面に5個一単位の刺突列点文をめぐらせる。口縁端部の拡張、口縁部外面の凹線など297より後出的な要素をもち、山城Ⅲ-2様式か、下がってもⅣ-1様式の範囲のものであろう。299は壺の下半で、分割成形による下半部である。残存部の上端が、体部上半部との接合面で、内面には成形時の粘土痕が残っている。おそらくこのあたりが、最大径になるものと思われる。内外面とも、ナデ仕上げである。近江の中期前半に特徴的な壺で、近江Ⅱ-3様式からⅢ様式にみられるもので、底部もやや薄く、ハケなどの調整痕を残していないことから、山城Ⅲ-1様式ごろのものであろう。300は甕で、口縁部は短く、外面に刻み目を施して加飾する。口縁部の形状は直線的に外方に開き、頸部は「く」の字状を呈する。体部は肩部付近まで残存するが、おそらくこのあたりが最大径になり、細身の体部をもつものと思われる。体部外面に縦ハケ、口縁部内面に横ハケ、体部内面にはやや斜め方向のハケを施す。山城Ⅳ-1～2様式にみられる。301は甕または壺かと思われる底部で、平底である。外面は、底部から上方に向かってヘラ削りが施され、内面にはハケ痕が残る。外面下半のヘラ削りは、山城Ⅳ-3様式に盛行するが、その時期の特徴的な器形がなく、底部も厚く、山城Ⅳ様式でもそれ以前のものと思われる。

弥生土器の出土量はわずかであるが、凹線文を多用した土器がほとんどみられないこと、器形や技法の特徴から、各々中期の中でも多少の時期差が考えられる。山城第Ⅲ様式～第Ⅳ様式前半を中心に、下がっても第Ⅳ-2～3様式までのものであろう。



第 51 図 第 7 面出土遺物実測図 2 (縮尺 1/4)

第 9 節 金属製品

金 1 (図版三十三・三十七) は刀の鏢である。青銅製で、形状は豎丸形とみられ、四方に 1 葉ずつ酢漿草文の透かしを配する。石組み 1014 から出土した。

金 2 (図版三十七) は銅銭で、寛永通寶である。石組み 1016 から出土した。

金 3 (図版三十三・三十七) は銅製の煙管である。形状から、羅字煙管の吸い口と考えられる。土坑 1043 から出土した。

金 4 (図版三十三・三十七) は青銅製の襖金具である。両端の短辺から 1.7cm、左右対称になる形で直径 2mm 程の穴を 2 ヶ所穿つ。平面上に文様はないが両端を蓮弁状に仕上げた飾り金具であると考えられる。金 5 (図版三十三・三十七) は鉄製の襖金具である。L 字状に屈曲した形状で、縁金具と考えられる。金 6 ~ 22 は鉄製品である。金 6 ~ 20 (図版三十七) は鉄製の角釘で、釘の寸法に企画性がある。金 21・22 は用途不明の鉄製品である。金 21 (図版三十三・三十八) は、楕円形の環と角棒を組み合わせたもので、馬具の引手のような形状を呈す。金 22 (図版三十八) は多数の鉄製品や銅製品が鏝で固着した状態で出土したものであり、詳細は不明。金 23 ~ 30 (図版三十八) は襖引手金具である。青銅製で、形状は甲菊木瓜と呼ばれる、木瓜形の周囲に 2 重の縁が付き、外側の縁に細かい花卉状の細工を施したものである。引手内面の上下に 1 か所ずつ、釘穴を確認できる。金 26 が引手としての形状を一番よくとどめており、金 23 ~ 25、金 27、金 28 ~ 30 がそれぞれ分離した部位となっている。土坑 2098 から出土した

金 31 (図版三十七) は銅銭である。北宋銭の皇宋通寶 (初鑄年 1039 年) で字体は篆書体である。土坑 2134 から出土した。

金 32 (図版三十四・三十九) は青銅製の火箸である。玉状の頭を持ち、持ち代部分は約 10cm を右向きに 4 度振っている。金 33 は鉄製の釘である。土坑 3161 から出土した。

金 34 (図版三十四) は、器種は不明だが内面に緑青鏝が付着することから銅製品に伴う鍍金であると考えられる。共伴した遺物は 15 世紀後半 (京都 IX 期) と考えられる。溝 4012 から出土した。

金 35 (図版三十四) も、鍍金である。前述した金 34 と同じく器種は不明だが内面に緑青鏝等の痕跡はなく、金 34 が線状の細長い形状であるのに対し、金 35 はやや扁平で内外面ともに長軸

方向に傷がつく。土坑 4044 から出土した。

金 36 (図版三十九) は銅製の釘である。金 37 ~ 42 (図版三十九) は銅銭である。このうち金 37 ~ 40 の 4 点は寛永通寶で、古寛永である。残り 2 点は判読不可だが径や厚さがそろっていることから恐らく他の 4 点と同様の寛永通寶であると考えられる。出土状況から見て、六道銭として埋納されたものと推定される。土器溜り 4168 から出土した。

金 43 ~ 45 (図版三十九) は鉄製の釘である。大きさ・形状ともに規格性はない。土器溜り 5062 から出土した。

金 46 (図版三十九) は銅銭である。北宋銭の元祐通寶 (初鑄年 1093 年) で、字体は篆書体である。土器溜り 5083 から出土した。

金 47 (図版三十九) は刀子とみられる。鉄製で、残存状態が悪く形状は不明瞭である。土器溜り 5105 から出土した。

金 48 (第 52 図、図版三十四・三十九) は青銅製の銚子である。吊手を伴い、容器に固定した金具を吊手側の 0.2cm 程の穴に差し込む形で接続する。明確に断定はできないが、形状から見て片口の銚子の可能性があげられる。土器溜り 5129 から出土した。

金 49 (図版三十四・三十九) は襖引手金具である。青銅製で、形状は木葉形である。鑄造の一体成形である。土坑 5210 から出土した。

金 50 ~ 53 (図版四十) は鉄製の釘である。一部木質が付着しているもの (金 50・51) がある。金 54 (第 52 図、図版三十四・四十) は鉄製の短刀である。平造りの彎刀 1 振りで、茎部分に明確な目釘穴を 1 か所確認できる。刀身は反りがあまり無いのに対し、茎は緩く内反する。茎尻は刃上茎尻とみられる。遺物に木質や、木質が腐朽した淡黄色土が付着していることから、柄や鞘といった刀装具を伴って埋納されたものと考えられる。土器溜り 6117 から出土した。

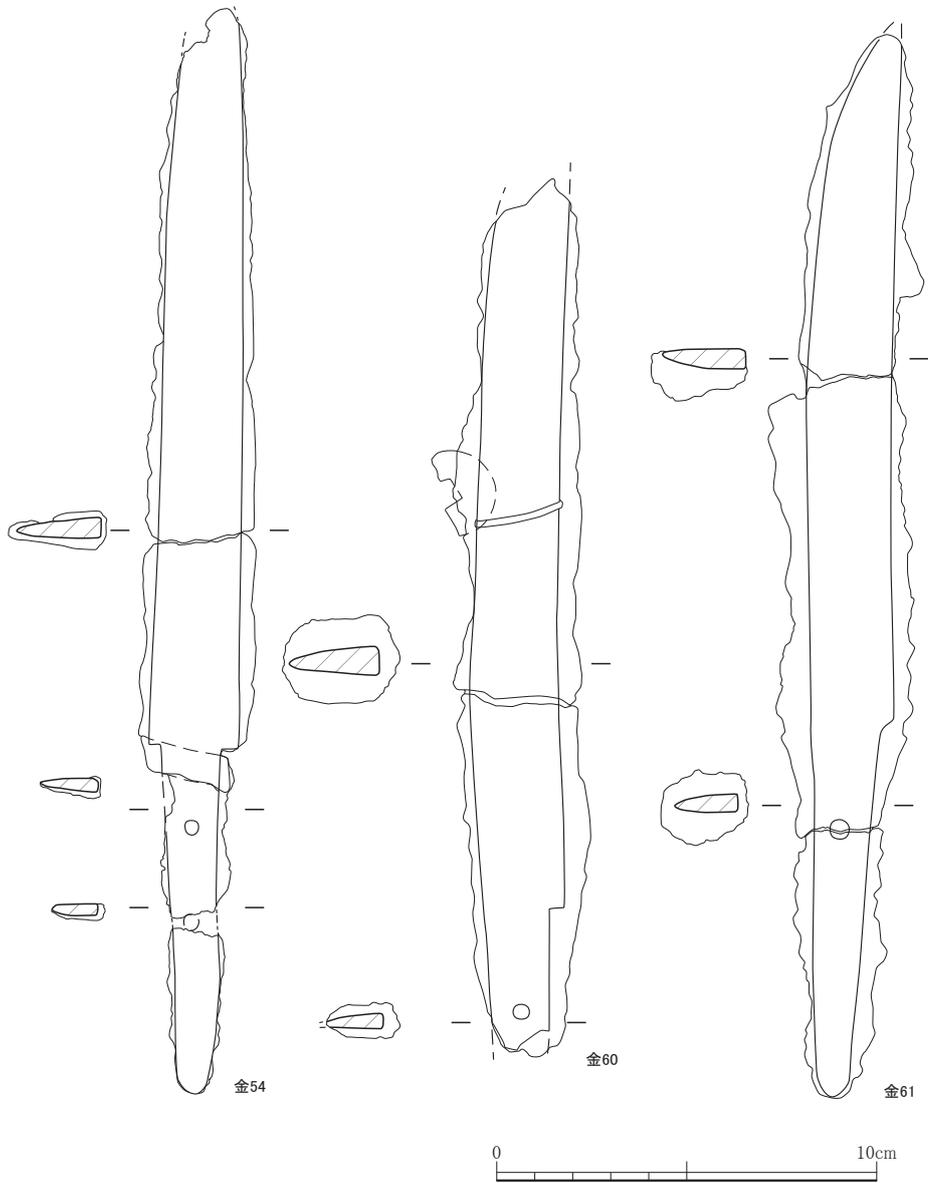
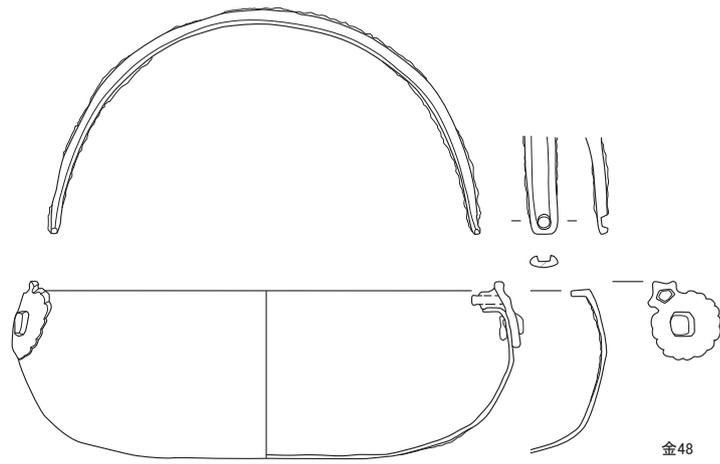
金 55 ~ 58 (図版四十一) は鉄製の釘である。すべて、太さが 0.5 ~ 0.6cm と規格性を持つ。金 59 (図版四十一) は鉄製の短刀である。茎部分にあたり、目釘穴と思われる穿孔が割れ口にかかる。土器溜り 6165 から出土した。

金 60 (第 52 図、図版三十五・四十) は鉄製の短刀である。平造りの彎刀 1 振りで、茎部分に目釘穴を 1 ヶ所穿孔する。刀・棟側共にやや反りをもつ。片刃で、棟が三ツ棟に近い。茎はやや中反りする。茎尻は不明である。遺物に付着している淡黄色土は、柄や鞘の木質が腐朽したものと考えられ、刃側に銭種不明の銅銭が付着している。銅銭と短刀の関係は不明である。土器溜り 6192 から出土した。

金 61 (第 52 図、図版三十五・四十) は鉄製の短刀である。平造りの彎刀で目釘穴を 1 か所確認できる。刀身は反りがあまりなく、茎はゆるく内反りする。茎尻は刃上茎尻とみられる。また、前述した金 54 と同様に、柄や鞘の木質が腐朽した淡黄色土が付着している。土器溜り 6192 から出土した。

金 62・63 (図版四十一) は銅銭である。金 62 は唐銭で、開元通寶である。金 63 は銭種不明である。土坑 6293 から出土した。

金 64 (図版三十五・四十一) は鉄製の工具である。形状から見ると鑿である可能性が高い。



第52図 出土金属製品実測図 (縮尺 1/2)

穂は先端に向けて細くなるが刃先はやや不明瞭である。土器溜り 6343 から出土した。

金 65～70（図版四十一）は鉄製の釘である。完形はないが、太さは 0.5cm と規格性がある。土器溜り 6376 から出土した。

金 71～73（図版四十一）は鉄製の釘である。金 74 は鉄製刀子である。錆により形状は不明瞭だが、刀身と思われる。土器溜り 6377 から出土した。

金 75・76（図版四十一）は青銅製の板である。いずれも明確な用具の種類の特定はできない。金 77・78 は鉄製の釘である。厚さが 0.5cm 前後と規格性がある。土坑 6531 から出土した。

金 79（図版四十一）は銅銭である。北宋銭で嘉祐元寶（初鑄年 1057 年）である。金 80・81（図版四十一）は鉄製の釘である。共に完形で、大きさも一致する。京都 V 期の土師器皿に付着して出土した。土坑 6540 から出土した。

第 10 節 石製品（第 53 図、図版三十六）

石 1 は石製の階段である。正面と上面前部は、石ノミや刃で丁寧に加工されている。背面と底面は、形を整えるために粗く加工がなされている。また、底面と背面の角にあたる部分は、原石である玉石の皮膚を残す。正面部分下の地面に隠れる部分の加工は、粗い。両側面は、壊されており、実際はもう少し長かったものと思われる。石材は、白川花崗岩である。石組 1040 から出土した。

石 2 は茶臼の下臼である。半分は欠損している。臼面は 8 分画し、そのうち 5 分画が残る。条線は、一区画に 9～11 で不規則である。中心穴は、径 2.4 cm である。受け皿部分は、打ち欠いているのか欠損している。材質は、灰色の砂岩であるが京都周辺で産出される砂岩ではない。土坑 2035 から出土した。

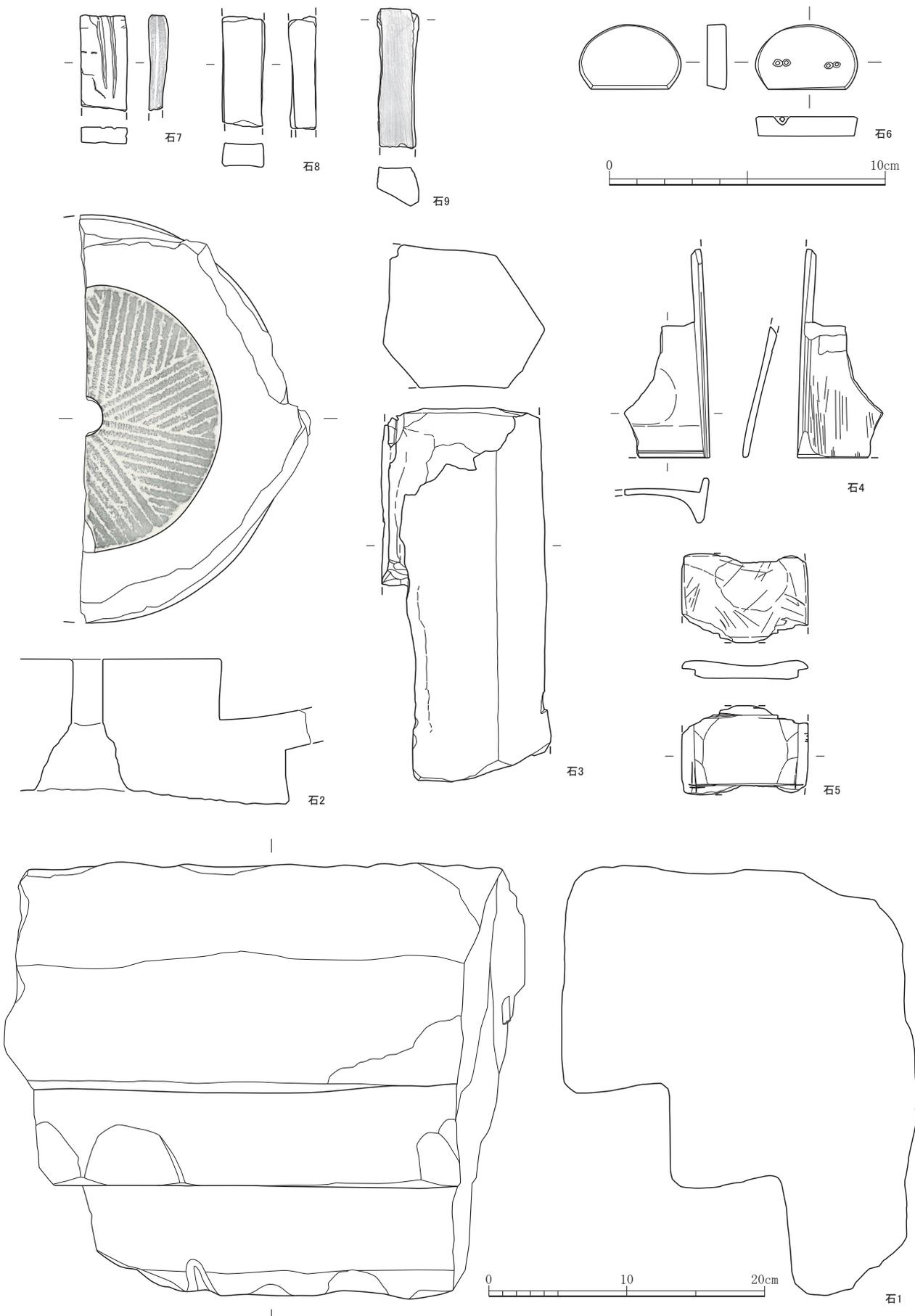
石 3 は角柱状石製品である。残存長 27.3cm の柱状で 4 面に面取り跡が残る。面全体に被熱痕がある。安山岩製で、京都付近以外からの搬入品である。土坑 5150 から出土した。

石 4 は硯である。薄手で、内面端部に線刻を施すなど、丁寧に作られている。砂岩系ホルンフェルスで、京都産と考えられる。土器溜り 6377 から出土した。

石 5 は用途不明の石製品である。板状の石の厚さ半分ほどを一回り小さい長方形に削り出している。削り出し部分全体に煤が付着する。反対側の中央は緩やかに窪み、中央に煤あるいは墨痕らしきものがみられる。蓋として使用されたものか。雲母片岩製で京都付近以外で産する石材である。土坑 6540 から出土した。

石 6 は石帯の丸軛である。色調は黒に近い暗緑色に白色の斑が縞状に入る。表面と側面は非常に丁寧に研磨されて光沢をもち、裏面には潜り穴が二か所に空けられる。集石 6090 から出土した。

石 7～石 9 は砥石である。石 7 は、断面三角形の溝が 2 条見られる。また、側面にも同様の溝が見られる。裏面には、指先程度の浅いくぼみが見られる。石材は砂岩である。土器溜り 5129 から出土した。石 8 は両面の中央にレンズ状の窪みが見られる。石材は、火成岩を使用している。土坑 6235 から出土した。石 9 は使用面は、一面で非常に細かい筋が多数見られる。石材は、頁岩である。土坑 6365 から出土した。



第53図 出土石製品実測図 (縮尺1/4、石4は1/2)

註

- (1) 『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-6』財団法人京都市埋蔵文化財研究所

※出土遺物に関して、本文・表中で記述の煩雑さを避けるため下記の分類・編年を使用・参照した。

- ・中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ・小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀－』京都編集工房
- ・寺岡薫・森岡秀人『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社
- ・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』
『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県

第5章 まとめ

今回の調査では、地表面から数十 cm 掘り下げたところで、ほとんど近・現代の影響を受けることなく幕末期の遺構面が残存していた。調査は、近世初頭からの調査であるため、江戸時代の面は重機により掘削し、近世初頭と考えられる第1面から第7面までの調査を行った。

今回の調査においては、烏丸綾小路遺跡に関連するものとしては、弥生時代中期と古墳時代前期の遺物が出土した

平安京に係わるものとしては、9世紀～17世紀に至る遺構・遺物が検出されている。

1. 第7面

第7面では、平安時代前期に関する遺構は、方形竪穴状の遺構と土坑が検出できたが、地割や建物に係わる様な遺構は確認できていない。方形竪穴状の遺構は、出土遺物からみて、9世紀前半～中ごろである。遺構はまばらで、この時期にこの周辺では、まだ活発な土地利用は行われていなかったものと考えられる。

また、烏丸綾小路遺跡に関するものでは、明確な遺構はなかったが、自然流路と思われる落ち込みを確認した。北東から南西に向かって、流路の東岸と思わる立ち上がりが検出された。流路を検出面より40 cm程掘り下げると砂礫層となり、その直上から弥生時代中期・古墳時代前期の土器が出土している。土器の年代を見ると幅があり、出土した土器は土砂と共に運ばれてきた可能性が考えられる。

2. 第6面

第6面では、683基の遺構が確認されたが、上層遺構の未掘のもの、掘り残しなども一部ある。しかし、遺構の多くは第6面に該当する。第6面の時期としては、出土遺物から、11、12世紀の生活面と考えられる。

大半の遺構の性格は不明であるが、長方形のプランの土器溜り土坑(6117・6165・6192・6256・6342・6376)は、たがいに共通性をもっている。また、土坑6049からはヤコウガイが出土し、注目される。この2つの土坑の性格について考えてみたい。

① 長方形のプランの土器溜り土坑

調査区北側、C～E2グリッドの北よりで、一定の範囲内から、形状の類似する6基の土器溜り土坑(6117・6165・6192・6256・6342・6376)を検出した。これらの土器溜り土坑は、平面形が東西端部がやや丸みを帯びる長方形の土坑である。土坑の規模は、攪乱等によって失われているものもあるため、すべてに明確な規模は示し得ないが、東西軸で約1.5～2 m、幅は約0.5～0.6 m、深さは約0.3～0.6 mである。また、これらの土坑は、何れも主軸方向を東西にもち、2基ずつが、2列ないし3列に、互いに重なりあわず、交互に列を持って配されている。

次に遺物の出土状況についてみると、どの土坑も覆土上層に、多量の土師器皿が包含されてい

る。出土した土師器皿の数には、ばらつきがあり共通性は認められないが、概ね上向きに置かれた状態で出土している。また土師器皿以外に、6117からは短刀が1本、6192からは2本が出土している。短刀の出土状況は、6117から出土したものは、土坑のほぼ中央部であった。6192から出土したものは、土坑のほぼ中央部と、遺構東壁際に倒れ掛かるような状態で出土した。中央部から出土した短刀は、刃先を北に向けて、底部より約15cm上層で出土した。東壁際に出土した短刀は、刃先を西に向けて、柄の方は東壁にかかり、刃先を西に、下方を向いて出土した。この短刀には、銅銭が付着していた。これらの短刀には、木質の付着物が認められ、鞘に収まった状態で置かれていたと考えられる。またこれ以外にも、6377からも短刀の一部と考えられる鉄製品が出土している。6377は、11世紀の遺構で、他の土坑に比べて古くなりすぎるきらいはあるが、周辺が多数の遺構が重複していることや、6342に一部破壊されていることから、6342に伴うものが6377の覆土に紛れ込んだ可能性も考えられる。

出土した土器からみた土坑の時期は、6165・6256・6376が12世紀、6117・6192・6342が14世紀～15世紀である。

こうした土器溜り土坑と類似する遺構は、市内の周辺調査からも確認されており、左京五条三坊九町(2008-10)をはじめ、7カ所で知られている。これら遺構の共通点として、① 方形の掘方を持ち、壁板を杭止めする。② 多量の土師器皿を上向きに入れる。③ 覆土に炭層が認められる。④ 鉄製短刀あるいは、小刀を入れる。⑤ 完形の輸入陶磁器1点以上を入れるといったことが指摘されている。今回検出された遺構と比較すると、やや形状に違いはあるが、長方形のプランを持ち、土師器皿が上向きに置かれていること、6117・6192からは、短刀が出土していること、輸入陶磁器の出土が見られることなどに共通した点が認められる。ただ、土坑の形状は、類似するものやや丸みを持った長楕円形に近い形状を示しており、規模もやや小さい。また、炭層が認められないなど必ずしもすべてが一致するものではない。

遺構の性格として、9基の長方形の平面形を持つ土坑が検出されている左京五条三坊九町の調査では、土葬墓としての可能性が示されている。今回の検出例においても、① 主軸を東西に置く。② 土坑が、ある程度共通した配置や間隔をとっている。③ 短刀の出土状況が土葬墓の副葬例に類似することなどから、墓である可能性が追認できる。墓と考えた場合、東西の主軸方向は浄土思想を反映したものであり、土坑の形状から土葬の伸展葬であるが、残存していなかったが木棺を埋置した可能性がある。木棺の可能性については、調査時に鉄釘の位置などにも注意したが、棺に伴うかどうかはわからなかった。

注目すべきは土坑の間隔と、配置の関係である。土坑が近接せず、互いにある一定の空間をもつことは、地表での石列、囲い、墳丘など何らかの方法で、墓を区画していたことが推測される。そのことは、約200年の時間差があっても、土坑どうしが重複しないことによってうかがい知ることができると考えられる。そうした地表に区画をもつ墓が、連綿と営まれた範囲を仮に墓域としてみるなら、土坑の配置については、3グリッド約15mの範囲にあり、6256、6342を結ぶ東西のラインより南では、検出されなくなる。墓域の南側の境界を示す明瞭な遺構は検出できていないが、X-110720ライン上から50cm南では、攪乱や上層遺構によって大部分が失われてはいるが、

集石や礎石と思われる礫が検出されており、これらが、墓域の境界線になる可能性も考えられる。

また、西側においても、6272、6378、6407 等集石あるいは石組みの痕跡と考えられる遺構が、南北方向に並ぶような状況がみられ、これより西では、廃棄土坑と思われる土坑群がみられるが土葬墓は認められない。こうした集石遺構が、区画としての役割を果たしていたかどうかは不明であるが、この付近が境界と考えられる。

東側では、6342 より東では土葬墓は検出されておらず、この付近が墓域の東の限界と考えられる。

また、調査区の中で検出された土葬墓が、互いの遺構が重複しないにもかかわらず、約 200 年の差があるのは、この間も墓域内で規則正しい造墓がなされていたとするなら、墓域は、未調査である北に広がる可能性が高い。周辺の調査において一定の場所にまとまりをもって検出された土葬墓群では、その時期は 13 世紀中ごろから 15 世紀中ごろまで継続していることから、今回の調査区よりさらに北に墓域が広がり、12 世紀以降の墓が造営されたものと推察される。

短刀の出土については、民俗例などにも見られる棺の上に置かれる魔除けの呪具であると思われる。今回検出した土葬墓の特徴として、短刀の出土は、14 世紀～15 世紀の墓に限られ、12 世紀の墓からは出土していないことである。そのまま考えれば、魔除けの短刀の副葬が、14 世紀ごろから始まったと思われるが、この地点だけに限られたことか、他でも共通するののかについては、今後の検討が必要であろう。また、短刀に付着していた銅銭が、副葬されていたものであれば、六道銭の可能性も考えられる。

② 鍋埋納遺構 (6095)

埋納遺構 6095 は、礫で埋められた長方形の土坑の中央に、完形の瓦質鍋が正位に据え置かれ、鍋の中には土師器皿が上向きに 4 枚重なった状態出土している。また、その土師器皿を外すと、鍋底部の中心は、もともと破損して穴のあいた状態であった。さらに鍋を取り出すと、その下から土師器皿が 1 枚正位の状態で出土している。鍋は使用による被熱で器壁が黒く変色しており、日用雑器が転用されたものと考えられる。また、体部に 1 ヶ所と、底部に穿孔がある。体部のものは直径 1.5 cm ほどの、焼成後に外側からあけられたものである。それに対して底部のものは、比較的大きな穴で、使用による被熱で薄くなり破損したものかと推察される。

鍋の穿孔は、使用に際しての副次的なものではなく、仮器としての意味合いをもつもので、出土状況などから、火葬墓の可能性が考えられる。ただし、火葬墓として考えた場合、墓域の推定される境界付近にあることや、時期的にも新しい土葬墓の一群とも関連する。また、故意による穿孔は、蔵骨器にもよく見られるものである。土葬墓で構成される墓地の中で、火葬墓であることは、死因によるものか、あるいは分骨を意識したものなどと考えることもできる。ただし、火葬骨が出土していないため、火葬墓として断定できないことが難点である。ここでは、そうした問題点のみを明記する。

③ 土坑 6049 とヤコウガイ

土坑 6049 は遺物が出土していないため遺構面の年代から 11～12 世紀の遺構と推測される。他の土坑と異なり、ヤコウガイの破片がまとまって出土した。ヤコウガイは、屋久島・種子島よ

り以南の温かい海域に生息する。1個が20cm前後で1kg以上となる大型の貝であるが、出土したヤコウガイは破片で、完全な形の貝殻は出土していない。破片は、上部と芯部が最も多く残されている。これは、ヤコウガイは早くから螺鈿細工に用いられており、破片の状態より螺鈿細工に使用する部分が取り除かれ、必要のない部分を廃棄したためと推測される。

また、遺構（土坑・ピット）の覆土や包含層からは、不定形で形状・厚みも多種にわたる砂岩の砥石が数多く出土している。この砥石は、長方形で長さが約5cm～12cmで幅、厚みが2cm程度のもの、長さ5～10cm程度で、幅3cm前後、厚さ5mm程度等のものと、未成品を思わせるような長方形や方形の形状をとらず、部分的に破損したか、あるいは、割れた状態のまま形状を成さないものも含まれる。これらの砥石には、先端部のみを使用したもの等、部分的な使用痕が見られる。さらに使用痕についてみると、先端が尖った刃物を研いだような、幅2mm程度の沈線が見られるものや、使用面に0.1mm以下の細かな線が入るもの、使用面に傷等の痕跡は認められないもの等がある。これは、ヤコウガイから取り出された、厚貝板を加工するための道具との関連性が考えられ、貝殻を加工する際の道具を研ぐものや、ヤコウガイを加工する過程での磨き等による使い分けがなされていたものと考えられる。

ヤコウガイは破片を廃棄した土坑（6049）や、散在する不定形な砥石の多さから、おそらくこの場所に、平安時代中期～後期に螺鈿細工の工房が存在していた可能性が考えられる。

第5表 ヤコウガイ貝殻片（2cm以上）の部位別数量

部 位	遺構（遺物番号）		
	6049 (683, 797)		
	破片数	重量 (g)	重量 / 片 (g)
螺塔	1	10	0
体層	59	1325	22
殻軸（臍孔あり）	9	340	38
殻軸	9	240	27
殻軸～軸唇～臍盤～縫帯（臍孔あり）	16	2945	184
軸唇～臍盤～縫帯（臍孔あり）	17	3470	204
軸唇～臍盤～縫帯	25	3170	127
臍盤～縫帯	11	505	46
部位不明	20	135	7
合計	167	12140	73
最小個体数（臍孔の口をカウント）	42	—	—

3. 第5面

第5面では、区画と思われるピットや礎石と、12基の土器溜りが検出されている。また、出土遺物から、13世紀後半～14世紀前半の生活面と考えられる。

区画かと思われるものは、X-110721.5ラインで、東西に延びる柵がある。この柵を構成するピットには、礎石を伴うものもある。柵は、E2グリッドより西に向かって延び、約8.5mの地点で1m北へ向かう。さらに、再び西方向へ延び、C2グリッドY-22105ライン付近まで延びると考えられる。この区画は、第6面で検出された土葬墓の墓域の推定ラインとも一致する。

東側の東西に延びる区画に関する遺構は、検出されていないため、明瞭な区画を示し得ないが、Y-22090ラインより東では、土器溜りは検出できていない。また、X-11072.5ラインとY-22101.5ラインが交差する地点を起点として、北へ延びる区画があるように見られる。さらに、

この交差する地点より西へ約 2.6 m のところで、東西ラインより南に延びるライン上に区画のためと思われる石列が確認できる。

第 5 面で検出された土器溜りには、第 6 面で見られたような方向性、形状、出土状況に規則性は無く、廃棄土坑の可能性が強いと考えられる。

4. 第 4 面

第 4 面は、出土遺物から 14 世紀後半～ 15 世紀前半の生活面と考えられる。

区画と思われる溝状遺構 (4012) を B～E グリッドの範囲で約 17 m にわたって検出し、それと直交するように南に延びる溝状遺構 4063 がある。また、D3 グリッドでは、幅約 1.2 m の硬化した整地層が東西に確認された。この整地層の南際には、礎石を持つピットや礫が沿うようにして出土している。これらのものが、柵等の施設である可能性も考えられる。また、この硬化面と溝 4012 間の距離は、約 3 m である。こうした区画は、土地・建物の境界を示す遺構である可能性が考えられる。

また、溝 4012 は、第 5 面で区画と考えた X-110721.5 ライン上に東西に延びる礎石やピットとほぼ重なる。

5. 第 3 面

第 3 面は、出土遺物から 15 世紀後半～ 16 世紀の生活面と考えられる。

明確な建物等を見つけることは出来ていないが、屋敷地の区画と思われる、東西 (3017・3035・3028) 及び南北 (3036・3049・3064) に走る小規模な溝を検出した。

東西に延びる 2 条の溝の間隔は、約 1.3 m で、屋内通路や建物の間をぬける路地の可能性も考えられる。また、調査区南において、検出し東西に延びる硬化面 (全体図網掛け範囲) があり四行八門ラインと並行関係にあり、町屋の区画を示すものと思われる。

6. 第 2 面

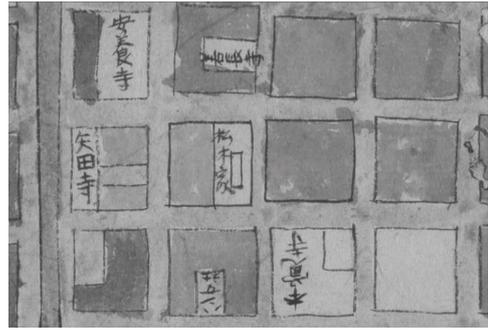
第 2 面は、出土遺物から概ね 16 世紀の生活面と考えられる。

第 2 面では、集石遺構と道路状に延びる整地層が確認されている。整地層の幅は、約 1 m で、C・D グリッドで東西に軸をもち約 8 m 続く。この整地層の範囲は整地層の中心で、X-110725 ラインより約 1.50 m 北で、第 3 面で確認した硬化面、第 4 面で確認した 4204 より南にずれるが 4204 より南側の礎石や礫群とほぼ一致する。また、整地面の南側には礫の入るピット・土坑や礎石が確認されている。これらは、町屋の区画を示す柵等の可能性も考えられる。

土坑 2035 出土の茶臼について

遺物で注目されるのは、土坑 2035 から出土した茶臼である。茶の湯は、15 世紀中頃から普及し始め、16 世紀に入ると急速に普及するが、茶臼を所持し、本格的に茶の湯を楽しむことができる階層は限られた者であったと思われる。調査地から考えると、おそらく下京付近の裕福な町衆の家屋に備わっていたものと思われる。

今回の調査地を江戸時代中期に応仁～天正（1467～1592）年間の都を描いたとされる中昔京師地圖で見ると本調査地点である左京五条三坊七町には、松本家との記載が見える。また、ここは、松本町と呼ばれていた時期もあり、地名の由来については、松の木が植えられていた、松本宗吾（十四屋宗吾）の邸宅があった等いくつかの伝承が残っている。その中の松本宗吾は、下京の茶の湯の成立に係わった人物の一人としてあげられ、下京茶湯者と称せられていた。松本宗吾邸との関係は不明確ではあるが、こうした伝承のある土地での茶臼の出土は、興味深い。



第54図 中昔京師地圖（部分）

7. 第1面

第1面は、出土遺物から16世紀後半～17世紀前半の生活面と考えられる。

調査区東壁際では、石組み1040や、溝1061の南に集石と南西隅にも集石遺構が存在する。これらは、家屋の入口や境界線の可能性が考えられる。また、石組み遺構1040に利用されている石の中に、三段の低い階段の破損したものが出土している。この遺構面か、それ以前に、縁から地面におりるのに低い階段をおくような本格的な町屋の建物の存在がうかがえる。

また、土坑1099（土器溜り4168と同一遺構）からは、土師器小皿と共に古寛永通寶が6枚出土している。土師器皿は、土坑の壁をめぐる様な状態で検出されたものと、中央部分に置かれたものが見られる。6枚の銭貨は、土坑内に散らばった状況で検出された。何らかの呪術的な執り行いの跡の可能性もあるが、特定はできない。

第6表 出土遺物観察表

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
1	土坑 1048	土師器	皿	10.4	2.1	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	口縁部に煤付着
2	土坑 1048	施釉陶器	丸皿	9.8	2.2	—	施釉、ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	施釉、ロクロナデ	5Y7/1 灰白色	16世紀後半(大窯編年第3段階後半期)
3	土坑 1048	施釉陶器	天目茶碗	11.0	[4.9]	—	施釉、ロクロナデ、回転ヘラケズリ	施釉、ロクロナデ	10YR7/4 にぶい橙色	
4	集石 1015	施釉陶器	卸し皿	—	[2.2]	9.2	施釉、ロクロナデ、底部回転糸切り	施釉、卸し目	2.5Y8/1 灰白色	内面に煤付着、底部外面に墨書、14世紀後葉～15世紀初頭(古瀬戸編年後期I～II期)
5	集石 1015	焼締陶器	播り鉢	—	[8.5]	(14.0)	ロクロナデ、底部下駄印	ロクロナデ、播り目5条(推定約20本)	5YR6/6 橙色	信楽、外面に墨書あり
6	集石 1098	輸入磁器	皿	—	[1.9]	(16.1)	施釉、ロクロヘラズリ	施釉	2.5GY7/1 明オリブ灰色	高台に砂付着
7	集石 1098	輸入磁器	碗	(19.0)	[6.3]	—	施釉	施釉	2.5GY8/1 灰白色	
8	土坑 2113	土師器	皿	10.4	2.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
9	土坑 2113	土師器	皿	11.8	3.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
10	土坑 2131	土師器	皿	(9.4)	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
11	土坑 2131	土師器	皿	16.4	3.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
12	土坑 2134	土師器	皿	9.2	1.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
13	土坑 2134	施釉陶器	天目茶碗	(12.4)	5.5	—	施釉、ロクロナデ	施釉、ロクロナデ	釉 7.5YR2/1 黒色	
14	土坑 2134	焼締陶器	甕	(46.0)	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	5YR4/3 にぶい赤褐色 5YR3/3 明赤褐色	信楽
15	集石 2099	土師器	皿	10.4	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/4 浅黄橙色	
16	集石 2099	土師器	皿	(16.1)	2.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
17	集石 2099	土師器	皿	8.5	1.7	—	オサエ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
18	集石 2099	緑釉陶器	碗	—	[2.9]	(6.4)	施釉、ロクロナデ	施釉、ロクロナデ	5Y5/1 灰色	全体被熱
19	集石 2099	青磁	皿	(12.8)	[3.5]	(6.6)	施釉、ロクロナデ	施釉	5Y6/2 灰オリブ色	
20	合わせ口土師器皿 2067	土師器	皿	(9.6)	1.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/6 橙色	
21	合わせ口土師器皿 2067	土師器	皿	21.4	3.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	
22	合わせ口土師器皿 2067	土師器	皿	21.7	3.5	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
23	溝 3035	土師器	皿	(9.2)	1.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
24	溝 3035	土師器	皿	(15.0)	[2.0]	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙色	
25	溝 3035	土師器	皿	(11.8)	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
26	土坑 3156	土師器	皿	5.7	1.0	—	オサエ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色	
27	土坑 3156	土師器	鍋	(33.0)	[10.6]	—	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	10YR6/2 灰黄褐色	外面に煤付着
28	集石 3129	土師器	皿	(12.2)	[2.5]	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
29	集石 3129	焼締陶器	捏ね鉢	(26.6)	[6.1]	—	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5YR6/3 橙色	信楽か
30	集石 3129	染付磁器	皿	—	[2.9]	(8.6)	施釉	施釉	7.5Y8/1 灰白色	被熱痕あり、肥前か
31	集石 3195	土師器	皿	11.2	3.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	口縁部に煤付着
32	集石 3195	施釉陶器	天目茶碗	(11.0)	[5.7]	—	施釉、ケズリ	施釉	5YR2/3 極暗赤褐色	建窯か
33	土器溜り 4022	土師器	皿	6.8	1.7	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙色	底部外面に爪痕あり
34	土器溜り 4022	土師器	皿	8.2	1.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
35	土器溜り 4022	土師器	皿	9.1	1.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
36	土器溜り 4022	土師器	皿	(12.7)	2.3	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
37	土器溜り 4022	瓦	軒丸瓦	高さ: (8.7)	15.4	2.2	ヘラナデ	布目、ナデ	N4/ 灰色	
38	土器溜り 4022	瓦	平瓦	長さ: (20.0)	幅: 23.0	1.8	凹線斜め十字文 タタキ	凸線斜め十字文 タタキ	10YR5/1 褐灰色	
39	土器溜り 4098	土師器	皿	6.8	1.7	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
40	土器溜り 4098	土師器	皿	11.6	3.1	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
41	土器溜り 4098	土師器	皿	8.2	1.6	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
42	土器溜り 4098	土師器	皿	11.4	2.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
43	土器溜り 4098	須恵器	捏ね鉢	(29.0)	[7.2]	—	ロクロナデ	ロクロナデ	N5/ 灰色	東播系
44	土器溜り 4137	土師器	皿	6.5	1.8	—	ナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
45	土器溜り 4137	土師器	皿	(12.2)	[3.0]	—	ナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	
46	土器溜り 4137	土師器	皿	(12.2)	2.1	—	ナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR5/2 灰黄褐色	
47	土器溜り 4154	土師器	皿	6.8	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
48	土器溜り 4154	土師器	皿	(12.0)	3.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	
49	土器溜り 4154	土師器	皿	(12.0)	2.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/3 淡黄色	
50	土器溜り 4154	瓦質土器	火鉢	(37.7)	[11.1]	—	ミガキ	ミガキ、ナデ	N5/ 灰色	
51	土器溜り 4154	白磁	皿	—	[0.6]	(4.0)	施釉、ケズリ	施釉	2.5GY8/1 灰白色	
52	土器溜り 4168	土師器	皿	5.4	1.0	—	オサエ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
53	土器溜り 4168	土師器	皿	6.8	1.3	—	オサエ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
54	土器溜り 4168	施釉陶器	椀	(9.8)	[4.5]	—	施釉	施釉	5Y7/1 灰白色	肥前か
55	土器溜り 4192	土師器	皿	6.7	2.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
56	土器溜り 4192	土師器	皿	12.3	3.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙色	
57	土器溜り 4192	土師器	皿	10.3	2.1	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
58	土器溜り 4192	瓦質土器	鍋	(14.0)	[6.6]	—	ナデ、オサエ	ナデ、ミガキ	10YR4/1 褐灰色	
59	集石 4059	土師器	皿	7.5	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/3 淡黄色	
60	集石 4059	土師器	皿	(12.2)	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
61	集石 4059	焼締陶器	摺り鉢	—	[8.8]	—	ロクロナデ	ロクロナデ、摺り目4条(推定約10本)	7.5YR7/6 橙色	信楽、16世紀前半～後半(京都X古～中期)、外面に墨書あり
62	集石 4156	土師器	皿	(11.6)	[1.9]	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面に煤付着
63	集石 4156	瓦質土器	羽釜	(22.2)	[5.0]	—	ナデ、オサエ	ナデ	10YR4/1 褐灰色	外面に煤付着
64	集石 4188	土師器	皿	6.9	1.6	—	ナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
65	集石 4188	土師器	皿	(12.4)	[2.5]	—	ナデ、オサエ	ヨコナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
66	集石 4188	土師器	皿	(12.0)	[2.6]	—	ナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
67	石組み 4090	土師器	丸底小鉢	(11.6)	[3.8]	—	ナデ	—	7.5YR6/4 にぶい褐色	外面に煤付着 内面は使用のため平滑
68	土器溜り 5036	土師器	皿	7.0	1.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
69	土器溜り 5036	土師器	皿	11.0	3.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
70	土器溜り 5036	土師器	皿	11.2	2.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
71	土器溜り 5036	焼締陶器	甕	(22.0)	[12.2]	—	ヨコナデ、オサエ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	N5/ 灰色	12世紀末～13世紀初(常滑4型式)
72	土器溜り 5058	土師器	皿	9.1	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
73	土器溜り 5058	土師器	皿	9.4	1.7	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙色	
74	土器溜り 5058	土師器	皿	9.5	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	口縁部に煤付着
75	土器溜り 5058	土師器	皿	(13.4)	3.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR6/2 灰黄褐色	
76	土器溜り 5058	土師器	皿	16.8	3.1	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y7/3 浅黄色	
77	土器溜り 5058	瓦質土器	三足付羽釜	(17.8)	22.4	—	ナデ、オサエ	ナデ	N4/ 灰色	
78	土器溜り 5058	青磁	皿	—	[1.9]	(3.0)	施釉、ロクロナデ、底部ヘラ切り	施釉	5Y7/3 浅黄色	
79	土器溜り 5058	青白磁	合子	3.9	2.0	3.8	施釉	施釉	10BG7/1 明青灰色	
80	土器溜り 5062	土師器	皿	6.9	1.3	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/ 淡黄色	
81	土器溜り 5062	土師器	皿	12.1	3.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	
82	土器溜り 5062	土師器	皿	12.7	2.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	
83	土器溜り 5062	土師器	皿	16.2	3.6	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	

遺物 番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
84	土器溜り 5062	土師器	皿	8.8	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	5YR6/6 橙色	
85	土器溜り 5062	土師器	皿	9.2	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙色	
86	土器溜り 5062	土師器	皿	11.2	2.3	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	5YR6/6 橙色	
87	土器溜り 5062	土師器	皿	12.4	2.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	
88	土器溜り 5062	瓦質土器	羽釜	24.0	[10.6]	—	ナデ、オサエ	ナデ	10YR4/2 灰黄褐色	
89	土器溜り 5069	土師器	皿	9.3	1.5	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	5Y6/4 にぶい橙色	
90	土器溜り 5069	土師器	皿	14.0	2.7	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	
91	土器溜り 5069	瓦質土器	火鉢	(48.0)	[10.0]	—	ナデ	ナデ	2.5Y3/1 黒褐色	
92	土器溜り 5069	白磁	碗	(16.0)	[4.0]	—	施釉	施釉	5Y7/2 灰白色	
93	土器溜り 5083	土師器	皿	7.9	1.5	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
94	土器溜り 5083	土師器	皿	11.3	2.5	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	5YR7/6 橙色	
95	土器溜り 5083	土師器	皿	14.2	3.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙色	
96	土器溜り 5083	土師器	皿	15.8	3.6	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	
97	土器溜り 5083	瓦質土器	鍋	29.8	[9.0]	—	ナデ、オサエ、 ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	N7/ 灰白色	
98	土器溜り 5083	施釉陶器	卸し皿	(15.0)	3.0	—	施釉、ロクロナ デ、底部糸切り	施釉、卸し目	2.5Y7/3 浅黄色	14世紀後葉(古瀬戸編年 後期I期)
99	土器溜り 5127	土師器	皿	9.6	1.7	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/6 橙色	
100	土器溜り 5127	土師器	皿	9.9	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
101	土器溜り 5127	土師器	皿	13.9	2.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色	
102	土器溜り 5127	白色土器	皿	9.0	2.0	4.4	ロクロナデ、底 部糸切り	ロクロナデ	2.5Y8/2 灰白色	
103	土器溜り 5127	瓦質土器	鍋	—	[3.5]	—	ナデ、オサエ	ナデ	10YR5/2 灰黄褐色	口縁部に煤付着
104	土器溜り 5129	土師器	皿	13.2	1.7	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
105	土器溜り 5129	白磁	碗	(16.8)	[2.5]	—	施釉	施釉	7.5Y7/1 灰白色	
106	土器溜り 5139	土師器	皿	(6.4)	1.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
107	土器溜り 5139	土師器	皿	(12.7)	2.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
108	土器溜り 5139	土師器	皿	8.0	1.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
109	土器溜り 5139	須恵器	皿	(9.0)	2.2	—	ロクロナデ、底 部糸切り	ロクロナデ	5Y6/1 灰色	
110	土器溜り 5153	土師器	皿	6.3	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	
111	土器溜り 5153	土師器	皿	8.0	2.6	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	口縁部に煤付着
112	土器溜り 5153	土師器	皿	11.7	2.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y7/2 灰黄色	口縁部に煤付着
113	土器溜り 5153	土師器	皿	13.9	3.7	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
114	土器溜り 5153	土師器	皿	8.0	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
115	土器溜り 5153	土師器	皿	11.0	2.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
116	土器溜り 5153	瓦質土器	鍋	29.4	13.7	—	ヨコナデ、オサエ	ナデ	10YR2/1 黒色	
117	土器溜り 5175	土師器	皿	(7.5)	1.3	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5YR7/3 にぶい橙色	
118	土器溜り 5175	土師器	皿	11.0	2.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
119	土器溜り 5175	瓦質土器	羽釜	—	[4.2]	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
120	土器溜り 5212	土師器	皿	6.9	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/3 淡黄色	
121	土器溜り 5212	土師器	皿	(11.2)	2.7	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	
122	土器溜り 5212	土師器	皿	(8.8)	1.5	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	
123	土器溜り 5212	土師器	皿	11.4	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/6 橙色	
124	土器溜り 5213	土師器	皿	6.6	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
125	土器溜り 5213	土師器	皿	8.2	2.5	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
126	土器溜り 5213	土師器	皿	(9.6)	1.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	口縁部に煤付着
127	土器溜り 5213	土師器	皿	11.8	2.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	
128	土器溜り 5213	土師器	皿	(11.8)	3.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
129	土器溜り 5213	土師器	皿	11.0	2.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
130	土器溜り 5213	土師器	皿	11.2	2.1	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
131	土器溜り 5213	瓦質土器	火鉢	—	[5.5]	—	ミガキ	ミガキ	N5/ 灰色	外面に菊花の押印
132	土器溜り 5213	白磁	碗	(15.4)	[3.9]	—	施釉	施釉	7.5Y7/2 灰白色	
133	土坑 5009	瓦質土器	火鉢	—	[8.0]	(31.0)	ミガキ	ナデ	10YR7/1 灰白色	
134	土坑 5111	土師器	皿	9.0	1.5	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙色	口縁部に煤付着
135	土坑 5111	瓦質土器	火鉢	—	[7.7]	—	ミガキ	ナデ	N5/ 灰色	
136	土坑 5111	焼締陶器	甕	39.0	9.2	—	ナデ	ナデ	5GY5/1 オリーブ灰色	13世紀後半(常滑6a型式)
137	土坑 5111	白磁	碗	—	[1.3]	3.9	ロクロケズリ	施釉	7.5Y8/1 灰白色	高台内に「井」形の墨書あり
138	土坑 5111	青磁	皿	(12.6)	[2.8]	—	施釉	施釉	10Y6/2 オリーブ灰色	
139	土坑 5158	土師器	皿	(7.0)	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
140	土坑 5158	土師器	皿	(12.0)	2.5	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
141	土坑 5158	青磁	碗	(16.3)	[3.7]	—	施釉	施釉	5GY6/1 オリーブj 灰色	
142	土坑 5172	土師器	皿	8.6	1.3	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色	
143	土坑 5172	土師器	皿	(10.1)	2.6	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
144	土坑 5172	瓦質土器	羽釜	—	[5.4]	—	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y3/1 黒褐色	
145	土坑 5172	青磁	碗	—	[2.3]	5.5	施釉、ロクロケズリ?	施釉	10Y8/1 灰白色	
146	土坑 5186	土師器	皿	10.8	2.7	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
147	土坑 5186	土師器	皿	(8.7)	[1.7]	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
148	土坑 5186	土師器	皿	(11.8)	2.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
149	土坑 5186	土師器	ミニチュア羽釜	(5.3)	[1.8]	—	ナデ、オサエ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙色	
150	土坑 5186	瓦質土器	火鉢	(27.0)	12.3	—	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	N5/ 灰色	
151	土坑 5186	施釉陶器	押し皿	10.8	3.8	—	施釉、ロクロナデ	施釉、押し目	5Y7/1 灰白色	13世紀末～14世紀初頭(古瀬戸編年中期I期)
152	土坑 5188	土師器	皿	8.8	1.3	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部に煤付着
153	土坑 5188	土師器	皿	(13.2)	1.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
154	土坑 5188	土師器	鉢	—	—	—				
155	土坑 5188	白磁	碗	(17.0)	[3.6]	—	施釉	施釉	5Y7/2 灰白色	
156	土坑 5188	青磁	碗	(11.2)	[2.5]	—	施釉	施釉	7.5Y6/1 灰色	輪花
157	土坑 5211	土師器	皿	(7.6)	1.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	N4/ 灰色	
158	土坑 5211	瓦質土器	鍋	(26.0)	[6.0]	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	5Y7/1 灰白色	
159	集石 5060	土師器	皿	9.2	1.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/3 淡黄色	
160	集石 5060	土師器	皿	10.7	2.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
161	集石 5060	土師器	皿	11.2	2.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色	
162	土器溜り 6026	土師器	皿	6.8	1.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
163	土器溜り 6026	土師器	皿	10.9	3.1	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
164	土器溜り 6026	土師器	皿	10.0	2.1	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
165	土器溜り 6028	土師器	皿	6.8	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/1 灰白色	
166	土器溜り 6028	土師器	皿	(12.2)	2.6	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
167	土器溜り 6028	土師器	皿	(12.0)	[2.2]	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
168	土器溜り 6117	土師器	皿	11.4	2.5	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
169	土器溜り 6117	土師器	皿	11.2	2.7	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
170	土器溜り 6117	土師器	皿	8.1	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	口縁部に煤付着
171	土器溜り 6117	土師器	皿	8.4	1.7	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
172	土器溜り 6117	土師器	皿	11.8	2.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	
173	土器溜り 6117	土師器	皿	12.0	2.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	
174	土器溜り 6117	白磁	碗	(15.3)	[3.9]	—	施釉	施釉	白色	
175	土器溜り 6165	土師器	皿	9.5	2.1	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
176	土器溜り 6165	土師器	皿	14.9	3.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
177	土器溜り 6165	土師器	鉢	—	[5.3]	11.4	ヨコナデ、オサエ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙色	
178	土器溜り 6165	灰釉陶器	碗	—	[2.5]	(8.4)	ロクロナデ、底部糸切り	ロクロナデ	2.5Y7/1 灰白色	
179	土器溜り 6165	須恵器	甕	(30.0)	[12.7]	—	平行タタキ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	N4/ 暗灰色	
180	土器溜り 6165	白磁	皿	9.8	2.0	3.8	施釉	施釉	5Y7/2 灰白色	
181	土器溜り 6165	白磁	碗	15.6	6.1	6.4	施釉、ロクロヘラケズリ	施釉	5Y7/2 灰白色	
182	土器溜り 6192	土師器	皿	11.5	2.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	
183	土器溜り 6192	土師器	皿	(11.4)	2.3	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
184	土器溜り 6256	土師器	皿	9.5	1.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色	
185	土器溜り 6256	土師器	皿	14.1	3.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
186	土器溜り 6256	白磁	皿	(10.1)	2.5	(3.2)	施釉、底部糸切り	施釉	7.5Y7/1 灰白色	
187	土器溜り 6342	土師器	皿	7.5	1.6	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/3 淡黄色	
188	土器溜り 6342	土師器	皿	9.6	2.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/6 橙色	
189	土器溜り 6342	土師器	皿	(13.8)	3.3	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙色	
190	土器溜り 6376	土師器	皿	9.1	1.6	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
191	土器溜り 6376	土師器	皿	9.6	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
192	土器溜り 6376	土師器	皿	14.6	3.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y7/3 浅黄色	
193	土器溜り 6376	瓦器	碗	(7.6)	3.3	(3.9)	ヨコナデ、ナデ	ミガキ、ヨコナデ	5Y2/1 黒色	
194	土器溜り 6376	青磁	皿	10.2	2.7	2.9	施釉、ロクロナデ	施釉	5Y6/2 灰オリーブ色	
195	土器溜り 6376	青白磁	合子	5.7	2.2	5.2	施釉、型押し	施釉	N9/ 白色	
196	土器溜り 6377	土師器	皿	10.4	1.6	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	5YR7/6 橙色	
197	土器溜り 6377	土師器	皿	10.6	1.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	
198	土器溜り 6377	土師器	皿	10.6	1.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	
199	土器溜り 6377	土師器	皿	10.7	1.6	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
200	土器溜り 6377	土師器	皿	10.8	1.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
201	土器溜り 6377	土師器	皿	11.0	1.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/4 浅黄橙色	
202	土器溜り 6377	土師器	皿	11.0	1.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/4 浅黄橙色	
203	土器溜り 6377	土師器	皿	11.5	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/6 橙色	
204	土器溜り 6377	土師器	皿	11.2	1.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/4 浅黄橙色	
205	土器溜り 6377	土師器	皿	12.0	1.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	
206	土器溜り 6377	土師器	皿	10.8	2.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/4 浅黄橙色	
207	土器溜り 6377	土師器	皿	11.0	2.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	
208	土器溜り 6377	土師器	皿	11.0	2.1	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/4 浅黄橙色	
209	土器溜り 6377	土師器	皿	11.0	2.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/4 浅黄橙色	
210	土器溜り 6377	土師器	皿	13.6	2.3	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
211	土器溜り 6377	土師器	皿	13.6	2.6	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
212	土器溜り 6377	土師器	皿	15.5	2.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/4 浅黄橙色	

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
213	土器溜り6377	土師器	皿	16.4	3.1	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
214	土器溜り6377	土師器	皿	16.4	3.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
215	土器溜り6377	土師器	皿	16.5	4.1	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色	
216	土器溜り6377	土師器	皿	16.8	3.3	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
217	土器溜り6377	土師器	皿	8.8	1.5	—	ロクロナデ、底部糸切り	ロクロナデ	10YR8/4 浅黄橙色	ロクロ土師器
218	土器溜り6377	須恵器	皿	10.2	2.1	5.1	ロクロナデ、底部糸切り	ロクロナデ	10YR7/1 灰白色	
219	土器溜り6377	須恵器	皿	14.5	3.5	—	ロクロナデ、底部糸切り	ロクロナデ	10YR8/4 浅黄橙色	
220	土器溜り6377	白色土器	蓋	—	3.0	10.6	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
221	土器溜り6377	白色土器	椀	14.9	4.4	—	ロクロナデ、底部糸切り	ロクロナデ	2.5Y8/2 灰白色	
222	土器溜り6377	灰釉陶器	皿	10.5	2.9	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部に煤付着、見込みに赤色顔料付着 11世紀後半(東濃窯西坂1号窯式)
223	土器溜り6377	灰釉陶器	椀	—	[4.5]	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y7/1 灰白色	11世紀後半(東濃窯西坂1号窯式)
224	土器溜り6377	緑釉陶器	皿または椀	—	[1.4]	6.7	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロナデ	10YR7/1 灰白色	東海以外
225	土器溜り6377	黒色土器	椀	(14.6)	5.0	(5.0)	ミガキ、ナデ	ミガキ	N2/ 黒色	
226	土器溜り6377	瓦器	椀	(14.8)	[4.6]	—	ミガキ	ミガキ	N4/ 灰色	
227	土器溜り6377	瓦質土器	蓋?	(6.0)	5.8	(13.4)	ミガキ	ミガキ	N1.5/ 黒色	
228	土器溜り6541	土師器	皿	9.0	1.6	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
229	土器溜り6541	土師器	皿	13.6	2.4	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色	
230	土器溜り6541	瓦器	皿	9.2	1.5	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、暗文	N5/ 灰色	ジグザグ状暗文
231	土器溜り6561	土師器	皿	8.7	1.5	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色	
232	土器溜り6561	土師器	皿	9.3	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色	
233	土器溜り6561	土師器	皿	14.3	3.1	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR6/6 橙色	
234	土器溜り6561	白磁	碗	(15.0)	[4.0]	—	施釉	施釉	N8/ 灰白色	
235	土坑 6007	土師器	皿	(11.1)	1.3	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	
236	土坑 6007	土師器	皿	15.2	1.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙色	
237	土坑 6007	土師器	皿	18.8	3.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
238	土坑 6051	土師器	皿	(7.2)	1.9	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
239	土坑 6051	土師器	皿	(10.4)	2.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
240	土坑 6051	焼締陶器	甕	(16.0)	[16.3]	—	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ描き	5YR4/1 褐灰色	備前
241	土坑 6066	土師器	皿	8.0	1.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	
242	土坑 6066	土師器	皿	14.2	[3.0]	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	
243	土坑 6095	土師器	皿	7.6	1.6	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙色	
244	土坑 6095	土師器	皿	9.9	2.1	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
245	土坑 6095	土師器	皿	10.3	2.2	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
246	土坑 6095	土師器	皿	14.0	3.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
247	土坑 6095	瓦質土器	鍋	28.4	12.0	—	ヨコナデ、オサエ	ナデ	5Y2/1 黒色	体部に穿孔あり
248	土坑 6119	土師器	皿	7.2	2.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
249	土坑 6119	土師器	皿	11.0	2.8	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
250	土坑 6119	土師器	皿	14.8	3.7	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/3 淡黄色	
251	土坑 6119	土師器	皿	11.4	2.0	—	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/4 浅黄橙色	
252	土坑 6119	須恵器	捏ね鉢	(22.0)	[7.5]	—	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	2.5Y7/1 灰白色	東播系

遺物 番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
253	土坑 6119	施釉陶器	入子	(8.2)	3.2	4.2	ロクロナデ、底 部糸切り	ロクロナデ	2.5Y7/1 灰白色	口縁部輪花 13世紀中葉～14世紀前葉 (古瀬戸編年前期Ⅲ期～中 期Ⅱ期)
254	土坑 6119	施釉陶器	卸し皿	(14.4)	2.9	—	ロクロナデ、底 部糸切り	卸し目	2.5Y8/3 淡黄色	13世紀中葉 (古瀬戸編年 前期Ⅲ期)
255	土坑 6251	土師器	皿	(11.6)	2.8	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	
256	土坑 6251	瓦質土器	鍋	(26.2)	[5.7]	—	ヨコナデ、ナデ、 オサエ	ヨコナデ、ナデ	10YR5/2 灰黄褐色	
257	土坑 6293	土師器	皿	7.0	1.8	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
258	土坑 6293	土師器	皿	9.2	1.8	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
259	土坑 6293	土師器	皿	(12.0)	[2.9]	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ	10YR8/2 灰白色	
260	土坑 6293	瓦質土器	火鉢	—	[9.0]	22.8	ミガキ	ナデ	N2/ 黒色	
261	土坑 6293	施釉陶器	天目茶碗	(13.8)	[4.2]	—	施釉、ロクロケ ズリ	施釉	10YR2/1 黒色	
262	土坑 6293	青磁	碗	—	[3.8]	6.0	施釉、ロクロケ ズリ	施釉	10Y5/2 オリーブ灰色	
263	土坑 6295	土師器	皿	6.0	0.9	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄褐色	
264	土坑 6295	土師器	皿	(8.6)	1.4	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄褐色	
265	土坑 6295	土師器	皿	(14.6)	14.6	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙色	
266	土坑 6295	土師器	皿	(13.0)	3.3	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白色	
267	土坑 6295	瓦器	碗	(14.1)	3.7	—	ヨコナデ、オサ エ	ミガキ	N4/ 灰色	
268	土坑 6295	焼締陶器	甕	(34.6)	[8.8]	—	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y8/1 灰白色	
269	土坑 6295	陶器	片口鉢	—	[6.4]	(16.0)	ロクロナデ、ヘ ラケズリ、ヘラ ナデ、ナデ	ロクロナデ	2.5Y6/1 黄灰色	外面底部に墨書、内面に 使用痕あり
270	土坑 6295	輸入陶器	壺	9.6	39.1	9.7	施釉	ロクロナデ	10YR3/1 黒褐色	
271	土坑 6295	輸入陶器	盤	32.0	8.5	28.0	ロクロナデ	施釉	7.5Y6/6 橙色	底部外面に墨書あり
272	土坑 6505	土師器	皿	9.0	1.8	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄褐色	
273	土坑 6505	土師器	皿	14.2	2.8	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
274	土坑 6531	土師器	皿	7.2	1.8	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y7/3 浅黄色	
275	土坑 6531	土師器	皿	12.7	3.2	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/4 浅黄褐色	
276	土坑 6531	土師器	皿	14.4	3.0	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄褐色	
277	土坑 6531	土師器	皿	9.2	2.1	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
278	土坑 6531	瓦質土器	火鉢	48.0	[8.8]	—	ミガキ	ナデ	N5/ 灰色	
279	土坑 6531	施釉陶器	小杯	(9.2)	[3.0]	—	施釉	施釉	7.5Y8/3 浅黄色	14世紀後葉～15世紀初 (古瀬戸編年後期Ⅰ～Ⅱ 期)
280	土坑 6540	土師器	皿	6.3	1.2	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
281	土坑 6540	土師器	皿	6.5	1.8	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/2 灰白色	
282	土坑 6540	土師器	皿	10.6	2.7	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	2.5Y8/3 淡黄色	
283	土坑 6540	土師器	皿	8.3	1.5	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄褐色	
284	土坑 6540	土師器	皿	12.2	2.7	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄褐色	
285	土坑 6540	瓦質土器	鍋	25.0	[7.7]	—	ヨコナデ、オサ エ、ナデ	ヨコナデ、ハケ メ	2.5Y8/1 灰白色	
286	土坑 6540	白磁	四耳壺	11.2	[6.4]	—	施釉	施釉	2.5GY7/1 明オリーブ灰色	
287	土坑 6540	青磁	碗	(16.0)	[5.0]	—	施釉	施釉	7.5YR4/3 褐色	
288	土坑 6584	土師器	皿	(8.2)	1.2	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄褐色	
289	土坑 6584	瓦質土器	羽釜	(26.0)	[12.0]	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR5/1 褐灰色	
290	石組み 6623	土師器	皿	7.9	1.6	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	
291	石組み 6623	土師器	皿	10.2	2.4	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/2 にぶい黄褐色	
292	土器 6275	土師器	皿	11.5	3.0	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/3 浅黄褐色	
293	土器 6275	土師器	皿	11.3	2.7	—	ヨコナデ、オサ エ	ヨコナデ、ナデ	10YR7/4 にぶい黄褐色	
294	土坑 7034	土師器	甕	(15.6)	[3.9]	—	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ ケズリ	10YR8/3 浅黄褐色	布留式

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
295	竪穴状遺構7030	灰釉陶器	椀	—	[2.0]	(7.0)	ロクロナデ	施釉	7.5YR/1 灰白色	9世紀前葉(黒笹14号窯式期古段階)
296	竪穴状遺構7030	須臾器	鉢	(20.6)	[7.0]	—	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y6/1 黄灰色	8世紀～9世紀
297	自然流路	弥生土器	壺	(23.9)	[5.8]	—	ナデ、キザミ	ナデ、ヨコナデ、突起一点	10YR8/4 浅黄橙色	
298	自然流路	弥生土器	壺	(17.4)	[2.0]	—	ナデ、ヨコナデ、ハケ、キザミ	ナデ、ハケ、刺突列点文	10YR7/4 にぶい黄橙色	
299	自然流路	弥生土器	壺	—	[9.4]	7.3	ナデ	ナデ	2.5Y8/3 淡黄色	
300	自然流路	弥生土器	甕	(15.6)	[5.6]	—	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	7.5YR7/4 にぶい黄橙色	
301	自然流路	弥生土器	壺	—	[4.3]	6.4	ケズリ、ナデ	ナデ、ハケ	10YR8/2 灰白色	

第7表 出土金属製品観察表

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			備考
				短径	長径	高さ/厚さ	
金1	石組み1014	青銅製品	鏢	[4.5]	[5.4]	0.15	四方に1葉ずつ酢漿草文の透かしを配する
金2	石組み1016	青銅製品	銭	[2.1]	2.7	0.15	寛永通寶
金3	土坑1043	青銅製品	煙管	小口:1.1 口元:0.5	9.6	器壁:0.1	羅字煙管の吸い口である
金4	土坑2098	青銅製品	襖金具	1.3	[6.9]	0.1	縁飾りまたは取手 平面に2mm程の穴を2箇所に通す
金5	土坑2098	青銅製品	襖金具	5.4	7.0	0.25	縁金具か 直角に折れる
金6	土坑2098	鉄製品	釘	-	6.4	0.5	釘頭1.7cm
金7	土坑2098	鉄製品	釘	-	[5.9]	0.7	釘頭1.8cm
金8	土坑2098	鉄製品	釘	-	[5.5]	0.9	釘頭1.7cm
金9	土坑2098	鉄製品	釘	-	[4.9]	0.7	釘頭1.6cm
金10	土坑2098	鉄製品	釘	-	[4.9]	0.6	釘頭1.3cm
金11	土坑2098	鉄製品	釘	-	5.1	0.6	釘頭1.1cm
金12	土坑2098	鉄製品	釘	-	5.4	0.5	釘頭0.8cm
金13	土坑2098	鉄製品	釘	-	4.6	0.5	釘頭1.3cm
金14	土坑2098	鉄製品	釘	-	4.5	0.6	釘頭1.0cm
金15	土坑2098	鉄製品	釘	-	4.3	0.55	釘頭1.0cm
金16	土坑2098	鉄製品	釘	-	3.2	0.4	釘頭1.1cm
金17	土坑2098	鉄製品	釘	-	2.8	0.5	釘頭1.2cm
金18	土坑2098	鉄製品	釘	-	3.2	0.4	釘頭0.8cm
金19	土坑2098	鉄製品	釘	-	3.8	0.5	釘頭0.65cm
金20	土坑2098	鉄製品	釘	-	3.3	0.4	釘頭0.9cm
金21	土坑2098	鉄製品	器種不明	5.8	[9.1]	引輪:0.9 引手:1.1	引き輪状
金22	土坑2098	鉄製品	釘等	-	-	-	鉄製品が多く固着したもの
金23	土坑2098	青銅製品	襖金具(引手)	[2.2]	[4.8]	1.2	
金24	土坑2098	青銅製品	襖金具(引手)	[4.6]	[5.1]	1.1	
金25	土坑2098	青銅製品	襖金具(引手)	[3.8]	[4.1]	1.1	
金26	土坑2098	青銅製品	襖金具(引手)	5.1	5.9	1.1	甲菊木瓜形。上下に穿孔(釘穴)あり
金27	土坑2098	青銅製品	襖金具(引手)	[4.0]	5.8	0.1	甲菊木瓜形
金28	土坑2098	青銅製品	襖金具(引手)	3.8	[5.0]	0.1	
金29	土坑2098	青銅製品	襖金具(引手)	3.6	[4.2]	0.1	
金30	土坑2098	青銅製品	襖金具(引手)	-	-	0.1	
金31	土坑2134	青銅製品	銭	[2.45]	2.5	0.1	皇宋通寶(篆書体) 北宋銭
金32	土坑3161	青銅製品	簪	-	22.5	0.5	裝飾無 上部11cmを振る
金33	土坑3161	鉄製品	釘	-	5	0.5	釘頭1.4cm
金34	溝4012	不明	鍍金	0.2	0.3	0.02	
金35	土坑4044	不明	鍍金	0.2	0.9	0.03	
金36	土器溜り4168	青銅製品	釘	-	[3.7]	0.2	
金37	土器溜り4168	青銅製品	銭	2.6	2.6	0.2	古寛永
金38	土器溜り4168	青銅製品	銭	2.6	2.6	0.2	古寛永
金39	土器溜り4168	青銅製品	銭	2.55	2.55	0.2	古寛永
金40	土器溜り4168	青銅製品	銭	2.6	2.6	0.2	古寛永
金41	土器溜り4168	青銅製品	銭	2.6	2.65	0.2	判読不能
金42	土器溜り4168	青銅製品	銭	2.6	2.6	0.2	判読不能
金43	土器溜り5062	鉄製品	釘	-	[6.5]	0.5	
金44	土器溜り5062	鉄製品	釘	-	5.3	0.2	
金45	土器溜り5062	鉄製品	釘	-	[3.5]	0.2	
金46	土器溜り5083	青銅製品	銭	2.6	2.6	0.15	元祐通寶(篆書体) 北宋銭
金47	土器溜り5105	鉄製品	刀子	1.8	[8.7]	0.5	
金48	土器溜り5129	青銅製品	銚子	口径:12.4	底径:5.0	器高:4.45	
金49	土坑5210	青銅製品	襖金具(引手)	3.3	(6.3)	0.1	木葉形の引手
金50	土器溜り6117	鉄製品	釘	-	[5.0]	0.4	
金51	土器溜り6117	鉄製品	釘	-	[3.5]	0.6	
金52	土器溜り6117	鉄製品	釘	-	[3.4]	0.2	
金53	土器溜り6117	鉄製品	釘	-	[2.8]	0.2	
金54	土器溜り6117	鉄製品	短刀	刀身幅:2.2	[28.7]	刀身厚:0.5	

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			備考
				短径	長径	高さ / 厚さ	
金 55	土器溜り 6165	鉄製品	釘	-	6.7	0.6	釘頭 1.0cm
金 56	土器溜り 6165	鉄製品	釘	-	5.5	0.5	釘頭 0.6cm
金 57	土器溜り 6165	鉄製品	釘	-	[3.5]	0.6	釘頭 0.5cm
金 58	土器溜り 6165	鉄製品	釘	-	[2.0]	0.5	釘頭 0.7cm
金 59	土器溜り 6165	鉄製品	短刀	1.7	[6.1]	0.45	
金 60	土器溜り 6192	鉄製品	短刀	刀身幅: 2.35	[23.0]	刀身厚: 0.75	
金 61	土器溜り 6192	鉄製品	短刀	刀身幅: 2.2	[28.1]	刀身厚: 0.5	
金 62	土坑 6293	青銅製品	銭	2.5	2.5	0.1	開元通寶 唐銭
金 63	土坑 6293	青銅製品	銭	(2.5)	2.5	0.1	
金 64	土器溜り 6343	鉄製品	鑿	茎: 2.2	穂: 11.7	0.8	
金 65	土器溜り 6376	鉄製品	釘	-	[6.0]	0.45	
金 66	土器溜り 6376	鉄製品	釘	-	[4.6]	0.5	
金 67	土器溜り 6376	鉄製品	釘	-	[4.0]	0.5	
金 68	土器溜り 6376	鉄製品	釘	-	[3.6]	0.5	
金 69	土器溜り 6376	鉄製品	釘	-	[3.8]	0.45	釘頭 0.7cm
金 70	土器溜り 6376	鉄製品	釘	上片: [1.2]	下片: [2.0]	0.4	
金 71	土器溜り 6377	鉄製品	釘	下片: 1.0	上片: 1.8	0.2	釘頭 0.7cm
金 72	土器溜り 6377	鉄製品	釘	-	[4.2]	0.4	
金 73	土器溜り 6377	鉄製品	釘	-	[8.7]	0.6	
金 74	土器溜り 6377	鉄製品	刀子	1.7	[7.7]	-	
金 75	土坑 6531	青銅製品	銅板	[4.8]	[5.7]	0.1	
金 76	土坑 6531	青銅製品	銅板	[2.2]	[3.2]	0.1	
金 77	土坑 6531	鉄製品	釘	-	[5.3]	0.5	
金 78	土坑 6531	鉄製品	釘	-	[3.5]	0.45	
金 79	土坑 6540	青銅製品	銭	2.5	2.5	0.1	
金 80	土坑 6540	鉄製品	釘	-	5.8	0.5	釘頭 1.1cm
金 81	土坑 6540	鉄製品	釘	-	5.9	0.5	釘頭 1.1cm

第 8 表 出土石製品観察表

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			色調	備考
				長さ	幅	厚さ		
石 1	石組み 1040	石製品	踏段	31.5	37.4	25.6	2.5Y8/2 灰白色	
石 2	土坑 2035	石製品	茶臼	長径: [29.8]	孔径: 2.4	10.2	N4/ 灰色	
石 3	土坑 5150	石製品	耳石	[27.3]	[12.4]	[10.5]	2.5Y8/1 灰白色	
石 4	土器溜り 6377	石製品	硯	[15.2]	[6.2]	3.3	N5/ 灰色	
石 5	土坑 6540	石製品	不明	9.2	6.5	1.4	N6/ 灰色	
石 6	集石 6090	石製品	丸輶	2.4	3.7	0.7	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色	
石 7	土器溜り 5129	石製品	砥石	[7.1]	3.0	1.4	2.5Y7/4 浅黄色	
石 8	土坑 6235	石製品	砥石	[8.1]	3.1	2.0	5Y8/2 灰白色	
石 9	土坑 6365	石製品	砥石	[10.2]	3.0	2.8	5Y8/2 灰白色	

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうごじょうさんぼうななちようあと・からすまあやのこうじいせき
書名	平安京左京五条三坊七町跡・烏丸綾小路遺跡
副書名	白樂天町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	イビソク京都市内遺跡調査報告
シリーズ番号	第15輯
編著者名	熊谷洋一、小池智美
編集機関	株式会社イビソク関西支店
所在地	〒612-8425 京都府京都市伏見区竹田田中殿町86番地 TEL 075-632-8109
発行年月日	2017年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょうごじょう 平安京左京五条 さんぼうななちようあと 三坊七町跡・ からすまあやのこうじいせき 烏丸綾小路遺跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 むらまちどおりぶつこうじ 室町通仏光寺 あが はくらくてんちよう 上る白樂天町 523-1、524、 524-1	26106	1・712	35° 00′ 06″	135° 45′ 28″	20150819) 20160119	396 m ²	集合住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京五条 三坊七町跡・ 烏丸綾小路遺跡	都城跡 集落跡	弥生時代・古墳時代	自然流路・土坑	弥生土器	
		平安時代前期	竪穴状遺構	須恵器・灰釉陶器・石製品	
		平安時代後期～鎌倉時代	土器溜り、土坑、ピット	土師器・陶磁器	
		室町時代	土器溜り、集石、石組み遺構 溝 土坑 ピット	土師器・陶磁器・瓦質土器・金属製品	
		戦国時代～江戸時代前期	石組み遺構 溝 整地層 土坑 ピット	土師器・陶磁器・瓦質土器・石製品	
		江戸時代	石組み遺構 埋甕遺構 土坑 ピット	土師器・陶磁器	
要約	<p>弥生時代中期・古墳時代前期の土器が出土した自然流路および平安時代～近世にかけての平安京に関連する7面の調査を行った。特に、平安時代後期～鎌倉時代前期の遺構が確認された第6遺構面では、土葬墓と考えられる長方形の土器溜り土坑を6基検出した。このうち2基の土器溜り土坑からは、短刀が出土している。6基の土坑は、12世紀と14世紀～15世紀の2時期に分かれる。また、これまで京都では出土例がないヤコウガイの廃棄土坑を検出した。遺構（土坑・ピット等）包含層中からは、多数の砥石が出土し、ヤコウガイの加工等との関連が想起される。</p>				

平安京左京五条三坊七町跡・烏丸綾小路遺跡

—白楽天町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 2017年3月

編集
発行 株式会社イビソク関西支店

住所 京都府京都市伏見区竹田田中殿町8番地
〒612-8425 TEL 075-632-8109

印刷 富士出版印刷株式会社